

---

# バカとお姉と召喚獣

Xion

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとお姉と召喚獣

### 【Nコード】

N4399V

### 【作者名】

Xion

### 【あらすじ】

この小説は“バカとテストと召喚獣”の二次創作作品です。

オリキャラが明久や秀吉、雄二、ムッツリー二といったFクラスの面々や翔子や優子、愛子などのAクラスの面々と楽しい日常を過ごしていく（予定）の物語。

また木下姉弟、吉井姉弟に妹が1人いたり、一部のキャラの性別が転換していたりします。

一応は原作に沿って行くと思いますのでよろしく願います。

なお、この小説のCPは明久×瑞希・明久×美波ではないのでそれ

もまたよろしく願います。

またこの小説は文字数6000文字に合わせて編集しているので1200文字標準では見づらいかもしれませんのでそういう方は小説閲覧設定より文字数設定を6000にして閲覧してください。

## 設定（前書き）

この小説は“バカとテストと召喚獣”の二次創作です。

オリキャラが明久や秀吉、雄二、ムツリー二等のFクラス面々や翔子や愛子、優子などのAクラスの面々と楽しい毎日を過ごしていく（予定）の物語。

ほかにも木下優子・秀吉に妹がいたり吉井玲・明久（♀）に妹がいたりします。

明久×瑞樹・明久×美波ではありませんので、そういうのじゃないと駄目だという人はバックしてください。

一応原作沿いで行きたいと思っています。  
感想お待ちしています。

8 / 17 日 吉井秋加筆

## 設定

吉井秋

Sex：女

Class：F

Birthday：10月18日

血液型：A

Size：B：94 W：47 H：87

High：164cm

吉井財閥の次女。

吉井家一の才女でかなりの天才。

その天才ぶりは見ただけであらゆる問題・疑問の答えが即座に脳内に浮かぶ。

しかし、他人は兎も角、自分の恋愛ことには疎い傾向がある。

幼い頃は神童と言われていたが今現在ではその面影も無いがそれは本来の能力を隠している為。

普段の学園生活では妹の優希に負けず劣らずのバカとして有名で、

教師陣からは要注意人物として見られている。

本来の能力を知っているのは姉である玲と優子のみ。

木下優子・秀吉・楓達とは幼馴染でもあり吉井家と木下家は家族ぐるみの付き合いをしている。

容姿端麗で運動神経もよく料理もできるので他のクラスやFクラスの男子にかなり人気がありムツツリ商会でも秀吉と負けず劣らずの人气がある。

稀有な能力のため苦手科目はなく、また得意教科も無い。

また吉井家は世界有数の企業の為、実家はかなりのお金持ちでお嬢様。

しかし、周りに飾らないその態度のお陰で社交の場での人気は高い。

（召喚獣）

- ・ 服装：騎士甲冑
- ・ 武器：両刃剣（中央で分割すると双剣・双銃にもなる）
- ・ 腕輪：？？？

銃での攻撃は如何なる手段を用いようと相手の元々の点数×0・05のダメージを与える事が可能。

木下優子

Sex：女

Class：A

木下家の長女で一卵性でもないのにも関わらず3人とも瓜二つの容姿を持つ。

学校では明るく社交的で愛想の良い優等生。

その模範的な生徒像は学園のプロモーションビデオの主演に抜擢されたほど。

しかし家ではかなりのズボラで常に下着がジャージ姿で生活し、弟への折檻でありとあらゆる関節を逆方向へ曲げるなどかなりバイオレンスな性格をしていたが秋のお陰で大分、温和になっている。

また隠れ腐女子であり、秀吉によると家には通販で購入した大量のBL・GL本が溜め込まれている。

そうした実の姿を外では微塵にも出さない点から、自分も弟と同様に大層な演技派である事は自覚している。

幼い頃に秋に危険なところを助けられておりその時に一目惚れしているが想いを告げられずにいる。

〔召喚獣〕

- ・ 服装：西洋鎧
- ・ 武器：大剣
- ・ 腕輪：？？？



## 設定（後書き）

はじめまして、Xionです。

この小説をお読みいただきありがとうございます。

誤字脱字などがあるかもしれないので見つけた場合指摘してくださいと嬉しいです。

オリキャラの設定は次に出しますので待っていてください。

時々、キャラについて更新することがあるのでご了承ください。

その他の原作キャラは原作通りで行きます。

なお、物語の視点は基本的には秋視点で進めますのでお願いします。

## オリキャラ設定（前書き）

こちらはオリジナルキャラクターの設定です。

こちらでもキャラの更新を行うかもしれませんがよろしくお願いします。

8 / 17 吉井優希 加筆

## オリキャラ設定

吉井優希

Sex：女

Class：F

Birthday：10月18日

血液型：A

Size：B：94 W：47 H：88

High：164cm

吉井財閥の三女で末っ子。

吉井秋の一卵性の双子の妹。

2人を見分けられるのはごく少数で初見で見分けるのはほぼ不可能。

姉の玲・秋と違ってバカ。

しかし、世界史・日本史・家庭科科目のみはAクラス上位並の実力がある。

2人の姉を自慢の姉達と思っており特に秋に対しては並々ならぬ執着を見せている（シスコン）。

一年生の時に翔子、愛子とはクラスメイトだった。

試験当日に高熱で倒れた瑞希を保健室へ運んだために途中退席での無得点扱いとなりFクラス行きが確定した。

1年の時に起こしたとある事件の所為で観察処分者の称号を与えられている。

実家はお金持ちのはずなのだから一月のお小遣いは秋の要望で一介の高校生と大体同じレベルのお陰でかなりの貧乏性となっている。

実家の英才教育は肌が合わないのか全くと言っていいほど出来ず、家庭教師を困らせた経験がある。

（召喚獣）

- ・ 服装：学ラン
- ・ 武器：日本刀
- ・ 腕輪：？？？

木下楓

Sex：女

Class：F

Birthday：10月26日

血液型：AB型

3 Size : B : 85 W : 45 H : 82

High : 163 cm

一卵性で無いのにも関わらず見た目は優子や秀吉そっくりの木下家次女。

優子と秀吉は自慢の姉と兄であると思っている。

勉強は姉と兄の中間程度、具体的にはCクラスの上位並み。

家では姉と代わる代わる料理をしているので下手ではない。

2人に迷惑をかけるのが嫌いでそのことをコンプレックスとしており、時折無理をしてしまう傾向がある。

趣味は料理や読書（BL・GLではない）

吉井家の面々とは幼馴染で仲が良い。

得意科目は家庭科や現文などの文系科目、理数系は苦手だが全く出来ないというわけではない。

本来ならFクラスではなくCまたはBクラスに入る成績だが試験前日に高熱を出してしまった為、試験を受けていない。

（召喚獣）

服装：巫女服

武器：青龍偃月刀

腕輪：風林火陰山雷

・風林火陰山雷の文字にあわせて様々な能力を発揮する。

《風》は点数消費に応じて自身の召喚獣の速度が上がる。

点数を1消費すると上がる速度は0.1倍となり消費点数に比例して速度は変わってくる。

最大で100点の消費で10倍速になるが召喚者自身の目が追いつかず直線攻撃しか制御できなくなる欠点を持つ。《林》は自身の召喚獣の気配や姿の一切を見えなくする幻影能力。

使用時は1秒につき5点ずつ消費していく。

使用している間は攻撃力が1/2されてしまう。

《火》は元々の点数の3倍されるが効力は11秒と短く効力が切れると元々の点数の30%まで強制的に落とされる。

《陰》は影を操る能力。

影があれば例えば相手の影だろうが関係なく操り相手を拘束する事が出来る。

効果発動中は一切の行動がキャンセルされる。

なお、拘束力は点数消費に比例する。

50点につき相手を5秒拘束できる。

《山》自身の召喚獣の半径5mの範囲の全ての召喚獣の速度を強制的に半減する事が出来る。

なお、半径5m以内にいる自身を除く召喚獣の数×X秒、その際、1秒につき5点ずつ消費していく。

Xに入る値は使用時間である。

召喚獣5体で使用時間は10秒の場合は以下の通りになる。

5×10＝50秒

5×50＝250点消費

《雷》は相手の如何なる攻撃を自身の方へと引き付ける避雷針の能力。

発動するには残り点数250点以上の時のみ。

50点消費で相手の元々の点数×0.05のダメージを受ける。

なお以上全ての能力を1回使うと次の能力を使用するには毎回10秒の間が必要になる。

日之影黒刀こくとう

Sex：男

Class：F

Birthday：8月5日

血液型：BO型

High：180cm

坂本雄二と同じ中学出身でその時の事件が切欠で他中学から“孤高の獅子”として恐れられている。

秋達とは文月学園で知り合い1年生の時にクラスメイトだった。

家で現在双子の姉と一緒に暮らしている。

両親は仕事の関係で海外にいるが2人の生活の仕送りはあるためめしつかり生活できている。

料理は一応嗜む程度には出来るが秋達には劣ってしまう。

低血圧の所為か朝に弱くいつも姉に起こしてもらってはいるが行事ごとなどがあったり姉が風邪など体調不良を起こしている時はそれでもない。

因みに彼女居ない歴Ⅱ自分の年齢なので彼女は欲しいらしい。

得意科目は数学と日本史、苦手科目は物理と英語。

本来の実力はB→Aクラス並だが楓同様姉が体調不良を起こしたためその看病をすることによって欠席による無得点扱いでFクラスに  
来ている。

（召喚獣）

・ 服装：FF？AC主人公のあの服

・ 武器：合体剣

・ 腕輪：武装変化

武器である剣と併行して発動するスキル。

通常状態の合体剣は全て分かれているが基盤となるファーストソードと組み合わせることによって様々な戦局に対応可能となっている。

形態を変えることに10点消費し最終形態である大剣状態へ移行する為には点数を50点を消費しなければならない。

日之影美琴

Sex：女

Class：女

Birthday：8月5日

血液型：BO型

Size：B：91 W：50 H：85

H i g h : 1 7 1 c m

黒刀の姉で容姿はそこらのアイドルより良くスタイルも抜群に良く黒髪セミロング。

黒刀に負けず劣らずの性格で豪快かつ大胆。

普段は面倒見が良く姉御肌だがキレると弟同様手が付けられなくなる。

幼い頃より料理している為、そこら辺の料亭よりも料理が美味しい。

弟や友達の事を大事に思っておりそれらの大切な人たちを侮辱されるのが大嫌い。

秋とは下に妹・弟を持っているという点で気が合う。

得意科目は文系全般で苦手科目は弟同様英語・物理。

彼女も本来Aクラス並の実力を持っているが試験の2日前からかなりの高熱の為、試験を受けていない。

〈召喚獣〉

- ・ 服装：黒い軍服
- ・ 武器：2丁拳銃・狙撃用ライフル
- ・ 腕輪：？？？

## オリキャラ設定（後書き）

以上がオリキャラ設定になります。

今後もオリキャラを増やす予定です。

そのため時折、キャラについて更新することがあるのでご了承ください。

次から漸く prologue に入ります。

それではまたの機会に〜。

ではっ！

## prologue (前書き)

バカとテストと召喚獣〜バカとお姉と召喚獣〜

prologueです。

よろしくお願いします。

## prologue

1年の終わり頃……。

私と妹である優希はここ文月学園で行われる来年度のクラス振り分け試験を受けに学園へ続く坂道を登っていた。

普段はもう少し遅く学園へと向かうのだけれど今日は大事な日という事もあって余裕を持って登校していた。

妹は非常に嫌そうにしていたけど……。

「優希、振り分け試験くらい頑張つてよ？今日のテストの成績如何では観察処分を取り消してくれるかもしれないって、西村先生も言っていたし。」

「ホントに！？それなら私も今日はこのストライカーシグマVを使つて頑張るよ！」

できればそんなもの使わずとも良い成績を取って欲しい。

因みに西村先生っていうのは浅黒い肌にスポーツマン顔負けの体格をしている一目見ただけでは教師には到底見えないような人の名前だ。

生徒の事をよく考えてくれる面倒見の良い先生だけど、生活指導の担当や補習教員という事で一部の生徒達には天敵とされている。

私も優希もその一部に入っていたりする。

私よりも問題行動の多い優希にとっては西村先生と関わることが多く既に先生には要注意人物としてマークされている。

姉である私も必然的に顔を覚えられるのは仕方の無いことだと思いたい。

このまま何事もなくテストを済ませれば今の優希でもEクラスは狙えるはず。

そうすればさつきも言ったように観察処分者なんて不名誉なものを取り下げられると思う。

「大丈夫だとは思っけどさ、確率でテスト問題を解かないでね？」

「分かってるよーアキ姉こそ頑張ってよ？」

人の気も知らないで言ってくる。

学園の門を潜ると掲示板に張り紙がしてあり試験会場の振り分けがなされていた。

「同じ会場みたいだねアキ姉？」

「そうね。さ、行くよ！」

\*\*\*

私は指定された席へと座り、優希の方へ振り向くと最後の追い込み

の為に教科書を読んでいるのが見えた。

時計を見るとまだまだ時間は余っていたのでこれなら十分な復習をする事が可能だと思う。

そして時間はあつという間に過ぎ担当教官である先生が教室へ入ってきた。

「時間です。筆記用具ならびに必要な物以外、鞆またはロッカーへとしまってください。」

担当教官の先生の指示に従い速やかに必要な物以外鞆へと仕舞い込む。

私は回ってきた問題・解答用紙を自分の分を取って残りを後ろへ回しながら裏面が向けられている問題用紙に目を向けた。

噂では振り分け試験は通常の定期考査より難しいと囁かれている。

私は点数調整できるような簡単なモノばかりだけど優希は大丈夫かな？

少し心配になってきたかも…。

「全員に回ったようですね。それでは試験を始めてください。カンニングなどの不正行為は絶対にしないように。」

先生の合図と共に全員が裏面になっていた問題用紙を一斉に表へ返し試験が始まった。

＊＊

そして事件は振り分け試験の最終科目に差し掛かり開始35分に起きた。

————ガタンッ！——

テストを解き進めていた時に背後からそんな音が聞こえた。

教室がザワザワと騒がしくなる。

私も何が起こったのか確認する為に音のした方へ身体を向けると女の子が倒れていた。

——その女の子は私も優希もよく知る人物だった。

「姫路さん！！」

倒れた女子、姫路瑞希に妹が駆け寄りその身体を抱き起こす。

見るからに苦しそうで顔も赤くかなりの高熱であることが簡単に分かった。

「姫路、試験中の途中退席は無得点扱いになるが……それでいいかね？」

近寄ってきた教師の一切の慈悲の無い台詞に妹からプチンッ！とピアノ線が切れたかのような軽快な音が聞こえた気がした。

「——かま……いま、せん。」

姫路さんは教師の台詞になんとか答えていた。

その言葉を聞くやいなや優希は姫路さんを抱えて保健室へ行く為に教室を出ようとしていた。

「吉井！待ちなさい。お前も途中退席で無得点扱いに……！！」

教師の1人がまるで脅すように制止の言葉を掛けるが今の優希はその程度じゃあ止まらない。

「構いません。」

教師の言葉に即答すると優希はそのまま教室を出て行ってしまった。

その暫く後に試験会場は漸く試験の緊迫とした雰囲気を取り戻していた。

「はあ……相変わらず、お人好しというか何と言つか……。」

私はそう呟くと今まで受けていた全ての科目の解答用紙に書いてあった自分の名前を消しゴムで消し去った。

当然、その場にいなかった優希がこのことを知るのは来年度のことになるのだった。

後悔はしてない、寧ろ点数調整にこれ以上気を掛けなくて済むから文句も無い。

恐らく、優希もあの選択に後悔なんてないんだと思う。

さあ、これから私達の学園生活が始まっていくんだ。

その先に待っているのはきっと波乱万丈のものであるだろうけど…。

優希と一緒にならきつと大丈夫だと信じている。

—— さあ、始めよう。私達の学園生活を ——

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## prologue (後書き)

いかがでしたか？

お楽しみいただけたなら何よりです。

ご感想お待ちしております！

それではまたの機会に

ではっ！

## 第1問 く私と出会いと……？（前書き）

第1話ということで始まります。

取り合えず自己紹介手前までは進めてしまいたいです。

バカテストも今回からスタートします。

なお、この小説では秋は基本的に模範解答、優希に珍解答させます。

問題によってはその限りではありませんが……（笑）

## 第1問 く私と出会いと……？

### 問題

『落ち着きはらって物事に動じないという意味の四字熟語を答えなさい。』

姫路瑞希・吉井秋の答え

「泰然自若」

・教師のコメント

正解です。他にも安らかでもそのまま変化せず平気な様子、という意味も含まれていますね。

吉井優希の答え

「ポーカーフフェイス」

・教師のコメント

意味としてはそれで正解です。

ですが正解不正解の前に問題をよく見てください。

4月、桜も満開になり町全体が春らしい暖かさと夢や希望、出会いに溢れているこの季節。

私達姉妹がこの文月学園に入学して二度目の春が訪れた。

「学校が楽しみだねアキ姉。」

と声を掛けてきたのは私の双子の妹の優希。

まるで鏡でも見ているみたいに容姿のそっくりな私達はよく他人<sup>ひと</sup>に間違えられる。

見分けられるのは優子と姉さんくらいのものだ。

…親でさえ間違えるというのにどうして分かるんだろうね？

「…そうだね。」

玄関を出て優希と一緒に学校へと向かうべく登校路を歩く。

学校へと続く坂を上っていくと見慣れた人たちがいた。

「おはよ。」

「はよ。」

私と優希は前を歩いていた木下姉妹<sup>きよくだい</sup>に声を掛ける。

「おお、秋に優希ではないか。おはようなのじゃ。」

「秋、優希おはよう。」

「おはようございますアキ姉さん、おはよう優希。」

上から秀吉・優子・楓の順に挨拶してきた。

この子達はいつも3人で学校へ登校してくるあたり、仲はかなり良い。

「相変わらず3人一緒に登校してるんだね？」

『当たり前よ（じゃ）（ですよ）』

狙い済ましたかのように3人は声を揃えて答えた。

「……仲がよろしいようで。」

そうして私達5人は他愛のない世間話をしながら学校へ向かう。

校門の前まで辿り着くとこれまた目立つ人が待ち構えていた。

「おはよう。吉井姉妹・木下姉妹。」

ドスの利いた声が聞こえてると予想通りそこにいたのは浅黒い肌をしたいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

『おはようございます西村先生。』

『おはようございます……鉄人。』

「おはようございます鉄村先生。」

軽く頭を下げて目の前の男…西村先生に挨拶した。

「木下姉妹はいいが吉井妹は言い直せてないぞ。」

そういうと鉄人は優希の方へ視線を送る。

誤魔化しきれなかった（誤魔化す気もなかっただろうけど…）優希は苦笑いしながら頭を掻いていた。

私の方は誤魔化せたみたいだね……！

「それと何を他人事みたいに行っているんだ吉井姉、お前も誤魔化せてないぞ……。」

「ははっ、バレました？」

中々良いチョイスだと思ったんだけど。

「全く、お前等という奴は……まあいい、試験の結果だ受け取れ。」

先生が私達に自分の名前が書かれた封筒を渡してきた。

一応礼を言いながら受け取ってその封を開けようとした。

「吉井姉妹、俺はこの1年間ひよつとしたら“コイツ等はバカなんじゃないか？”と疑問に思っていたんだ。」

「そうなんですか、それは酷い間違いですよ。そんなんじゃない内“節穴”なんて渾名を付けられますよ？」

「ああ、先生の目は節穴だったようだ。吉井姉妹、お前達への疑いは無くなった……。」

何故か意味深な含みを持たせて先生はそこで一拍間を空けた。

「お前達は疑いよしの無い正真正銘の“バカ”だ……！」

封を開けて中に入っていた用紙に「吉井秋 Fクラス」と書かれていた紙を見ると先生がそう言ったのは全くの同時だった。

「それと吉井妹はともかく「ちょ、それどついう意味ですか!」……吉井姉、何故お前は受験科目全ての解答用紙の名前欄の名前を無記入で提出した?」

名前を書いて出せばEかDクラスは狙えただろうに、と西村先生は言って溜め息を吐いた。

優希は自分を引き合いに出されて先生に抗議しているが完全に無視されている。

「そつなの秋?」

「ん、まあね。ほら……。」

皆まで言わずとも私の視線だけで何が言いたいのか優希以外は全員分かったようで私に同情の優希に哀れみの視線を送っていた。

「そついえば優子と秀吉、それに楓はどうだったの?」

「私はAクラスよ。」

「ワシはFクラスじゃ。」

「私もFクラスです。」

「優子すごいねAクラスって…さすが優子。秀吉は同じクラスか、また1年間よろしくね。」

「よろしくなのじゃ。」

そういうと秀吉は少しはにかんだ表情をして答えた。

——　　つてあれ？

「……あれ、楓はどうしてFなの？楓ならBくらいは行けると思ってたんだけど。」

「私は振り分け試験の時に熱で欠席してしまっ…。」

「そうなんだ、それは残念だったね。」

優希が楓にそういうと『アンタには言われたくない。』と全員が内心そう思った。

「じゃ、行こうか？」

私達は靴を履き替えて教室のある3階へ向かった。

3階へ上がると“2-A”と描かれたプレートが掛けられた教室があった。

「ここが姉上の教室かの？」

「うわあ、かなり豪華だよ楓。」

「そうだね優希。」

正直此处まで大きい教室だとは思わなかった。

恐らく普通に2クラス分は優に入るほどの大きさ、そして座席はリクライニングシート・冷暖房完備他にもドリンクバーなどが教室にあるのだから。

「じゃあ私は此处で。秀吉、楓のこと頼んだわよ（秋、秀吉のフォロ、お願いね。）。」

「じゃあね優子…（はいはい、了解しました。）」

「任せておくのじゃ姉上。」

「また後でね、優姉。」

「よし、じゃあ私達の教室へ行こうか。」

そして私達が“2-F”と描かれたプレート（というよりは板）の教室の前に着いた。

「——此处、だよな？」

思わず楓が尋ねるほどにその教室はボロかった。

Aクラスを見た後ではどうしても見劣りしてしまう。

「そうみたいだねえ……さあ行こうよ皆。」

優希がそう言って教室の扉を開けると中はやっぱりボロボロだった。

「遅いぞこのうじ虫、さっさと席に着け。」

「な、雄二にそんなこと言われたくないよ!」

開口一番、教卓にいた男子生徒で私達の友人である坂本雄二は優希にそんなことを言った。

当然、バカにされて黙っちゃいない優希は雄二に突っかかっていく。

「はあ、全く優希は……取り合えず適当に席を決めておこうかな。」

丁度窓側の席が空いているようなのでそこへ鞆を下ろす事にした。

「で、コイツはともかく、楓は何でここに居るんだ? お前ならBクラスには行けただろう?」

「楓は試験を休んだからの、故にFクラスなのじゃ。」

「そういうことか。」

秀吉の説明にそう言って雄二が納得する。

「それで、雄二はそんなところで何をしてるの?」

「ああ、暇だったんで此処に居るクラスの奴等を見てたんだ。」

既に教室内には大勢のクラスメイトが座って何かしらしていた。

「もしかして雄二がこのクラスの…？」

「そういうことだ。だからお前達は俺の兵隊ってことだな。」

そして暫く秀吉達と話し合っていると担任と思われる先生が入ってきた。

「えーおはようございます。Fクラスの担任の福原慎です。よろしく願います。」

と言いながら黒板に名前を書こうとしたみただけどチョークがないらしい。

どれだけ設備が悪いのよ……。

「まずは設備の確認と説明をしましょう。卓袱台と座布団えー不備があれば申し出てください。あと、必要なものがあれば各自で調達してください。」

——何このAクラスとの雲泥の差は。

「せんせー、俺の座布団綿がほとんど入っていません。」

「我慢してください。」

「センス、窓が割れてて風が寒いんですけど」

「わかりました。後でビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます」

「我慢してくだ「できませんよ!!?」…冗談です。木工ボンドが支給されますので自分で直してください。」

本当に同じ学費を払っているとは思えない程の設備の悪さだった。

いや、本当に…

優子のいるAクラスが今になって羨ましく思えてくるのは仕方の無い事だと思いたいよ。

t o b e c o n t i n u e d . . .

第1問 く私と出会いと……? (後書き)

取り合えず自己紹介前まで進めました。

誤字脱字等ありましたらお知らせいただければ恐縮です。

それではまたの機会に

ではっ！

## 第2問 くバカと愛と試召戦争く（前書き）

今回は自己紹介くらいは書けたらいいなあと思います。

それでは第2問、お楽しみください！

どうぞ！

## 第2問 くバカと愛と試召戦争く

### 問題

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウム代わりに用いるべき金属合金の名称の例を1つ挙げなさい。』

姫路瑞希の答え

「問題点……マグネシウムは火にかけると激しく反応する為危険であるという点。」

合金の例……ジュラルミン。」

吉井秋の答え

「問題点……マグネシウム火災を起こし家が消えて無くなる点。」

合金の例……ステンレス。」

・教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目と言う引っかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけありませんでしたね。吉井さんは普段は真面目な答えが返って来るので定期テストでもこのような解答がほしいです。

土屋康太の答え

「問題点……ガス代を払ってなかったこと。」

日之影黒刀の答え

「問題点……鍋を自作してしまったこと。」

日之影美琴の答え

「問題点……そもそも鍋を作らず購入すれば良かったこと。」

・教師のコメント

其処は問題じゃありません。

吉井優希の答え

「合金の例……未来合金（——凄く強い。）」

・教師のコメント

凄く強いと言われても。

「それでは自己紹介でも始めましょうか。では、廊下側の人からお願いします。」

スツと立ち上がったのは廊下側に席を取っていた秀吉からだった。

「ワシは木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。妹の楓共々よろしくお願いするぞい。」

そう言つてまた席に座ると周りの男子共がガヤガヤし始める。

秀吉は戸籍上は一応男と登録されているものの姉や妹と容姿があまりにも似すぎており初対面では彼を男と認識できる者は少ない。

「先ほど兄から紹介のあった木下楓です。私も演劇部に所属しています。因みにAクラスにも私達の姉がいるので3人共々よろしくお願いします。」

秀吉もそうだけど、2人とも礼儀正しい自己紹介だった。

こういう律儀なところは姉妹なんだと思わせられる。

「次の方、お願いします。」

「……………土屋康太。」

他の男子とは対照的に控えめな声で自己紹介をしたのは土屋康太。

1年生の時も彼とは同じクラスだったために知り合いがまた1人増えたということになる。

「——島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツなので。」

島田美波。

ドイツからの帰国子女で去年から日本に帰国している。

ドイツ語なら完璧にできるんだけど、向こうでの生活が長く日本や日本語だけでなく日本文化に触れ合う機会が全くというほどない為、日本語などの科目が壊滅的に悪い。

「日之影美琴だ。こっちの黒刀こくとうとは双子の姉。趣味は読書・料理とかだね。それじゃ1年間よろしくな。」

彼女は日之影美琴、弟の方が有名ではあるけど彼女とは下に兄弟とかがいるためか気が合う。

相変わらず女らしくない口調だ。

「俺は日之影黒刀。さっき姉貴が言ったけど俺たちは双子の姉弟だ。趣味は昼寝、一応言っとくけど姉貴に手を出したら容赦も遠慮もなく血祭りに上げてやるからよろしくな。」

どこら辺がよろしくなのかは置いておいて、彼は美琴の弟の黒刀。

中学の頃、雄二と一緒に腕をならしていたらしいけど、姉の教育の賜物なのかそれに似合わず頭はいい。

「くっ、折角美琴さんにアタックするチャンスだったのに奴が一緒にできないじゃないか……。」

「美琴さん……綺麗だなあ。」

「美琴さん……結婚してほしい。」

——誰だ美琴にラブコールしたのは。

さっき黒刀に言われたのにも関わらずよっぱどの命知らずらしい。

「えーっと、吉井優希です。気軽に“ハニー”って呼んでね。」

『ハニイイイイイイイイイイ！……！！……！！……！！（2 - F男子全員+秀吉）』

「——失礼、忘れてください。とにかくよろしくね。」

自分で言っておいて思わず吐き気を催したみたいで顔色悪そうにしている。

確かに気持ち悪すぎる。

「吉井秋です。さっき自爆したのは双子の妹なので妹共々よろしくお願いします。」

身体のある一部分を強調しながら自己紹介をするクラス大半の男子は血に塗れていた。

ムツツリーニは特に……。

その後も名前を告げるだけの単調な作業が続いていた時、不意にガラリと教室の扉が開いた。

そこに居たのは息を切らせて胸に手を当てている女子生徒だった。

「あの、遅れて……すいません。」

『えっ?』

誰からというわけでもなく教室全体から驚いたような声上がる。

私だってあの一件が無かったらきつと驚いていたと思う。

「ちょうど自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします。」

「は、はい。あの姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします。」

「あ、あの、質問です。」

不意にFクラスの男子生徒が手を上げて立ち上がった。

「…何で此処にいるんですか？」

その質問は恐らく全員が聞きたいことだと思っけどもう少し聞き方があると思う。

それではあんまりである。

「そ、その……試験の最中に高熱を出してしまって……。」

「そういえば、俺も熱（の問題）が出た所為でFクラスに……。」

「ああ、化学だろ？あれは難しかったな。」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて……。」

「黙れ一人っ子。」

「テストの前の晩、彼女が眠らせてくれなくて……。」

「今年一番の大嘘をありがとう。」

——予想以上にバカばっかのクラスらしい。

「で、では1年間よろしくお願いします！」

そう言って姫路さんは雄二と優希の間の席に座った。

因みに優希の前に私、その隣に美琴、雄二の前で美琴の前に黒刀という席である。

「あの姫「姫路。」…アキ姉え。」

優希が姫路さんのその後の体調でも気になったのか話しかけようとするが雄二に割って入られた。

若干、涙目である。

「は、はい！何ですか？えーっと。」

「坂本だ、坂本雄二。」

「あ、姫路です。よろしく願いします。」

「もう体調は大丈夫なのか？」

「あっそれは私も気になるよ。」

「よ……吉井さん！？」

「——優希がブスですまん。」

「そ、そんな！目もパツチリしてて身体のラインもはっきりしてて顔も可愛いし……。」

姫路さんに褒められるたびに表情が緩くなっていく優希。

雄二もまんざらではなさそうな表情をしている。

「まあそう言われると悪くはないか…。そういえば興味がある奴がいた気がするな。確か……清水——美春（♀）だったかな？」

「優希、そんなさめざめと泣かなくても。」

雄二の言葉に一瞬、期待した優希だったけど天国から一気に地獄に突き落とされたように泣いていた。

「半分冗談だ優希。」

「半分？残りの半分は！？」

「そういえば自己紹介がまだだったね、私は日之影美琴、こっちが弟の黒刀だよろしくな姫路。」

「よ、よろしく願いします。」

完全に雄二たちに優希の抗議は無視されている。

「ねえ、雄二残りの半分は！？」

無視された事で思わず声が大きくなる優希。

「はいはい、その人たち静かに……。」

——バキイイイツ！！！！

そう先生が教卓を叩いて優希たちに注意すると音を立てて崩れて壊れた。

『（幾らなんでも脆すぎるでしょ（だろ）……。』

思えばこれがFクラス一同の意見が初めて一致した瞬間だったのかもしれない。

t o b e c o n t i n u e d . . .

## 第2問 くバカと愛と試召戦争く（後書き）

というわけで自己紹介が終わりました。

今回は試召戦争の前段階くらいは書ければいいなと思っています。

それではまたの機会に

ではっ！

### 第3問 〽私と決意と試召戦争〽（前書き）

今回はDクラスとの試召戦争前くらいまで書きたいです。

それでは第3問どうぞ！

### 第3問 く私と決意と試召戦争く

#### 問題

以下の英文を訳しなさい。

This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly.

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

・教師のコメント  
正解です。きちんと勉強していますね。

木下楓の答え

「これは本棚です。私の祖母がよく使っていた。」

・教師のコメント  
今回はオマケしますが、次からは一文にしてください。

土屋康太の答え

「これは  
」

・教師のコメント  
訳せたのはThisだけですか。

日之影美琴・黒刀の答え



気丈に笑みを浮かべるものとても大丈夫には見えない。

そんな彼女を見かねたのか雄二が会話に入ってきた。

「埃の舞う教室、かびくせえ座布団、すきま風の入ってくる窓、こんな悪条件な教室じゃ病み上がりの身体じゃキツイわな。」

雄二の言葉を受けて何やら考え込んでしまった優希。

「ねえ、雄二……少しいい？」

再び優希が口を開いたのはそれから5分経った後だった。

「何だ優希？」

「此処じゃ何だから外で話そ。」

そう言つて雄二を伴つて教室の外へと出てしまった。

「……ねえ、美琴。」

「なんだい、秋。」

隣にいる美琴に話しかけると既に私の話したいことなど分かっているようでその表情は真剣なものだった。

「これから忙しくなるよ。」

「……そうだな。」

フツと笑みを零す。

優希の考えていることなんて私にとってはお見通しだ。

何年、彼女の姉をやっていると思ってるの？

「――始まるね、試召戦争が。」

そう言うのとほぼ同時に外に出ていた雄二達が中へ入ってきた。

その表情は何か決意したかのように瞳に力が宿っていた。

福原先生が戻ってくると自己紹介がまた再開した。

「坂本君、君が最後のようですよ。クラス代表でしたよね？前に出てきてください。」

「了解。」

雄二は立ち上がると教卓の前に向かった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ。」

あ、良いんだ……じゃあ。

「あー秋。お前達は今まで通りで頼む。」

チツ、気付かれた……。

折角、ゆー君と呼んであげようと思ったのに。

「（あぶねえ、絶対アイツ変な呼び方にしようとしてたな。）」

雄二の顔にそう書いてあったため、何を考えているのかは分かった。

「さて、皆に1つ聞きたい。」

一度言葉を区切ってクラス全体を見渡す。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが、俺らFクラスの設備は――。」

再び言葉を区切り今度は設備の方へ視線を移した。

かび臭い教室。

古く綿も満足に入っていない座布団。

薄汚れた卓袱台。

所々腐った畳。

「――不満は無いか？」

そう静かに告げた。

『大有りじゃあつつつ！！！！！』

2・Fの全員の叫びだった。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を感じている。」

「そうだそうだ！」

「幾ら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！」

「同じ学費払ってるのにAクラスと差がありすぎる！」

ダムの水が許容量を超えて溢れ出すように不満が爆発するFクラスのメンバー。

「みんなの意見は尤もだ。そこでこれは代表としての提案だが。」

そこで一旦言葉を区切り、恐らく本日最大の衝撃を皆に与えるであろう言葉を言い放った。

「我がFクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う。」

雄二の宣言にクラスは一瞬、静かになったものの直ぐにあちこちから否定的な意見が上がり始めた。

「Aクラスに勝てるわけが無い。」

「これ以上、設備を落とされるなんて嫌だ。」

「楓さん、姫路さん、美琴さん達がいれば何もいらない。」

誰一人として賛成の意見は上がらない。

それもそのはず、AクラスとFクラスの差は歴然としている。

恐らくAクラスの生徒1人に対してFクラス5人ですら厳しい。

しかも幾ら最下層であるFクラスといえど負ければ設備は1ランク低くなる。

それと余談だけど最後の方に妄言を吐いた生徒は黒刀によるOH  
ANASHI をすることになったのを追記しておく。

しかし、それでも雄二の余裕そうな表情は崩せない。

「確かに普通に考えればFクラスはAクラスには逆立ちしたって勝てない。だが、俺達にはAクラスに対抗できる要素が揃っている。その要素をこれから見せよう。」

その言葉を受けてさらにざわめくクラスのみんな。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路と姐さんに楓のスカートを覗いてないで前に来い。」

「……………!!!(ブンブン)」

「は、はわっ。」

「ひゃっ!!！」

「――。」

必死になって顔をと手を左右に振り否定のポーズを取っている少年でも残念なことに、右頬についている畳の痕という決定的証拠が隠しきれていない。

大人しく教卓の方へ行く際、何故だかムツツリーニの表情が悔しそうに歪んでいたのは何でかな？

「土屋康太。本名ではあまり知られていないが、こいつが彼の有名な“寡黙なる性職者”だ。」

「ムツツリーニ、だと……？」

「馬鹿な、奴がそうだというのか……。」

「だが見る。あそこまで明らかな証拠を必死に隠そうとしているぞ。」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ……。」

“寡黙なる性職者”の名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以って挙げられる。

私はもう慣れてるからそんなことはないんだけど……。

「流石はムツツリーニだ。私のような凡人とは格が違う。」

なんて我が妹からそんな言葉を聞くとは思わなかった。

スツと妹に気が付かれない様に接近すると腰に抱きつく。

「え……?」

「アンタは女でしょうがつっ!!!」

そのまま後方へバックドロップを掛けた。

凄まじい音と共に優希を後方へと叩きつける。

「オオオオオ~~~~!!!!!!背中に激しい痛みを感じるう~~~~!!  
!~!!」

「何で女の子と同じ女子のスカートの中を覗こうと画策してるのよ  
!~!!」

「痛い痛い痛いっ!!何か曲がっちゃいけない私の骨が曲がってる  
ううう~~~~!!!!」

その体勢から更に優希の背骨を折らんとかなりの圧力を掛ける。

その際、当然私のスカートのブロックは甘くなるが……。

「……っ!??」

やっぱりムツツリーニは私のスカートを覗きに来ていた。

でもね……私、今日はスパッツ穿いてきてるんだよ?

「あー話を元に戻すぞ。姫路もうちの貴重な主戦力だ。期待している。」

「えっ？ わ、私ですか？」

確かにAクラス次席並の実力を持つ姫路さんは大きな戦力になる。

「それに木下秀吉・楓だっている。」

楓はともかく秀吉は学力ではあまり聞かないけど、演劇部のホープだったり双子の姉のこととかで有名だ。

「更に日之影姉弟もいる。」

彼女達も本来Aクラス並の学力を持っている。

確かにこれは勝てる要素足りえる。

「当然、俺も全力を尽くす。」

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『確かになんだかやってくれそうな奴だ。』

『実力はAクラスレベルが4人もいるってことだな！』

士気は一気に上昇し既にイケイケになっている。

これはいけるかもしれない。

「それに、吉井優希だっている。」

……シーン……

そして一気に静まった。

「ちょっと雄二！ どうして私の名前を呼ぶの！？ 全くそんな必要はないよね！」

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは“観察処分者”だ。」

「わあ、さらっと流した！」

「…それってバカの代名詞じゃなかったっけ？」

「ち、違うよ！ ちょっとお茶目な16歳に付けられる愛称で「そうだ。バカの代名詞だ。」肯定しないでバカ雄二！」

観察処分者は主に教師の雑用係となる役職だが召喚獣に物理能力が備わるというメリットがある。

それだけでなく他の生徒より召喚獣を操る機会が多い為に操作において彼女の右に出るものはいない。

ただ召喚獣の疲れや痛みの何割かはフィードバックしてしまうデメリットもあるんだけど。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

『お、おー……。』

場の雰囲気には圧されたのか姫路さんや楓たちも小さく拳を作り揚げていたのだった。

t o b e c o n t i n u e d . . . .

### 第3問 く私と決意と試召戦争く（後書き）

戦力紹介までが限界でした……。

Dクラスの宣戦布告とかはまたの機会に書きたいと思います。

ではではっ！

#### 第4問 く妹と純真と宣戦布告く（前書き）

今回はDクラスへの宣戦布告篇です。

それでは、どうぞ！

#### 第4問 く妹と純真と宣戦布告く

##### 問題

『以下の意味を持つ諺を答えなさい。』

- (1) 得意な事であつても失敗してしまうこと。  
(2) 悪い事があつた上に更に更に悪い事が起きる喩え。』

##### 木下楓の答え

- 「(1) 弘法も筆の誤り  
(2) 泣きつ面に蜂。」

##### ・教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”や“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

##### 土屋康太の答え

- 「(1) 弘法の川流れ。」

##### ・教師のコメント

シュールな光景ですね。

##### 日之影黒刀の答え

- 「(1) 猿も筆の誤り。」

##### ・教師のコメント

猿の筆の腕は三筆に遠く及ばないでしょう。

吉井優希の答え

「（２）泣きつ面蹴ったり。」

・教師のコメント

君は鬼ですか……。

「優希にはDクラスへの宣戦布告の死者になつてもらう。」

「今、間違いなく字が違ったよね？ それに下位勢力の使者って大概酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ、奴等がお前に危害を加えることは無い。騙されたと思つて逝つて来い。」

「……本当に？」

「当たり前だ。俺を誰だと思っている。」

「——分かったよ。それなら使者は私が行ってくる。」

「ああ、頼んだぞ。」

そうして優希はやる気に満ちた表情で教室を出て行った。

その十分後、優希は命からがらといった様子で帰ってきた。

「ゆう~~~~じい~~~~。」

とっても恨めしそうにけしかけた当の本人を見ているが全く悪びれ

もしていない。

「優希はもう少しさ、人を疑うという事を覚えようよ。」

「そうじゃの、秋の言う通りじゃ。」

私だけでなく秀吉にすらそう言われ楓の方へ助け舟を求めたような目をしている。

「今回ばかりはフォローできませんよ?」

「お前はバカか……いやバカなんだろうな。」

楓にも見捨てられ黒刀にも貶されている。

色々な意味で悲惨な目に遭った優希であった。

\*\*\*

「で、優希。宣戦布告はしてきたな?」

「うん、一応今日の午後に開戦予定とは告げてきたけど……。」

私達は現在屋上にて作戦会議を行っている。

「じゃあ先にお昼ご飯ってことね?」

「そうだ。優希、今日の昼くらいはまともな物を食べるよ?」

「そう思っんならパンでも奢ってくれと嬉しいんだけど。」

「えっ？優希ちゃんってお昼食べないんですか？」

姫路さんだけが驚いた様子でいたが、此処に居る殆どの人はどうして優希がお昼をまともに食べていないのか知っている。

呆れる事に我が妹は娯楽や趣味に没頭するあまり、食事代までつき込んでしまっている。

「いや、食べてるけど……。」

「あれは食べていると言えるのか？」

雄二のツツコミが入るが恐らくこの場に居る姫路さんと（恐らくだけど）島田さん以外の全員が同じことを思っている。

「何が言いたいのさ。」

「いや、お前の主食って水と塩だけだろ？」

「……ソルトウォーター。」

姉としての感想を言えば個人的に水は主“食”ではなく主“飲”だと思う。

「失礼な……！きちんと砂糖だって食べてるよ！」

「優希、そういう問題じゃないの……。」

「水と塩と砂糖は食べるとは言わないな。」

「……正確には舐めるが正解。」

私は妹の食生活に溜め息を吐きながら優希に話しかけた。

ある物を持ちながら。

「試召戦争なんかなかったらあげないつもりだったけど今日は仕方ないから私の弁当を分けてあげるよ。」

「ホント！？流石はアキ姉！！」

優希は満面の笑みで私に抱きつきながら喜んでいた。

——なんだかコッチが照れてきちゃう。

「弁当1つで大袈裟だよ。」

いや、待てよ。

妹の今の食生活なら大袈裟じゃないのかな？

体験なんてしたくもないから今の私じゃ分からないけど。

「ほら、一段分あれば充分でしょ？」

「うん、これだけあれば大丈夫だよ！」

本当に嬉しそうな顔でどんどん食べ進めていく。

これはいつか姉さんが来る前に優希の食生活を改善する必要があるみたい。

「ホントに秋は妹に甘いな。」

「む、悪い?」

「いや、悪くないさ。空腹で実力を出し切れなかったなんて洒落にならないからな。」

「それにしても、ただでさえ小食な女子のお弁当を一段分も食べるなど、傍から見ればあまり好ましくはないじゃろつ。まあ、秋の弁当は美味いから仕方ないとは思うのじゃが……。」

「あ、あの優希ちゃん。」

「なに、どうしたの姫路さん?」

唐突に姫路さんが何か決心したかのような顔をして優希に尋ねていった。

「よろしければ明日は私がお弁当を作ってきてましようか?」

「え?本当にいいの?私としては願ったり叶ったりだけど、迷惑じゃない?」

「はい、構いませんよ。よろしければ皆さんの分のお弁当を作ってくださいましようか?」

「俺達にも?いいのか?」

「はい。嫌じゃなかったら。」

でも、流石に10人分は厳しいと思う。

いや、弁当箱の許容量を軽くオーバーしているから。

「私も作ってくるよ、10人分も用意するのは流石に大変だし。」

「そうですね、分かりました。そうしましょう。」

コホン、と此処で雄二が咳払いした。

本題に入ろうということだね。

「話しがかなり逸れたな。試召戦争の話に戻ろう。」

「雄二、1つ気になったのじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？  
段階を踏んでいくならEクラスが打倒じゃろうし、勝負に出るなら  
Aクラスじゃろう？」

「まあな。当然考えがあつてのことだ。」

「そうなのか？」

「ああ、色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない  
理由は簡単だ。戦うまでも無い相手だからな。」

「でも、私達よりもクラスは上ですよ？」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実際のところは違う。優希、おまへの周りに居る面子をよく見てみる。」

「姉が1人と美少女が2人、美少年が1人に美女が1人にバカが1人、野蛮人が2人とムツツリが1人いるね。」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!？ 何で雄二が美少女に反応するの!？」

「……………(ポツ)」

「私、野蛮人って見られてたんだね優希。」

「ええっ、ムツツリー二に美琴さんまで!？ どうしよう私だけじゃツツコミ切れない!！」

美少女に雄二と康太が、野蛮人に美琴が反応して優希は声を上げる。個人的に重要なのはそんなことじゃないと思うんだけどな。

「ま、要するにだ。」

一度、皆を落ち着かせるとコホンと雄二が今一度咳払いして説明を再開する。

「いいか、Eクラス相手にこれだけの面子がいるんだ。相手にするだけ無駄だろう?」

「それならCクラスでも大丈夫だと思うんだけど？」

「残念だが優希、そいつはキツイぜ。」

「え、でも姫路さん達の実力なら……。」

確かに優希の言う事も分からないでもないけどよく考えてみると私や姫路さんたちは途中退席、または欠席扱いで無得点扱い、つまり全教科0点なのだ。

召喚獣の力は最後に受けたテストの点数に依存する。

回復試験を受けなければそもそも戦争に参加する事も不可能な状態、つまり戦力にならない。

「Cクラス相手じゃあ私らが戦えるようになるまでにやられちゃう。その点、Dクラス相手ならギリギリ持ちこたえられる。」

「それに皆の召喚獣の操作に慣れてもらうためにも最初は手頃な敵の方がいいんだよ。」

美琴の説明に楓が補足をして優希を納得させる。

「でも、Dクラスに勝てなかったら意味無いよね？」

「負けるわけ無いさ。お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いかお前等。ウチのクラスは——最強だ。」

こういう時、雄二は本当に口が上手い。

何の根拠もないのに自信が沸いて出てくる。

「いいわね、面白そうじゃない!」

「そうじゃな、Aクラスの連中に目に物をみせてやるかの。」

「姉貴、やってやろうぜ?」

「ああ、やってやるさ。」

「……………(グッ)」

「が、頑張ろうね優希。」

「うん! 頑張ろう楓。」

「が、頑張りましょう!」

「やろう、皆。」

そうして、私達は雄二の作戦に耳を傾けた。

全ては打倒Aクラス、打倒Dクラスの為に……。

t o b e c o n t i n u e d . . .

#### 第4問 く妹と純真と宣戦布告く（後書き）

というわけで宣戦布告終了！

次はいよいよDクラス戦です。

Dクラスというと例のあの人がいますが優希や美波はどう対処するんでしょうかね？

まあ、とにかく今後も生暖かい目で読んだり見守ってやっていただけると幸いです。

感想、お待ちしております！

ではではっ！

第5問 く危険と女難と……？く（前書き）

鳴神 ソラさん感想ありがとうございます！！

さてDクラスとの試召戦争です。

あの人の登場に優希と美波はどう行動するのか。

楽しみにしててください。

それではどうぞ！

## 第5問 く危険と女難と……？く

### 問題

『以下の文章の下の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

光は波であつて（ ）である。』

姫路瑞希の答え

「粒子」

・教師のコメント  
よく出来ましたね。

日之影美琴

「物質を構成する微細な粒、みたいな？」

・教師のコメント  
テストで疑問系にして聞かないで下さい。

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

・教師のコメント  
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

木下楓の答え

「放射線状に紫外線を撒き散らすの」

・教師のコメント

太陽からの光はそうかもしれませんがこの場合の光は一般的な光です。

吉井秋の答え

「人の心を照らすの」

・教師のコメント

問題の答えになっていません。しかし、先生はこの解答を好ましく思います。

吉井優希の答え

「勇者の武器」

・教師のコメント

先生もRPGは好きです。

『吉井！木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！』

開戦時間になり試召戦争の火蓋が切って落とされてから数分後。

教室で回復試験を受けていると島田さんの声が此処まで聞こえてきた。

ついに前線部隊が交戦状態に入った。

「（此処から大変だよ秀吉、優希。）」

前線部隊も中堅部隊もDクラスの防衛線を突破する事が目的ではない。

どちらも目的は姫路さん達主力の前線復帰までの時間稼ぎと戦力を削ることにある。

「先生！ 採点お願いします！」

おつといけない、私は早く切り上げて中堅部隊に合流するんだった。

私の点数はせいぜいが平均でDクラスで得意科目でCクラス程度のものしかない。

家庭科だけは誰にも負ける気はないけど……。

さて、みんなが頑張ってるんだから私も信じて頑張ろう。

私は再びテストへと意識を集中させた。

Side 優子

「……何だか外が騒がしいわね。誰が何をしているのかしら？」

HR終了後自習を言い渡されて私達は教室で自習をしている。

しかし、先ほどから廊下、恐らく渡り廊下から声が聞こえてくる。

男子はともかく女子の声も混じっている事にAクラスの大半は疑問に感じていた。

「何だかFクラスとDクラスが試召戦争してるらしいよ？さっき西村先生と高橋先生がぼやいてたから。」

話しかけてきたのは私の近くに座っていた級友の工藤愛子。

彼女は去年の終わり頃に私達のクラスへと転校してきた子で仲も良い。

「試召戦争？ まだ新学期が始まったばかりよ？学生の本分を何だと思ってるのかしらね。（ちよっと、秀吉何やってんのよ。そりゃFクラスの設備は最悪だから楓の為にやるのは良いにしても突然すぎよ。ああ、何だか心配になってきたわ。秋にも秀吉のフォーローはお願いしてるけど……信じるしかないか。）」

——ピンポンパンポン

唐突に放送が流れてきた。

どうしたのかしら、まさかもう決着がついたとか……。

『連絡致します。船越先生、船越先生。——が体育館裏で待っています。生徒と教師、性別の垣根を越えた大事な話があるそうです。』

放送が流れた瞬間、私だけでなくAクラスの生徒は全員ピシッと固まった。

船越先生と言えば婚期を逃した焦りから、ついには生徒達に単位を盾に交際を迫るようになったことは有名な話。

その先生にそんな放送を流したら絶対に行くに決まっている。

「あはは、Fクラスの人たち中々面白いことしてるねえ。」

愛子がそんなこと言ってるけど冗談言ってる場合じゃないのよ!?

名前は幸い聞こえていなかったみたいだけど、私の耳には何故か吉井優希って聞こえたような気がしてならなかった。

「……………代表、ちょっと出てくるわ。」

「……………分かった。」

Aクラス代表である霧島翔子さんにそう許可を取ると私は教室を後にした。

取り合えず、さっき放送を流した奴は潰す……。

そう意気込んで教室を後にした。

「ハハハ、優子の顔……冗談抜きで怖かったよ。」

後日、級友の愛子から当時の事をそう聞かされたのは全くの余談よ。

Side Yuko out

Side Yuki

「吉井！木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らしながら同じ部隊の島田さんが駆けてきた。

島田さんは普通にしてると可愛いのに他の似た体型の女子と比べるとどうも女性的魅力に欠けている。

ホント、残念で仕方ないんだけどどうしてかな？

「そっか、胸か。」

「アンタの指を折るわ。小指から順に全部綺麗にね。」

あ、不味いつい本音が……。

島田さんは自分の体型（ある部位）に関して強いコンプレックスを抱えている。

まあ、胸のことなんだけど。

私とか姫路さんとか胸の大きい女子に対して凄い視線をしてくるんだけどすっかり忘れてたよ。

「アンタみたいに大きい子にはウチの気持ちは分かんないわよ。」

「あつても喜ぶのは厭らしい男共だけだと思っけどね……。」

幸い私の呟きは聞こえていなかったみたいでついでに話も逸らせた。現在前線にいるのは秀吉率いる先遣部隊で交戦地点は渡り廊下、そこFクラスの教室の中間地点に私達は待機している。

一応、中堅部隊の隊長を任されたんだから部隊のみんなを導き目的を達する義務がある。

よし、前線の戦闘の様子を聞き取って戦場の空気に慣れよう！

『戦死者は補習だ！さあ、行くぞ負け犬が！』

『て、鉄人！ 嫌だ、補習室へ行くのは嫌だああ！』

『黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間掛かるか分からんが、それまでたつぷりと指導してやる。』

『た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問、耐え切れる自信がない！』

『拷問？ そんなことはしない、これは立派な教育だ。補習が終わるころには趣味は勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的

な生徒に仕立て上げてやろう。』

『お、鬼め！ 誰か、助けてくれ——（ボタン、ガチャ）』

色々と言いたいことはあるけど、なるほどね大体分かったよ。

「島田さん、中堅部隊全員に通達。」

「ん、どうしたの？ 何か作戦？ 何て伝えれば良いの？」

大した戦力も持ち合わせてない今、私の指示はただ1つ。

「総員、退避と。」

「この根性なし！」

島田さんの容赦のないチョキが私の目を強襲した。

「目を覚ましなさい、この馬鹿！ アンタは部隊長でしょう！ そのアンタが臆病風に吹かれてどうするのよ！」

その覚ますべき目があなたの強襲による激痛でそもそも開かないし  
覚めないよ！

そんな台詞はグーかパーで殴った後にして欲しかった！

「いい、吉井？ うちの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？  
アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、  
アイツらは補給ができないじゃない。」

島田さんが珍しく尤もらしいことを言う。

うんそうだよ、私達の働き如何でこの戦争の結果が決まると言っても過言じゃないし、姫路さん達に頼り切るんじゃないって、主力が来る前に少しでも敵の数を減らしてやるってくらいの覚悟じゃないと。

君はなんて男らしいんだ、島田さん。

なぜだか涙が止まらないよ！

ついでに激痛もね！！

「ごめん私が間違ってた。補習室を恐れずにこの戦闘に勝利することだけを考えよう。」

「ええ。それに、そこまで心配することもないわ！確かに個別戦闘は弱いわ、これは戦争なんだから多対一で戦えば良いのよ。」

その通り、点数じゃ負けているけど、それだけで戦争の結果は決まるとは限らない。

「そうだね。よし、やるよ！」

「うん。その意気よ、吉井！」

拳を挙げる私と島田さん。

大丈夫、姫路さん達がまだでも私達ならやれると意気込んでいると、

島田さんのところに報告隊がやってきた。

「島田、前線部隊が撤退を開始したぞ！」

「総員退避よ。」

さっきと言ってることが全然違うよ！？

私は殴られ損じゃない！

返して、さっきの感動返して！！

「吉井、総員退避で問題ないわよね？」

大いに問題があるように感じるのは私の気のせいに違いない。

「よし、逃げよう。私達には荷が重すぎた。」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ。」

Fクラスに向けて方向転換すると、振り返った先に本陣にいるはずの前田君がいた。

「ん？ 前田じゃない。どうしたの？」

「——代表より伝言があります。」

横田君がメモを見ながらハキハキとした声で告げた。

「『まだ主力はもう少し時間がかかる。そして——逃げたらコロス。』」

「総員突撃だよーっ！」

私だって命は惜しい。

戦場に向かって全力疾走する。

すると、前方から此方に向かってくる秀吉を発見した。

「おお、優希よ。」

援護に来てくれたんじゃな！」

「秀吉、大丈夫？」

とは聞いてみるものの召喚獣を見ても大分傷ついており既に戦死一步手前の状態だった。

「うむ。戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい。」

「召喚獣の様子は？」

「もうかなりへロへロじゃな。これ以上の戦闘は無理じゃろう。」

「それなら早く戻ってテストを受け直してこないと。」

「そうじゃな。全教科を受けている時間はなさそうじゃが、一、二教科でも受けてくるとしよう。」

そう言うや否や、秀吉と前線部隊に配置された生徒は教室に向かっ

て走り出す。

出陣したときより数が少ないのは補習室送りになったから所為だからか。

「吉井、見て！」

隣を走る島田さんが叫ぶ。

「五十嵐先生と布施先生よ！ Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

見ると二年生化学担当の五十嵐教諭と布施教諭が渡り廊下にいた。

連中は立会人を増やして一気に片をつけるつもりらしい。

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。60点台常連よ。」

うーん、流石はFクラス。

お世辞にも良い点数だなんて言えない。

私は人の事言えないけど……。

「よし、五十嵐先生と布施先生に近づかないよう注意しながら学年主任のところに行こう。」

「高橋先生のところね？ 了解！」

「あつ、そこにいるのはもしや、Fクラス的美波お姉さま！ 五十嵐先生、こっちに来てください！」

「くっ！ ぬかったわ！」

Dクラスの一人に島田さんが見つかったしまった。

化学担当の五十嵐教諭を伴ってこちらにやって来る。

マズいこっちも召喚獣を出して応戦しないと、二人揃って一撃で補習室送り。

「よし、島田さん、ここは君に任せて私は先を急ぐよ！」

「ちよっ……！ 普通逆じゃない！？ 『ここは僕に任せて先を急げ！』 じゃないの？」

「そんな台詞が通用するのはゲームとかアニメだけだよ！ 現実じゃ通用しない！ それに、その人が来てから嫌な感じがして一刻も早く離れたいんだ！」

私の警鐘がさつきから大音量で鳴り響いてる。

これはアキ姉を本気で起こらせた時よりかは小さいけどそれに迫っているくらいのモノだ。

一体、何が私にそうさせるの！？

「よ、吉井！ このゲス！」

「お姉さま！ 逃がしません！」

「くっ、美春！ やるしかないってことね……！」

——美春？

何だろう、その名前は何だか聞き覚えがある。

その時、私の脳内で教室での出来事が脳裏を掠めた。

『まあそう言われると悪くはないか……。そういえば興味がある奴がいた気がするな。確か……清水——美春（♀）だったかな？』

サアアアアアアアアアと全身から血の気が引いていくのを感じた。

「——試<sup>サモン</sup>獣召喚っ！」

そんなことを思考している内に島田さんが自身の召喚獣を呼び出した。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……。」

「ちょっと！ いい加減ウチのことは諦めてよ！」

いよいよ2人の戦闘が始まる。

「嫌です！ お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！ 私は普通に男が好きなの！」

「嘘です！ お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

「このわからず屋！」

ああ……なんだか、島田さんが遠いよ。

そして、同時に私の中の警戒アラームの音量が更に大きくなった気がした。

「美波お姉さまが終わったら次はあなたですよ優希お姉さま……！」

「頑張つてね島田さん……！」

2人の対戦が終わる前に逃げないと私の――が危ない……！

しかし、願い叶わず勝負は数瞬の間についてしまった。

「い、いやぁ！ 補習室はいやあつ……！」

島田さんが取り乱している。

当たり前だ、私だって嫌だからってそれどころじゃない……！

「補習室？ ……フツ。」

楽しそうに笑いながら、清水さんが島田さんの手を引っ張る。

あれ？ 清水さん、そっちにあるのは補習室ではなく保健室ですよ？

「ふふつ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね。」

「よ、吉井、早くフォローを！ なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

そうかもね、でも私はあなたを助けるわけにはいかないの……。

「あら、優希お姉さまも来ますか？ 大丈夫です私が優しくして差しあげますから。」

ゴメンね、私にそっちの世界に飛び込む勇氣は残念ながら無いの。

アキ姉だったら話は別だけどさ、やっぱり良くないと思うんだ。

—— いろんな意味で。

よって、今の私にできるのは……

「島田さん、あなたのことは忘れない！」

「ああっ！ 吉井！ なんで戦う前から別れの台詞を！？」

「さあ、優希お姉さまも私達と一緒に理想郷へ……！」  
アガルタ

島田さんの召喚獣の手足に攻撃を加えて動けなくすると、今度は敵がこっちにやって来た！

—— そんなの他所でやってよ……！！！！

「吉井さん危ない！！——試獸召喚！」  
サモン

と、私と清水さん変態の間に割って入ってきた声があった。

その声の主はクラスメイトの須川君だった。

——ありがとう、今の君はまるで救世主のように見えるよ！

Fクラス 須川亮 化学75点

V.S

Dクラス 清水美春 化学44点

一瞬で須川君の召喚獣が敵を切り伏せる。

さっきの戦闘で清水さんも消耗してたみたいで須川君でも簡単に勝つ事が出来た。

「島田に吉井さん、大丈夫か？」

「ええ、助かったわ須川君。本当にありがとう。西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い。」

島田さんと違って止めを刺された清水さんが鉄人に連行されていく。

「お、お姉さま方！ 美春は諦めませんか！ このまま無事に卒業できるなんて思わないでくださいね！」

とつつつても、危険な台詞を残し、清水さんは補習室へと連行されていった。

……ってその台詞、宿敵に放つみたいじゃないか。

兎に角、いろいろな意味で危ない戦いだった。

「吉井……。」

「島田さん、お疲れ。とりあえず一度戻って化学の試験を受けてきなよ。」

「吉井——。」

「さ、須川君、行こう。戦争はまだまだこれからだよ！」

「吉井いっつ！」

「ひゃいっ！」

「……ウチを見捨てたわね？」

「……ナ、ナンノコトヤラ。」

流石は戦場、殺気がヒシヒシと伝わってくる——ただし、味方である島田さんから。

「……………」

「――。」

しばしの沈黙、なんだか……とっても居心地が悪い。

「死になさい、吉井優希！ 試獣召――。」

「誰か！ 島田さんが錯乱した！ 本陣に連行して――！」

冗談じゃない！

折角脱した危機をどうして自分から呼び込まなきゃいけないの！？

あんな危険人物と同じ部屋に閉じ込められるなんて真っ平だよ！

「島田、落ち着け！ 吉井隊長は味方だぞ！」

須川君が島田さんを羽交い絞めにしてなだめる。

ありがとう！ やっぱ、君は救世主だったんだね。

今なら君にキスしてあげてもいいよ――！！！！

「違うわ！ コイツは敵！ いろんな意味でウチの最大の敵なの！」

……否定したい、特に色んな意味の部分で。

けど、最大の敵は私なんかよりもさっきの危険な娘だと思う。

「す、須川君、よろしくね。」

「——了解。」

「こら、放しなさい須川！ 吉井！ 絶対に許さないからね！」

「は、早く連れて行って！ なんかその禍々しい視線だけで殺されそうなの！」

「ちょっと、放し——殺してやるんだからぁーっ！」

物騒な台詞を残していったが、ひとまずの身の安全は確保できた。

「よし、とにかく秀吉たちが補給をしている間、前線を維持しよう！ 一歩たりとも前に進ませないようにね！」

怒号や悲鳴や物騒な台詞が飛び交う廊下で大声を張り上げる。

ここからが正念場だよ、うん！

余談だけどこの戦争終了後、優子さんに止められるまで島田さんと鬼ごっこをする羽目になった。

捕まったら命はないという迷惑極まりないオマケ付きだけどね……。

＼Side Yuki out＼

to be continued...?

第5問 〽危険と女難と……?〽 (後書き)

というわけでDクラスとの試召戦争の一部が終わりました。

原作通り優希には美波を見捨てさせました。

その方が後で色々面白そうだしね。 ↑ オイツ！

それではまた次の回に

ではではっ！

## 第6話 く危険と恨みと試召戦争く（前書き）

鳴神 ソラさん、感想ありがとうございます！

さて、タイトルの恨みというのは勿論前回被害にあったあの娘のことです！

というわけでDクラスとの試召戦争も大詰めに入ります。

それでは、どうぞ！

2011.8.6 8.7に行われる模試の関係でバカテストの  
みの更新となります。

本編はまた後日アップしますのでご了承ください。

8/13 更新しました！

## 第6話 〈危険と恨みと試召戦争〉

### 問題

『第二次世界大戦中にアメリカ率いる連合国と戦った枢軸国を3つ答えなさい。』

姫路瑞希の答え

「ドイツ・日本・イタリア」

・教師のコメント  
正解です。他にはハンガリー、ルーマニア、タイ等の国々があります。

日之影黒刀の答え

「吉井秋・坂本雄二・木下優子」

・教師のコメント  
テストに個人名を書かないで下さい。  
それにしてもどうしてその3人をピンポイントで書いたのが気になるります。

坂本雄二の答え

「ドイツ・日本・ヘタリア」

・イタリアの人に謝ってください

吉井優希の答え

「ロシア・中国・日本」

・教師のコメント

色々言いたいことはありますが、この時代に“ロシア”という国はまだできていません。

吉井秋の答え

「日・独・伊……優希はロシアとか中国とか書いてそうで心配です。」

・教師のコメント

解答は正解です。

しかし、テストに妹の心配する文を書くとは……日頃の心労が垣間見えます。

実際に書いていることが恐ろしいですが……

吉井姉さんのコメントと吉井妹さんの解答を見て後日、緊急職員会議が開かれ吉井妹さんの学力をどうするか話し合われました。

私の回復試験も漸く終了し、本隊と合流しようと教室の扉へと手を掛けていた時だった。

『———よ———！』

なにやら廊下が騒がしい。

激しく嫌な予感がしていたけど意を決して外へと出てみるとそこは違った意味で戦場と化していた。

「放しなさい！！ 私はあそこへ戻って吉井を殺さないといけないの！！！」

そこに居たのは修羅と化した島田さんだった。

近くにいた男子1名を捕まえて問いただすと男子は恐る恐るといった様子で話してくれた。

「実は吉井妹が島田さんを犠牲にしたらしいんだ。まあ、あの清水美春がいたらしいから仕方ないとは思うんだが……。で、結局須川が2人の窮地を救ったんだがそこで島田さんが錯乱して――。」

「あぁなった、と。」

「そういうことなんだ。」

「おい、何やってる！ お前も手伝え！ くそっ、全然止まらねえ、もう一人手伝ってくれ！！！」

「分かった！ 直ぐに行く！ ゴメン吉井さん、俺いかないといけないから。」

「うん、ありがとう。そしてゴメン、妹が迷惑掛けて……。」

「――いや、良いんだ。今回は仕方ない。じゃー！」

事情を話してくれた男子は島田さんを取り押さえる為に修羅場へと掛けていった。

高峰君

——優希ってば何やってるのよ。

「お、秋じゃねえか。もう終わったのか？」

私も戦場へと赴こうとすると背後から声を掛けられた。

「雄二じゃない、どうしたの？」

「俺か？ 俺は黒刀達の様子を見に来たんだ。どうだった主力は？」

「うん、姫路さん達ももう直ぐ終わると思うよ。あの3人凄まじい勢いでスパート掛けてたし……。」

私がただの凡人だったならあのスピードを見たらきつと本当に同じ人間なのか疑っていたほどだ。

受けていた教科が確か化学か数学だったような気がする。

「なるほど、じゃあ数学と化学のどちらかは400点越えは期待して良いってことだな？」

「そう言うこと、じゃあ私は戦場に行くから。」

「頼むぞ！」

雄二の激励を受けて私は戦場へと走ったのだった。

＼ Y u k i   s i d e ｝

「大分、この中堅部隊も人数が少なくなってきたね。」

私達は現在、窮地に立たされていた。

最初は優勢だったんだけど、途中で起こった島田さんの錯乱の所為で人員が割かれたのと部隊の皆が若干怖気づいたのが問題だった。

「喰らえ!!」

「グッ、くそっ 負けた!」

今の藤村君の敗北で中堅部隊の人数も3人程度まで落ち込んでしまった。

そして最悪な事に数学の先生は拉致されてしまい現在は布施先生が展開している化学フィールドが渡り廊下を覆っていた。

このままじゃ押し切られる……まだ主力は来ていない。

主力の為の時間稼ぎも満足にこなせないでAクラスなんて倒せるはずがない!

「——負けてたまるもんか!!」

気付いたらそう気合を入れて自分の召喚獣を呼んでいた。

「Fクラス、覚悟お!!」

Dクラスの男子生徒が私の方へと攻め入ってくる。

既に私の護衛に居た2人は敗北していた。

「Fクラス中堅部隊隊長、吉井優希。貴公の相手をしてあげる！」

早い速度で接近して私の召喚獣を撫で斬りにしようと剣を振る瞬間、召喚獣の所持していた日本刀を相手の剣に合わせて刀身を相手の剣の刀身に滑る様にして唾まで持つていくとそのまま唾に切っ先を引っ掛けて相手から剣を取り上げた。

「なっ！嘘だろ、どうしてそこまで細かい操作が出来る…！」

流石に試召戦争が始まって直ぐの状態で細かい操作が出来るなど思っても見なかったのだろう相手はかなり狼狽していた。

この試召戦争は2年生から行えるという規定により1年生の時はその為の実習をすることになっている。

でも、私は1年の時から観察処分者。

観察処分者は召喚獣の痛みや疲労の何割かがフィードバックしたり物理干渉が可能になるという特性に目が行きがちだけど、本当の利点は“1年生の時から召喚獣が操作できる”という点である。

つまり、私は他の生徒よりも召喚獣を操作する機会が多く他の生徒よりも操作に慣れているという点がこの試召戦争において尤も有効になるということだ。

——って今になって思うと雄二もそのことが分かっていたからこそ

私のことを言っただね。

「――武器を奪われた状態で何を呆けてるの、隙ありだよ!!」

狼狽していたことにより長い時間呆けていた所為で召喚獣の動きが止まっていたので相手の召喚獣をそのまま相手の武器で真つ二つにした。

「ま、負けた。」

Dクラスの生徒は膝をつき敗北を認めた。

でも、まだまだ危機は脱していない。

Dクラスの攻撃部隊はまだいるのだ。

目に映る人数だけでも5人はいる。

「ハハハ、今日は厄日かな。」

なんて、自嘲気味に言っていると背後がなにやら騒がしくなっていた。

まさか、回り込まれて本陣が攻撃されているのかと思い目だけで後ろを向いた瞬間、背後から見覚えのある人影が見えた。

「大丈夫か優希!」

「秀吉!回復試験、終わったの?」

「うむ、何とか間に合ったようじゃの。」

秀吉はそういうと自身の召喚獣を呼び出した。

「秀兄だけじゃないよ!」

「楓!」

主力の一員である楓も秀吉と他のFクラス生徒と共に来ていた。

と、いうことは……。

「主力は回復試験終わったの?」

「ううん、私が一番早く終わっただけ。他の人はもうちょっとだけ掛かるかな。」

「そっか、でももうちょっとなんでしょ? じゃあもう一息じゃん!」

楓の言葉で俄然やる気が出てきた。

よし、いける!!

「秀吉、楓。行くよ!!」

『任せておけ(よ)!』

掛け声と共に再び戦闘は開始された。

此方が不利だったとはいえ相手もかなりの人数を消耗していたように形勢は一気に逆転した。

「でも、やっぱり戦力差が出てるね。ちょっと厳しいかな……！」

楓は兎も角、私達は本来Fクラスの実力しかない。

つまり単独でのDクラス生徒の突破は厳しいと言わざるを得ない。

必ず2人ツーマンセル一組以上での戦闘を余儀なくされる。

形勢は有利なだけで突破口をこじ開けるにはまだ時間を要した。

少しでも早く突破口をこじ開ける為に私も戦闘に参加することにした。

「Fクラス吉井優希が此処に居るDクラス生徒に化学勝負を——  
——」

——ピンポンパンポン

なんだか間が抜けるような音がしたかと思うとスピーカーから男の声が出た。

「連絡致します。船越先生、船越先生。」

こんな時に先生の呼び出し？

戦争中になんでそんなことするの？



なんて、声が聞こえたような気がしたけど、今は無視無視、構って  
るヒマなんて無い！

急がないとお持ち帰りされちゃう。

Dクラス生徒の召喚獣をなぎ倒して進んでいくとなにやら前方の方  
が慌ただしかった。

「まさか、船越先生、先回りを！？」

そんなことを口走った瞬間、前に居たDクラスの男子が吹き飛び騒  
ぎの原因が判明した。

「ア、アキ姉！！？」

そう、私の愛しいお姉ちゃん、アキ姉でした。

＼Yuki side out＼

早速、戦場に向かっているとスピーカーから呼び出し音が聞こえた。  
何だろうと思って聞いていると何と、あの船越先生の呼び出しだっ  
た。

「——が体育館裏で待っています。生徒と教師、性別の垣根を  
越えた大事な話があるそうです。」

なんて聞こえた……殆どの生徒は聞こえてなかったかもしれないけ  
ど、確かに妹の名前が聞こえてしまった。

先生に聞こえたかどうかは分からないけど多分聞こえたなんてないだろう。

私は中堅部隊に合流して優希の援護をするという当初の目的を変更して回り道をすることにした。

渡り廊下にある下へと続く階段を使ってDクラス方面に急ぎ優希達の中堅部隊と挟み撃ちのような状態にする。

まさかFクラスのような頭の悪い生徒がそんな手を考え付くとは思ってもみなかったのだろう階段の見張りは必要最低限しかいなかった。

もう近くまで来ていた船越先生が承認したのだろう一気に新校舎一帯に数学フィールドが展開された。

相手に気付かれないように召喚獣を召喚し、接近する。

「Fクラス吉井秋が此处に居るDクラス全員に挑みます。試獣召喚  
！」

「な、くそ！ Fクラスだと！？ 仕方ない、試獣召喚！」

相手も召喚獣を出して戦闘に応じた。

Fクラス 吉井秋 数学91点

V・S

Dクラス 男子生徒4人 平均83点

敵は4人、Dクラス相手に大分応じられる点数とはいえ流石にキツイ点数になる。

私が凡人だったのなら……。

「喰らえ！」

「させるか！」

相手の召喚獣を真つ二つにしようとすると思えばそこまで点数が大差ない為に簡単に防がれてしまう。

でも、その防御じゃいけないなあ。

「な、なんだよソレ！」

そう、私の武器は両刃剣、片方の攻撃をガードされてももう一方に付いている刀身で攻撃できる。

がっちりガードしてしまうと次の攻撃に対応できないのだ。

1人はあっさり倒せたけど残り3人はそうはいかない。

「大丈夫だ、多対一でならあの攻撃も意味が無くなる。」

確かに今の攻撃はタイマンでなら効力はある。

周りに人が居ると1人に攻撃を仕掛けている間は完全に無防備になってしまう為に相手の攻撃を受けてしまう。

でも……。

「まさか、同じ手で攻撃を仕掛けるとでも思ったの？」

「くそつ、飯塚がやられた！」

「まだだ、まだ終わってない！」

Dクラスの生徒が吼えるけど、でもその言葉って死亡フラグだよ？

「——無塵衝。」

私の召喚獣が相手の召喚獣をすり抜けたかと思うと遅れて無数の剣戟が敵を切り裂き敵の点数を0にした。

フツッ、伊達に優希の雑用<sup>付き合わされて</sup>に手伝っていないのだ。

階段を駆け抜けて一気にFクラスへの攻撃部隊の背後に着くと攻撃を仕掛ける。

「な、背後から!？」

「見張りは何をしていたんだ!？」

「悪いけど、直ぐに終わらせてもらっよ!！」

不意打ちをしたお陰で一気に部隊の6人程度は補習室<sup>戦死</sup>送りにできた。

それとともに何故か此方に突進してきた優希による奇襲(?)により相手の部隊は壊滅状態になっていた。

優希が私の顔を認識するとかかなり驚いたような顔をしていた。

「ア、アキ姉!!?」

「優希、大丈夫?」

優希はそのままの勢いで私にダイブしてきた。

「アキ姉え……助けてよお。」

子猫のような瞳で私に甘えてくる優希に不覚にも私は眩暈がしてしまった。

「ッ……うん、今回は事情が事情だけにね、お姉ちゃんが助けてあげよう!」

「ホントに!! やったこれで助かった。」

「フオローは私がしておくから、今の所は諦めて船越先生のところに行ってきたよ」

「鬼だ、鬼だよアンタ!! こんなか弱い妹を見捨てるなんて!!」

何だか流石に面倒くさくなってきた。

「あ、船越先生。」

そっいうと真上に跳躍し天井に張り付き某映画の主人公のような格好をしていた。

——スパイダーマンか、アンタは。

上を向いていると大勢の足音が聞こえた。

秀吉と楓たちの恐らくだけと援護部隊の皆が駆けつけていた。

「おおっ、無事じゃったか優希。」

「大丈夫だった優希？」

やっぱりだけど、皆私だつてことに気付いていない。

優希は船越先生恐れて声すら出さない。

「大丈夫だよ、それより突破口は開けた。後は主力である楓を守りつつDクラス本陣に攻め込もう！」

『応っ（うんっ）！！！！』

私は優希に成りすまし、そのままDクラス本陣へと攻めこんだのだ。  
った。

t o b e c o n t i n u e d . . . ?

第6話 危険と恨みと試召戦争（後書き）

はい、7・8日ぶりの更新です。

ホントすみません、色々予定とかが相次いでしまいました。

多分、暫く更新は不定期になってしまうかもしれません。

それでも見てくれる方には本当に感謝です。

やっとDクラス戦の終盤に入りましたね。

次は代表である平賀君との対決と姫路さんのアレが出てきます。

遅くなりましたが仮面ライダー　さん、ご感想ありがとうございます。

それではまたの機会に

ではっ！

第7問 く勝負と決着とDクラス戦く（前書き）

仮面ライダー      さん、く感想ありがとうございます！

今回、やっとDクラスとの試召戦争が終結します。

それでは、どうぞ！

## 第7問 く勝負と決着とDクラス戦く

### 問題

『ベンゼンの化学式を求めなさい。』

姫路瑞希の答え

「C6H6」

・教師のコメント

正解です、簡単でしたかね。あなたがFクラスにいるのはとても不思議なことだと思います。

土屋康太の答え

「ベン+ゼン＝ベンゼン」

・教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

日之影美琴の答え

「秋+優子＝GL」

・教師のコメント

テストだからと言って人を代入して遊ばないで下さい。どうなっても知りませんよ？

吉井優希の答え

「B・E・N・Z・E・N」

・教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

私達がDクラスの教室へなだれ込むようにして入るとそこにはDクラス代表である平賀源二君とその近衛部隊が周りを囲むようにして立っていた。

「ちっ、もうここまで押し入られたのか！ 個人同士の戦いになれば負けはない！ 追い詰めて討ち取るんだ！」

個々の実力において勝っているDクラスだからこそ取れる作戦。

見ればこの教室には近衛部隊以外の人員はいない。

本陣へ追討に掛かっているみたい。

もう主力が戦線に復帰している頃合いのはず。

なら、後は私達が彼らより早く平賀君を討ち取れば良い。

「総員、個人での戦いは絶対に避けて！ 多対1の戦闘に持ち込んで、コンビネーションを意識して戦って！」

『了解！』

Fクラスみんなが私の指示に気持ちの良い返事をして戦闘に入る。

今の内に平賀君に近づいてトドメを刺そう。

見れば既に間に邪魔な近衛部隊がないほどに防備が薄くなっている。

「チャンスっ！」

素早く平賀君の下に駆け出す。

幸い平賀君の近くには現国の竹内先生と古典の向井先生がいる。

これなら討ち取れないにしても、少しはダメージを与えることができる！

「向井先生！ Fクラス吉井が——」

「Dクラス玉野美紀、試験召喚<sup>サモン</sup>」

「っ、まだ近衛部隊が居たの！？」

突如私の前に現れたのはDクラスの女子。

油断していた、平賀君が近衛部隊全員をFクラス相手に割くわけがなかった！

「残念だったな、船越先生の彼女サン？」

——優希、お姉ちゃんはおあなたの将来が心配です。

「さ、玉野さん。相手はあの《観察処分者》。軽く捻り潰してやる

んだ。」

「分かりました。」

玉野さんは既に古典の点数で武装した召喚獣を喚び出している。

「甘くみないで！ 行くよっ！」

私の召喚獣は玉野さんの召喚獣に接近し、脇腹に強烈な蹴りを叩きこむ。

私が優希だからと思つて油断していたのかその一撃は簡単に彼女の召喚獣の脇腹を捉える。

その後、刀身の腹を使って玉野さんの召喚獣を吹き飛ばす。

「やるじゃない。でもまだまだこれからよ！」

「さて、どうだろうね？」

準備は整った。

後は――

「よろしくね、楓。」

「は？」

『何を言ってるんだ、この馬鹿は？』といった顔をしている平賀君。

「平賀君……」

そんな彼の後ろから、少し遠慮がちに楓が肩を叩いた。

「え？ あ、木下さん。どうしたの？ Cクラスはここじゃないけど？」

未だに現状を認識できていない平賀君。

まあ、本来楓はCクラス並の実力、一部の文系科目においてはAクラス並の実力を持っているんだからFクラス所属だなんて普通は誰も思わない。

「いえ、そうじゃなくて… Fクラスの木下楓、Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます。」

「……はあ。どうも。」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚です。」

Fクラス 木下楓 現代国語 319点

V・S

Dクラス 平賀源二 現代国語 129点

「え？ あ、あれ？」

戸惑いながらも平賀君も召喚獣を構えさせ、相対する。

けど、相手にならないだろうなあ……。

楓の召喚獣は明らかに強そうだ。

青龍偃月刀を軽々と構えているくらいだし。

「い、行きます！」

その得物に似合わない素早い動きで相手に肉薄する楓の分身。

反撃すら許さず、一撃でDクラス代表を下して、この戦いの決着となった。

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ！』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「クソッ、玉野さんを吹き飛ばしたのは木下さんの突破口を決じ開けるためか…本当にお前、“あの”吉井優希か？」

Dクラス代表である平賀君は流石に疑い始めた。

優希が意図的にやったとは到底思えないのだろう。

「まあね。あの娘がそんなことできた暁にはきつと天と地が逆さになってるだろうし……。」

「それじゃあ君は一体……。」

「私は吉井秋。吉井優希は私の妹だよ。私もバカだけどあの娘よりは頭は良いよ。」

「なんと……。」

私が秋だつてことに気付いてなかった秀吉は驚きを隠せないのか目を見開いていた。

一方、私の名前を聞いた途端、どこか納得したような顔をした平賀君。

「知ってるよ、1年の時に君ら姉妹のことはよく聞いていたからね……その事を考慮できなかった俺の落ち度だ。」

私達より上位である筈の平賀君は潔く自分の落ち度を認めた。

流石は代表といったところか……

「よお、Dクラス代表さん。早速交渉に入ろうか。」  
とここで我等がFクラス代表坂本雄二が登場した。

「ああ、分かってる。ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

敗戦の将か。

なんだか少しだけ可哀想に見える。

これから彼は再び試召戦争を行使できる権利が回復するまでの3ヶ月間を、あの教室でクラスメイトに恨まれながら過ごさなくてはな

らない。

勝てば英雄のように扱われるのが代表なら、負ければ戦犯として扱われるのもまた代表なのだから。

「アキ姉!!」

そこへ漸く愛しの妹、優希が勢い良く入ってきた。

「やっと来たね。」

「『やっと来たね。』じゃないよ！ 船越先生が来たなんて嘘八百じゃない!! お陰で私は天井で震えながら隠れてたんだよ!!?」

決して張り付いてとは言わない優希。

それを言ったらみんなから奇異の視線で見られるからね。

「それで雄二、設備の交換はどうするの？ するの?」

「いや、その必要はない。」

その場にいた全員は予想だにしない返事に固まっていた。

途中から来た優希でさえも。

「一応聞くが、何故だ?」

「Dクラスを奪う気はないからだ。」

平賀君の質問にそれが当然のことであるかのように告げる雄二。

雄二の言いたいことがさっぱり分からないと言った表情をする優希。

「雄二、それはどういうこと？ 折角普通の設備を手に入れることができたのに。」

「忘れたのか優希？ 俺達の目標はあくまでAクラスのはずだろう？」

打倒Aクラス。

それは私達の至るべき到達点。

「でもそれなら——「優希。」何？ アキ姉？」

「少しくらい自分で考えたら？ 雄二の意図を、ね。」

「???。」

頭に疑問符を沢山浮かべて考える優希。

「とにかく、Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない。」

「それはありがたいが……。それでいいのか？」

「勿論、条件はある。」

そりゃそうだね。

このまま解放したらそれこそ意味がない。

「一応聞かせてもらおうか。」

「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それと、俺達の主力については一切口外しないこと。それだけだ。」

雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

当然、この室外機はDクラスの物じゃない。

Dクラスのレベルなんてちよつと貧しい普通校レベルの設備でしかない。

そんなクラスにエアコンなんてものはないのだから。

置いてあるのは、スペースの関係で此処に間借りしている――

「Bクラスの室外機か。」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思う、その上俺達の戦力の口外をしないだけで設備を交換せずに済むんだ、そう悪い取引じゃないだろう?」

悪い取引であるはずがない。

壊すと言ってもやりようによっては嚴重注意で済み、戦力を口外しなければ、3ヶ月もの期間をあの教室で過ごすという状態から逃れ

られるのだから。

「それは此方としては願ってもない提案だが、何故そんなことを？」  
平賀君の疑問は尤もだ。

目標はAクラスなのにBクラスを、しかもエアコンなんて直接関係のないものにダメージを与えてどうするつもりなのか……

私にはその理由が何となく分かった気がした。

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな。」

「……そうか。では此方は有難くその提案を吞ませて貰おう。」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう帰っていいぞ。」

「ああ。ありがとう。お前らAクラスに勝てるように願っているよ。」

「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っているんだろっ？」

「まあな。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな。……ただ——」

突然、平賀君が言葉を区切って一瞬だけ私の方を視た。

「お前らならAクラスに勝てる気がするよ。」

じゃあ、と手を挙げてDクラス代表、平賀源二は去っていった。

「……さて、皆！ 今日のご苦労だった！ 明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆつくり休んでくれ！ 以上だ、解散！」

雄二が号令をかけると、皆雑談を交えながら自分のクラスへと向かい始めた。

帰りの支度をするのだらう。

私もそれに習って優希と一緒に帰ろうと声を掛けようとした。

「……………一体、あれは……………結局……………どういう……………」

優希は未だに雄二の言葉の意図について考えていた。

道理で静かだったわけだよ。

「はあ、優希。分からないのなら良いよ。それ以上考える必要ないから。」

「え、そう？ 分かった。あれ、平賀君は？ 皆もないし……………」

「もう帰ったよ。ほら、私達も帰るよ。」

「あ、ちょっと待ってよ！ アキ姉ってば！！！」

さ、今度はBクラス戦だ。

今日は帰って勉強しなきゃね。

まあ、主に優希がしなくちゃいけないんだけど……

茜色の空の下、私はちょっとだけ笑いを堪えながらそんなことを思っていた。

t o b e c o n t i n u e d . . . .

## 第7問 く勝負と決着とDクラス戦く（後書き）

はい、ということでDクラス戦終結です！

秋と優希が入れ替わったのは優希の機転じゃ楓を平賀君のどこまで誘導するのは難しいと考えたからです。

深い意味は特にないつもりです（笑）

さて、次回こそは姫路さんのアレが出てきます！

果たして誰が餌食になるのか、それは次回のお話にて語ることにしましょう。

ではではっ！

## 第8問 く私と命と手作り弁当く前編（前書き）

感想をしてくださった皆さま、ありがとうございます！

あまりに長くなったので前後編にさせていただきました。

それでは前編、どうぞ！

## 第8問 く私と命と手作り弁当く前編

### 問題

以下の問いに答えなさい。

『good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい。』

姫路瑞希の答え

「good - better - best  
bad - worse - worst」

・教師のコメント  
その通りです。

吉井優希の答え

「good - gooder - goodest」

・教師のコメント  
まともな間違え方で先生驚いています。  
goodやbadの比較級と最上級は語尾に -esや -estをつけるだけではダメです。  
覚えておきましょう。

土屋康太の答え

「bad - butter - bust」

・教師のコメント  
『悪い』『乳製品』『おっぱい』

Dクラス戦から翌日、いつも通り学校に向かう。

今日は試召戦争で消費した点数を補給するためにテスト漬けのはず。  
頑張らないと。

「おっはよー。」

教室の戸をガラガラと開ける。

相変わらずの畳と卓袱台。

「おう秋。優希はどうした？　一緒じゃないのか？」

「ん、おはよ雄二。優希は寝坊したから置いてきた。」

既に到着していた雄二が隣の卓袱台で胡座をかいている。

持っているのはなんと英語の教科書。

一応テスト前の悪あがきをしているみたい。

「置いてきたって、お前今頃優希の奴慌てて来るんじゃないのか？」

「寝坊してる人の面倒まで見切れないから。」

そりゃそうだ、と雄二が言っていると教室の扉がまた開く。

「ぜえ…ぜえ…ぜえ…お、おはよ。」

急いで来たのかかなり息が上がった状態の優希がいた。

「アキ姉ってば酷いよおー。何も置いて行かなくてもいいのに…。」  
文句を言われる筋合いは無いと思うな。

朝食を用意してあげただけでも感謝してほしい。

ただでさえ今日のお昼を用意するのは大変なのにその上優希の面倒まで全部見てたら倒れかねない。

「よお、優希。それよりお前は良かったのか？」

「え？ 何が？」

「昨日の後始末だ。」

昨日の後始末？

優希ってば何かしたのかな？

「一体何が言いたい——」

「吉井っ！」

「あたあっ!!」

何故か右頬に激痛を感じる。

「アキ姉っ!？」

「し、島田さん、何を……。」

「あ、もしかしてアキの方だった！？　ご、ゴメン間違えちゃって……！」

なにか、妹の粗相を姉が身体で支払わなきゃいけないと？

「だ、大丈夫かの？　秋よ。」

「アキ姉さん、大丈夫ですか？」

秀吉と楓が看病してくれる。

ああ、癒されるよ。

「仕方ないねえ、ほら救急箱だ。楓、治療するから少し退いて。」

「あ、はい。美琴さん。」

美琴も治療をしてくれる。

黒刀は……どうでもいいとして――

「おい、今失礼なこと考えなかったか？」

「いや、別に……むさ苦しい男は私の視線から外れてほしいな、って思ったただだよ。」

「……いい度胸してんじゃねえか。」

「…美琴お。黒刀がいぢめるよお……。」

秘技 泣き落とし

美琴はこれに弱いから、

「っ！ 逆らえない。可愛い過ぎる！！ 黒刀、貴様あつ！！」

「のわっ、ちょ、ちよつと姉貴！？」

「これより異端審問会を始める。」

美琴が黒刀を拘束した瞬間、Fクラス男子が一斉に怪しい宗教団体の様な格好をしていた。

「な、なんだお前ら。」

「被告、日之影黒刀の罪状を述べよ！」

「はっ、被告はつい先ほど、我らがアイドルの1人吉井秋さんを泣かせ怖がらせました。」

「御託はどうでもいい…キミの意見を聞きたい。」

「はっ、男の風上にもおけない野郎です！！」

「判決、死刑！！」

バンバンと机に置いてあった木製のハンマーで叩くとロープで縛られている黒刀を吊し上げて死刑執行を開始していた。

黒刀の断末魔が響き渡ったのは言うまでもない。

「そういえば優希、アンタ良かったわね。」

「え？ 何が？」

「実は一時間目の数学のテストだけど……」

島田さんが楽しそうに、それはもう本当に愉しそうに告げる。

「監督の先生、船越先生だつて。」

それを聞いた瞬間、優希は扉を開けて疾駆した。

\*\*\*

「うあー……づがれだー」

優希が机に突つ伏す。

とりあえず4教科が終了。

ただでさえテストは疲れるのに、優希は朝から船越先生とひと悶着あつたから余計に疲れた。

ちなみに船越先生に近所のお兄さん（39歳／独身……お兄さん？）を紹介してあげたのは全くの余談である。

「ふう、確かに疲れたねえ。」

少し熱くなったので髪の毛を1つに纏めてポニーテールにする。

「（ううっ。私のストライクゾーンと真ん中だ。アキ姉のくせに妹を惑わすなんて!）」

なにやら優希が身体を震わせているけど無視を決め込む。

「……………（コクコク）」

いつも無口で影が薄く思われるがちなムッツリーニもいる。

「よし、昼飯食いに行くぞ! 今日ラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな。」

勢いよく雄二が立ち上がるけど、何そのメニュー…

炭水化物のオンパレードじゃない。

「雄二、今日は姫路さんの弁当の日だよ。」

もちろん、私も作ってきたけど…

「おおっ、そういえばそうじゃったの。それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう。」

「うん、そうだね秀兄。」

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ。」

「あれ？ 雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな。」

「あ、それならウチも行く！ 1人じゃ持ちきれないでしょ？」

と、島田さんが気遣いを見せている。

へえ、珍しい。

「悪いな。それじゃ頼む。」

「おっけー」

雄二は島田さんの気遣いを何の疑いもなく受け入れている。

これが優希だったらきつとそのまま連れて行かれてボコられるのを警戒するんだろうけど…

「きちんと俺達の分をとっておけよ。」

「大丈夫だってば。あんまり遅いと分からないけどね。」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる。」

雄二と島田さんは財布を持って教室を出ていった。

きつと一階の売店に行っただろう。

さて……

「優希、悪いけど私は先にAクラスに行ってくるから。」

「ん、分かった。先に行ってる。」

実は今日優子に呼び出されている。

なんでも試召戦争のことについて聞きたいんだとか。

詳しい情報は教えて上げられないけど、答えられる範囲で答えようと思う。

というわけで私はAクラスへの道のりを急いだのだった。

この時の私は後に大変な惨劇に見舞われることなど思ってもみなかったのである。

# — i n t e r l u d e —

＼ Y U K I    s i d e 　

「私達も行こうか。」

「そうですね。」

アキ姉が去っていくのを見送って私は姫路さんが抱えていたバッグ

を受け取り、屋上まで歩く。

「天気が良くてなによりじゃ。」

「そうだな。」

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空。

絶好のお弁当日和だ。

「あ、シートもあるんですよ。」

姫路さんがバッグからビニルシートを取り出す。

準備も万端。

幸い屋上に他の人は誰もいないので私達の貸し切り状態だ。

「気持ちいいねー」

「……………（コクリ）」

ビニルシートの上に足を投げ出す。

日差しと風が気持ち良かった。

「あの、あんまり自信はないんですけど……………」

姫路さんが重箱の蓋を取る。

『おおっ！！』

私達は一斉に歓声をあげた。

凄く美味しそう…。

唐揚げ、エビフライにおにぎりやアスパラ巻きなど、定番のメニューが重箱の中に詰まっている。

「んじゃあ雄二には悪いが、先に——」

「……………（ヒョイ）」

「あつ、ずるいよムツツリー二つ。」

「なら便乗して、と。」

動きの素早いムツツリー二と美琴さんが黒刀の言葉を制しエビフライと唐揚げをつまみ取った。

そして、流れるように口に運び——

『……………（パク）』

バタン　ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

『……………。』

秀吉に楓、黒刀と顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!？」

姫路さんが慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

「……………（ムクリ）」

ムツツリーニが起き上がった。

「……………（グッ）」

そして、姫路さんに向けて親指を立てる。

多分、『凄く美味しいぞ』と伝えたいんだろう。

でもね、ムツツリーニ、それなら何故足がいまだにガクガクと震えているの？

私にはK O寸前のボクサーにしか見えないよ。

「……………（グッ）」

美琴さんも右手親指を立ててムツツリーニと同じようにしていた。

さすがに美琴さんも今回は中指は立てなかったね。

「あ、お口に合いましたか？ 良かったですっ。皆さんも良かったらどんどん食べてくださいね。」

姫路さんが笑顔で勧めてくる。

そんなに嬉しそうに勧めてくれると断れない。

寧ろ、どんなに不味かろうとも残さず食べてやる、という気にさえなってくる。

——でも、私にはどうしても目を虚ろにして身体を震わすムツリ  
——と美琴さんが忘れられない。

（3人とも。あれ、どう思う？）

姫路さんに聞こえないくらいの小さい声で3人<sup>生存者</sup>に話しかける。

（……どう考えても演技には見えん。）

（じゃな。これはかなり不味かろう。）

（ねえ、優希は身体は頑丈な方？）

（正直胃袋には自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから。）

表情は当然笑顔のままだ。

姫路さんにこの会話と私達の驚愕を気取らせるわけにはいかない。

（なら、ここは俺の出番だな。）

勇気ある黒刀の台詞が囁かれる。

（幾ら黒刀でも危険だよ！）

（バカ言え、この中で一番頑丈なのは俺だろう？ それに女にこんな危険なことさせられるかよ。秀吉、後は頼んだ。）

（任された、のじゃ）

黒刀は自ら死地へ赴くと一口、姫路さんの料理を口にしようとした時だった。

「おう、待たせたな！　へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

「あつ、ズルい坂本、ウチも！」

雄二、島田さん登場。

「おい、雄二。」

止める間もなく素手で卵焼きとアスパラ巻きを口に放り込み、

パク　ボタン——ガシャガシャン、ガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

……間違いない。

コイツは、本物だ……。

ムツツリー二達同様激しく震える雄二達を見る。

すると、雄二は倒れたまま私の方をジッと見て、目でこう訴えていた。

『毒を盛ったな?』と。

『毒じゃないよ。全部、姫路さんの実力なんだよ。』

私も同じく目で返事をする。

いつも一緒に行動している私達だからこそできる技。

こういう時は凄く便利だ。

「あ、足が……攣ってな……。」

「ウ、ウチも、足が攣っちゃって……。」

なるべく姫路さんを傷つけないよう嘘を吐く雄二と島田さん。

「あはは、2人ともダッシュで階段の昇り降りしたからじゃぞ。」

「ああ、そうだな。」

一方その後ろ側で私達は必死に作戦会議を行っていた。

（優希、今度はお主が行くのじゃ!）

（む、無理だよ! 私だったらきつと死んじゃう!）

（流石に俺もさっきの姿を見ては決意が鈍る……）

（ゆ、雄二が逝ったら？）

（バカか！ もうあんなモン食えん！）

（どうする……）

徐に視線を姫路さんの方へ向けるとそこには何故か熱っぽい視線を送っていたことに気が付いた。

（……黒刀）

（何だ？ 優希。）

（きっと、姫路さんは黒刀に食べて欲しいみたいだよ？）

（は？ お前何言って……）

（もうっ！ 往生際が悪い！）

「あっ！ 姫路さん、アレなんだ！？」

「えっ？ 何ですか？」

私が指した明後日の方向を姫路さんが見る。

（えいっ ♪）

（もごあぁっ！？）

その隙に黒刀の口の中一杯に弁当を押し込んだ。

目を白黒させているので、顎を掴んで咀嚼を手伝ってあげる。

ご飯はよく嚙んで食べましょう。

「ふう、これでよし。」

「……優希、存外鬼畜なんだね。」

楓が何か言ってるけど気にしない。

黒刀が雄二よりも激しく震えているけど気にしない。

「ごめん、見間違いだったよ。」

「あ、そうだったんですか？」

こんな古典的な手に引っ掛かってくれる姫路さんありがたい。

こんなに純粹だとちょっと心配になっちゃうけど。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様。」

「うむ、大変良い腕じゃ。」

「う、うん。ホントに美味しかったよ。」

黒刀達と言う尊い犠牲によってお弁当は無事始末完了。

生存者  
私達の気持ちはこの青空のように晴れやかだった。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん、特に黒刀が『美味しい美味しい』って凄い勢いでさ。」

視界の隅で倒れている黒刀がフルフルと力なく首を振る。

大丈夫、姫路さんには好印象だよ。

もしかしたらまた作ってもらえるかもね。

私は遠慮させてもらうけど。

「そうですかー。嬉しいですっ。」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、黒刀？」

倒れている黒刀に水を向ける。

意識があるから応えられるはず。

「う……う……。あ、ありがとうな、姫路……。」

ヤバイ、目が虚ろだ。

「そつえばさ、美味しいといえば駅前に新しい喫茶店が――」

ここで話題を逸らしにかかる私。

これ以上下手なこと言って、『それじゃ、また作ってきますね』なんてことにならない為の配慮だ。

「あ、もしかしてあの店？ 確かに評判良いよね。」

楓も私の意図が読めたのか話に乗ってくれる。

秀吉も頷いてくれている。

これなら……

「え？ そんなお店があるんですか？」

「うん、そうなんだよ。今度今日のお礼に黒刀が奢ってくれるってさ。」

「てめ、勝手なこと言っなよ。」

作戦は無事に成功した模様。

危惧していた事態は避けられそうだ。

取り留めの無い会話の続く、ほのぼのとした時間が過ぎる。

「あ、そうでした。」

姫路さんがポン、と手を打った。

その様子に果てしなく嫌な予感しかしない。

「ん？　どうかしたんですか？」

「実はですね――。」

「ごっそ、と鞆を探る。」

「デザートもあるんです。」

「ああつ！　姫路さんアレ何だ！？」

「優希！　次は俺でもきつと死ぬ！」

黒刀が命がけで私の作戦を止めにかかる。

くっ、反応の良いヤツめ。

（優希！　俺を殺すつもりか！？）

（仕方ないでしょ！？　こんな任務は黒刀か雄二しか出来ない！  
此処は2人に任せた！）

（バカ言つなよ！　そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもでき  
んものほできん！）

（この意気地なし共っ！）

（ほう、そこまで言うんだつたらお前にやらせてやる。雄二！）

（応っ！）

（あ、ちょっと雄二っては何を！？）

私を雄二が羽交い絞めにして眼前までソレを近づけてくる黒刀。

（や、止めてください！ 争うくらいだったら私がっ！）

（か、楓っ！？ 止すのじゃー！！）

パク バタン ガタガタガタ

楓が黒刀の手に持っていた姫路さんのデザートをひったくると、それを勢い良く一口食べた。

それと同時にひったくった勢いと同じ勢いで倒れた。

（楓っ！？）

（おのれ、坂本…黒刀…よくも楓を……！！）

秀吉が楓を抱きかかえ諸悪の黒刀と雄二を睨みつける。

（す、すまん。そんなつもりはなかったんだ。）

（あ、ああ。俺もそんなつもりじゃ……）

（問答無用じゃっ！！）

今度はそのデザートを雄二と黒刀の口に押し込んだ。

何だろう、とっても秀吉が漢らしく見えるよ。

「あ、あれ？ 坂本君と日之影君はどうかしたんですか？」

「あ、ああ…デザートを食べたら眠くなったんだって。」

「そうなんですか。食べた後に寝てしまっは牛になってしまいますよ。」

「そうじゃの……。」

私と秀吉は苦笑いをしながら姫路さんを上手く誤魔化す。

しかし、姫路さんの傍らにはもう1つのデザート、ヨーグルトらしき白い物体があった。

「あ、ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ。」

言われてみれば、容器に入っているデザートその2はヨーグルトと果物のミックス（のように見えるもの）なのだ。

流石にお箸で食べるのは難しいのかもしれない。

「取ってきますね。」

スカートを翻し、階下へと消える姫路さん。

……チャンスだ。

「……秀吉。」

「——分かっておる。」

秀吉も覚悟を決めたような顔をしていた。

「秀吉だけに辛い思いはさせないよ。私も……逝く。」

「うむ、では先に逝くのでしょうか。」

戦場に向かう戦士のように秀吉が容器を手取る。

「別に死ぬわけでもあるまい。そう気にするでない。」

不安そうな顔を見られたためか秀吉はフツと軽く笑いかけてくれた。

「秀吉……。」

「うむ、任せておくのじゃ。できるだけ残さぬようにしてみせよう。……では、頂きます。」

容器を傾け、一気にかきこむ秀吉。

流石にあの量は一気に食べる事は無理なみたいで一旦、かきこむのを止める。

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃとゴぼあっ！」

また1輪、花が散った。

命という儚い花が。

「……直ぐに逝くから。待っててね。」

秀吉の右手に納まっていた容器を手に取り一気に口に流し込む。

「むぐむぐ。うーん、ヨーグルトにしては甘すぎず辛すぎる味だね。時々舌が痛くなるくらいの酸味を感じんゴペッ……!」

——あ、空が……黄色い、な。

最期に聞こえたのは誰かの近づいてくる足跡と頬を撫でる暖かい手だった。死んでません

＼Yuki side out＼

——interlude out

時間は私と優希達が別れるところまで時を遡る。

私はAクラスへと歩を進めていく。

Aクラスへは比較的早くに到着した。

「失礼しまーす。」

一応、ノックもして入室するとAクラスの人たちは備え付けてある設備で料理を作ったり持ってきた弁当で昼食を摂っていた。

「あ、秋。こっちよ！」

声のした方を向くと優子がこっちに向かって手を振っていた。

「ごめん、ちょっと遅くなった。」

「いいのよ、そこまで待ってないし。それより……。」

「ん、分かってる。試召戦争のことだね。」

優子がコクリと頷く。

私は試召戦争を始めた切欠とDクラスとの試召戦争について優子に話し始めた。

「そう、まあ理由は分からなくないわ。あの設備は幾らなんでも、ね。」

Fクラスの設備はお世辞にも学業がまともに出来る環境とは言えない。

「あ、優子。なに話してるのかな？」

「あら、愛子。どうしたの?」

突然、話しかけてきたのは黄緑色のショートカットでボーイッシュな感じの女子だった。

「秋、コッチは去年の終わり頃に転入してきた工藤愛子よ。愛子、コッチは私の幼馴染の……。」

「ああ、君が吉井秋ちゃんか。話は優子からよく聞いているよ。よろしくね。」

「こっちこそ、よろしくね工藤さん。」

「愛子でいいよ。私もアキちゃんって呼ぶから。」

「ん、なら愛子。よろしく。」

「よろしく、アキちゃん。」

ふむ、愛子は中々元気のある子だね。

「そういえば、アキちゃんの持ってるソレって何？」

「これ？ これはFクラスの友達と一緒に食べる弁当。」

「そうだったの？ なら、話はもういいから行ってあげなさい。」

「あんまり遅くなっても駄目だしね。そうさせてもらうよ。でも、先に姫路さんの弁当を食べてると思うけどね。」

と、私が座っていた席を立とうとした時だった。

「……ソレって本当？」

気配もなく私の背後から声がした。

「わっ！」

「……今の話、本当？」

「代表!？」

私の背後に居たのはAクラス代表、霧島翔子だった。

「今の話って？」

「……姫路さんの弁当を食べてるって話。」

妙に霧島さんの雰囲気がおかしい。

なんだか焦っているみたいだけど……。

「う、うん。本当。」

「……なら、急いだ方が良い。」

はて、急ぐ必要なんてあるのかな？

「去年、彼女のクラスが調理実習をした時、先生と一部の生徒が病院に運ばれた。」

『え?』

何だか霧島さんの口からありえない事を聞いた気がした。

「で、でもそれって姫路さんが作ったとは限らないよ、代表？」

「……でも、姫路さんの調理してた鍋が溶けたって話を聞いた。」

——ナンデスト？

「い、急ぎなさい！ 秋、急いで！！！」

「う、うん！！！」

私は弁当をなるべく揺らさないようにしてAクラスの教室を出て行った。

早くしなければ優希達の命が危ない。

幸い道はあまり混雑していなかった為に屋上へ行くのに時間は掛からなかった。

「皆っ！ だいじょう——。」

屋上への扉を開けると晴れ渡った蒼空と、

「お、遅かった……。」

阿鼻叫喚とした地獄絵図が目の前に広がっていたのだった。

t o b e c o n t i n u e d . . . .

**第8問 く私と命と手作り弁当く前編（後書き）**

いかがでしたでしょうか？

お楽しみいただけたのなら何よりです。

それではまた次の機会にお会いしましょう。

ではではっ！

第9問 く私と命と手作り弁当 く 後編（前書き）

仮面ライダー      さん、鳴神 ソラさん、感想ありがとうございます！

さて、私と命と手作り弁当後編、始まります！

それでは、どうぞ！

## 第9問 く私と命と手作り弁当 後編

### 問題

以下の問に答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質？炭水化物？タンパク質？ビタミン？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

日之影黒刀の答え

『？脂質？炭水化物？タンパク質？ビタミン？姉さん』

教師のコメント

途中までは合ってます。

お姉さんは栄養素ではありませんよ？

吉井優希の答え

『？砂糖？塩？水道水？雨水？アキ姉』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

「そういえば坂本、次の目標だけど。」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん。」

あれから十数分後、後から来た姫路さんを何とか誤魔化し現在に至る。

因みに私の弁当を差し出したら皆涙を流しながら食べてくれた。

優希に至っては「こんなに弁当が美味しく感じられたのは初めてだよ……。」と哀愁漂う雰囲気と言われた。

因みに姫路さんの弁当を食べた人全員はお茶を兎に角飲ませておいた。

お茶には殺菌成分が含まれているらしいから……。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ。」

そういえば昨日雄二が言っていた。

Dクラスの窓の外に設置されている、Bクラス用エアコン室外機に用があるって。

どう考えてもAクラスを攻めるのにBクラスの室外機になんて用はないだろうから次の目標はBクラスで間違いない。

「何故Bクラスなのじゃ？ Eクラスは分かるのじゃが順当に行っても次はCクラス。目標に変わらないのなら寄り道している暇はないと思うのじゃ。」

確かに、私達の目標はAクラス。

通過点に過ぎないBクラスを相手にする理由が分からないのだろう。

「正直に言おう。」

雄二が急に神妙な面持ちになる。

「どんな作戦を用いようと、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない。」

戦う前から降伏宣言。

雄二らしくもない。

とはいえ、雄二の言う事も分からないでもない。

文月学園はAからFの6クラスから成るけど、Aクラスは格が違う。

そもそもの次元が違うのだ。

確かに、Aクラス並の実力を有し上位メンバーに食い込むほどの学力を持つ人物がFクラスにはいる。

姫路さん、美琴、黒刀の3人がこれに当たる。

でも、それだけなのだ。

突出した家庭科を武器に楓が攻め込んでも3人同時に囲まれたりしたらそれで終わり。

FクラスのメンバーがAクラス1人を相手するのに5〜6人程度は確実に必要になる。

Fクラスが前線に必要な人員は本陣の警護や姫路さんたち主力を抜くと大体30人前後になる。

そうするとAクラスは精々6人足止めするのが精一杯、Aクラスの残り40数人は簡単に雄二を討ち取る事ができる。

姫路さんたち主力が突っ込んでも代表である霧島翔子に辿りつく前に補習室送りになるのは間違いない。

どんな作戦を用いようと代表を倒せなければ意味が無い。

運よく奇襲が成功したとして私達が彼女1人を取り囲んだとしても、恐らく全員返り討ちに遭うだけ。

それほどまでに天才霧島翔子の学力は高いのだ。

トドメを刺せない以上、私達に勝ち目は無い。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

AクラスほどじゃないけどBクラスの設備だって立派過ぎるほどに

立派だ。

皆には何の不満もないだろう。

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる。」

「え、でも坂本君の言ってること、さっきと全然違いますよ?」

楓が雄二の台詞を引き継ぐように間に入る。

そこで気が付いた。

雄二がどうすればAクラスに勝てる算段を立てたのか。

「一騎討ちね?」

「……そうだ、一騎討ちに持ち込むつもりだ。それにしてもどうして秋はその機転の良さをテストに生かせないんだ?」

「フツ、悪知恵が働くのと頭がいいのは比例しないんだよ、雄二。」

「いや、そんな自信満々に言われてもな……。」

「優希がいい証拠さ。」

「あー、納得した。」

「ちょ、雄二!? 納得しないでよ!?」

「それで、どうやって一騎討ちまで持つてくんだい?」

「Bクラスを使う。」

「無視された!？」

優希の抗議をまたも無視して話を進めていく。

優希、強く生きて。

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどのなるか知っているな？」

「え？ も、勿論!（知らないよ?）」

（はぁ、優希。下位クラスは負けたら設備のランクを1つ落とされるんだよ。）

仕方ないから助け舟。

優希も理解できたのか表情が晴れる。

「設備のランクを落とされるんだよ。」

「……まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ。」

「そうだね、常識だね。」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい？」

「姐さん、アイアンクロー。」  
あね

「オツケー、任せときな。」

「ややっ、私の頭を砕こうとする動きがっ。」

まあ、ある意味間違っちゃいない。

確かに悔しいだろう、色々な意味で。

「相手クラスと設備が入れ替えられるんだよ、それくらい覚えとけ。」

黒刀が珍しくフォローを入れるが一言多い。

「つまり、ワシらに負けたクラスは最低の設備と入れ替えになるわけじゃな。」

「ああ。その設備を利用して、交渉する。」

「交渉、ですか？」

「そうだ、楓。交渉だ。Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まず上手くいくだろう。」

「それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな。」

「なるほどね！」

学園で二番手のクラスと戦った後に休む間もなくまた戦争。

これはどのクラスでも辛いだろう。

Fクラスも連戦になるけど、私達にはAクラスにはない“不満”という原動力がある。

そもそも頭は悪いけれど体力だけならEクラスに負けずとも劣らない。

一方、Aクラスはそうじゃない。

勝つても得るものはなく、Fクラス相手に時間をくうのも嫌がる筈。モチベーションの差は歴然としている。

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに――。」

「それに？」

「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？ Aクラス代表は生半可な実力では打倒できんぞ。」

「その辺に関しては考えがある。心配するな。」

自信満々な笑みを浮かべる雄二。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる。」

「フーン。ま、考えがあるならいいよ。で、今回は誰が宣戦布告をやるの?」

「勿論、ゆ」却下。「っ、そういうと思ったぜ。なら、お前が行くか秋?」

「勿論、そうさせてもらうよ。」

「き、危険だよアキ姉!」

「そうです、危険ですよアキ姉さん!」

優希と楓が私を止めようと必死になってしがみ付いてくる。

「そうじゃぞ、お主が行くならワシも行く。そうしなければ姉上に殺されてしまうからの。」

「……一緒に行く。」

「もしなんなら私と黒刀が行こうか? もし殴りかかってきたら返り討ちさ。」

美琴が肩に手を置いてそう言ってくれる。

「でも、そんなことしたら停学くらっちゃうよ？ そんなことさせられないよ。」

美琴の提案は嬉しいけれどね。

「だから――。」

「だから？」

「鉄人を連れて行くよ。Bクラスといえど鉄人に睨まれるような真似はできないだろうし。」

勿論、そんなつもりは毛頭ないけれど。

「ま、鉄人が一緒なら大丈夫だろ。」

「そうだな。」

「まあ、それで納得しとくよ。」

雄二と黒刀、美琴は恐らく、私にそんなつもりがないことに気が付いているんだろう。

諦めたような表情からそのことが見て取れる。

他の皆は今ので納得しているみたいでよかった。

「とにかく、頼んだぞ。」

雄二の言葉を背中に受けて昼食はお開きになり、再びテスト漬けの午後が始まった。

\*\*\*

テストの終わった直後の放課後、私はBクラスの教室の前に居た。

Bクラスに宣戦布告をするためだ。

「さて、行きましょうか。」

そう言って教室の扉に手を掛けた時だった。

「秋、そんなところで何してるの？」

「——優子。」

まるで狙い済ましたかのような登場だね。

とは口が裂けても言わない。

「まさかとは思うけど、もう宣戦布告するの？」

「まあ、ね。」

「呆れた、Fクラスも少しは落ち着きを持ったら？」

「仕方がないよ、不満というモチベーションはいつまでも続かないからね。」

「そうかもね。それで？　あなた1人で使者を？」

なんだか優子の表情が一瞬変わったけど気のせいだと思いたい。

ほんの一瞬だけ般若が見えた。

「そつだよ。」

「そつ、じゃ私も付いてく。」

「——は？」

今、優子は何て言った？

私も付いてく？

「ちょ、駄目に決まってるでしょ？　優子はAクラスなんだからBクラスとFクラスの宣戦布告には何ら関係ないでしょ！？」

「でも、下位クラスの使者は大概酷い目に遭うのが通例よ。そんな危ない真似、私がみすみすさせるとでも？」

優子なら絶対にさせないだろう。

どんな手使つてでも守るに決まってる。

昔から優子はそつだったから。

「はあ、分かったよ。でも危なくなったら、だからね？」

「勿論よ」

スツと私の背後に立ち笑みを浮かべる優子。

さて、宣戦布告をしに行きましょうか。

「失礼します。」

「ん？ 何だ君は……？」

「Bクラス代表は何処に居ますか？」

「代表？ それならあそこにいるヤツだよ。」

指を指された方を向くとそこには学園でもかなり“有名な”根本恭二がいた。

彼がクラス代表らしい。

「代表、客です。」

「なんだ、俺に何か用か？」

根本君は私を睨むようにして座っている。

その表情、直ぐに歪ませてあげる。

「ええ、私達Fクラスは――。」

ゴクリ、と何処から生唾を呑むような音が聞こえた気がした。

「――Bクラスに宣戦布告をします！」

\*\*\*

「大丈夫かな？ 何だか凄く心配になってきたよ。」

「う、うん。やっぱり付いて行けば良かったかな？」

「止せ、逆に被害を広げるだけだ。」

「雄……。」

――ガラガラ

「や、ただいま。」

「アキ姉!!」

「アキ姉さん!!」

扉を開けて直ぐに視界に入ってきたのは優希と楓だった。

物凄い勢いで私にボディタックルをかましてくる。

「おっと、どうしたの2人とも？」

「どうしたのじゃないよ!! 凄く心配した……ってアキ姉、傷1つ無いね？」

優希は私の体をジッと見てそう言った。

傷一つ無いといっても未だ表情の晴れない優希を安心させる為に飛び切りの笑顔でBクラスで遭った事を誤魔化する。

あれはスゴかった。

まるで……いや止めよ、思い出すだけで震えが止まらなくなる。

「当たり前でしょ？ お姉ちゃんを誰だと思ってるのよ？ お姉ちゃんよ？」

「そうだね、アキ姉だもんね。」

なんでこんな誤魔化しを素直に受け入れるかな？

「それで、宣戦布告はしてきたんだな？」

「勿論、明日の昼からだよ。」

「ということは昼食を摂ってからじゃな。」

「よし、明日もテスト頑張るよ！」

『応っ！！（うんっ！！）』

美琴の掛け声で皆それぞれ気合を入れて今日は解散となった。

\*\*\*

「さて皆、総合科目テストご苦労だった。」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も午前中がテストで、ついさっき全科目のテストが終わって昼食を取ったところだ。

総合科目勝負なんてやったものだから、補給のテストが多くて大変だった。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

一向に下がる事のないモチベーション。

私達のクラス唯一の武器と言っても過言じゃない。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希を司令官、副司令に日之影美琴に指揮を執ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」

「が、頑張ります。」

「よっしゃ、やってやろうぜー！」

姫路さんは男のノリについていけないのか、若干引き気味になって一歩前へ出る。

対して美琴はノリノリで応えた。

『うおおーっ!』

一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に達しようしていた。

今回はとりあえず渡り廊下での戦闘に勝ちに行けらしい。

ここで負けると話にならないから、戦力もFクラス50人中40人を注ぎ込む。

その中には勿論、優希や楓、島田さんや秀吉などといったメンバーも含まれている。

「チッ、また今回も留守番かよ。」

「文句言わないの、私も教室で待機なんだから。」

そう、今回私と黒刀は前線から外されている。

まあ所謂保険というヤツですよ。

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。

これでいよいよBクラス戦開始だ。

「よし、行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

こうして私達Fクラスの2度目の試召戦争が開幕した。

t o b e c o n t i n u e d . . . .

第9問 く私と命と手作り弁当 く 後編（後書き）

はい、Bクラス戦前ぐらいまで書きました。

今回、Bクラス戦ではあんまり黒刀は活躍しないかもです。

いや、もしかすると活躍する機会はあるかもしれない……

まあ、それは後々明らかになることですけどね。」

誤字脱字のみならず、感想もお待ちしております！

ではではっ！

## 第10問 くあの日と謀略とBクラス戦く（前書き）

鳴神 ソラさん、仮面ライダー      さん、ご感想ありがとうございます！！  
います！！

Bクラス戦になります。

本当は秀吉の変装までやりたかったんですが、流石に無理でした。

それでは、どうぞ！

## 第10問 くあの日と謀略とBクラス戦く

### 問題

次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年、キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

「1549年」

・教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

木下秀吉の答え

「五世紀」

・教師のコメント

一説には、五世紀頃に秦河勝という人物がネストリウス派キリスト教を伝えた、とありますが残念ながら学会の通説ではないので不正解です。

坂本雄二の答え

「雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993」

――

・教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

土屋康太の答え

「雪の降り続ける中、君の―――を―――した」  
45」

・教師のコメント

卑猥な表現をしても間違いは間違いです。

後で生徒指導室に行くように、西村先生がお待ちかねです。

＼Yuki side＼

『サー、イエッサー！』

みんなの掛け声と共に試召戦争は勃発した。

私達はほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した。

今回の此方の主武器は数学。

Bクラスは比較的文系が多いのと、何故か長谷川先生は召喚可能範囲が広いというのが理由。

一気に勝負をかけたい時にはありがたい先生だ。

他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。

立会いの教師を多くして一気に駆け抜ける！

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

正面を見てみると向こうからゆっくりとした足取りでBクラスメン  
バーが歩いてくる姿があつた。

人数は10人程度。

あくまで様子見といったところだろうか。

「生かして帰すなーっ！」

物騒な台詞が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

Bクラス 野中長男 総合 1943点

V・S

Fクラス 近藤吉宗 総合 764点

や、やつぱり凄い点数差だ、まさに桁が違っ！！

Bクラス 金田一祐子 数学 159点

V・S

Fクラス 武藤啓太 数学 69点

Bクラス 里井真由子 物理 152点

V・S

Fクラス 君島博 物理 77点

圧倒的な実力差に第一陣が悉くやられていく。

トドメを刺される前にフォローをしないと戦力が激減してしまう。

キチンとフォローがされているか、戦力は分断されていないかを確認していると、

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

「ゴメンゴメン、遅れた。」

息を切らして姫路さんがやってきた。

美琴さんは恐らく姫路さんに付き添っていたんだろう。

「来たぞ！ 姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かが叫ぶ。

やっぱりBクラスともなるとAクラスに姫路さんがいないってことくらい知っていたね。

雄二も姫路さんという戦力を秘密にしておくことは難しいって言うてたもんね。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……。」

「は、はい。行って、きます。」

そのままトタトタと戦場に紛れ込む姫路さん。

あの姿を見ていると、何だか心が和むな。

写真にして飾りたいくらいだ。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数  
学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希ですよろしくお願いします。」

早速勝負を挑まれる姫路さん。

向こうとしては早く潰しておきたい相手なんだろう。

「律子、私も手伝う！」

その後ろから、更にもう1人Bクラスの女子が召喚を開始。

Bクラスは10人しか来ていないのに2人がかりなんて、よほど警戒しているみたい。

『サモン試獣召喚！』

喚声に応えて魔法陣が展開。

Fクラスにとってはおなじみの試験召喚獣が顔を出す。

敵の2体は剣と槍を構え、姫路さんの方は前に見た大剣を軽々と持  
っている。

そんな3人そっくりな召喚獣。

ただし――

「あれ？ 姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだ？」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

「？ 結構解けると、アクセサリーなんてしてるの？」

デフォルメされた姫路さんは、大剣の他に左手首に綺麗な腕輪をしていた。

「そ、それって!？」

「私達で勝てるわけじゃないじゃない！」

向こうの2人がソレを見て急に顔色を変える。

あ、そういえば腕輪をしているってことは――

「じゃ、行きますね。」

姫路さんが小さな手をキュッと握りこむ。

その動きに合わせて姫路さんの召喚獣が左腕を敵の方に向けた。

「ちょっと待ってよ!？」

「律子！ とにかく避けなと！」

大げさなくらい横に跳ぶ敵2人の召喚獣。

その直後、姫路さんの召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボツ！

「きゃあああーっ！」

「り、律子！」

左腕から光線が迸ったかと思つた瞬間、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれる。

Fクラス 姫路瑞希 数学 412点

V・S

Bクラス 岩下律子&菊入真由美 数学 189点&151点

そつえば、腕輪つてある一定以上の点数を取ると与えられる特殊能力を宿しているアイテムだったよね。

能力は全科目固定されてるけど特殊能力は効果が高いものばかりだつて聞いた気がする。

同じ能力の腕輪は滅多にないことも聞いたことがある。

「ご、ごめんなさい。これも勝負ですのでっ。」

大きく避けてバランスを崩した敵に肉薄し、大剣を振り下ろす姫路さんの召喚獣。

相手の武器ごと一刀両断し、決着は一瞬でついた。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ！ そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Bクラスの残り8人に驚愕の表情が浮かぶ。

無理も無いと思う、だって姫路さん強すぎだし……。

「よし、じゃあ私もやったらうじやないか。長谷川先生、Fクラス日之影美琴が此処に居る8人のBクラス生徒に数学勝負を申し込みます！」

「何！？ 日之影美琴だと！？ 聞いてないぞ！！」

「お、おいどうする？」

「どうするもやらなきゃ補習室送りだ。Bクラス応えます！！」

『サモン  
試獣召喚！』

Fクラス 日之影美琴 数学 212点

V・S

Bクラス 斉藤孝明以下8名 数学 平均約177点

「数学はあんまし得意じゃないんだけど、何とかなるか！」

「お、おいおい。アレで得意じゃないだって？」

「ありえねえよ……。」

「さて、じゃ行くよ!~!」

美琴さんの召喚獣は背負っていた狙撃用ライフルの照準を合わせる。

ダンダンダン!!!

テンポの良い音がすると同時に美琴さんの召喚獣の放った弾丸はまっすぐBクラス生徒の召喚獣へ飛んで行く。

『なっ!?!』

咄嗟のことで判断が遅れたのか召喚獣の脳天に弾丸が直撃した。

「3人脱落、と。」

「う、嘘だろ? 点数差はそこまでなかったのに一撃だつて……?」

「日之影美琴、姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ。」

あまりのことに動揺が走るBクラス生徒。

「よし、敵が動揺している今がチャンスだよ! 総員、突撃いっ!」

『応っ!~!』

私の号令に皆凄い勢いで相手に突撃して残り5人を片付けた。

美琴が放った弾丸によって相手が動揺していたこともあってかあまり点数を失わずに済んだ。

「じゃ、後は頑張るんだよ！」

「み、皆さん、頑張ってください！」

美琴さんの激励と姫路さんの指揮官らしくない指示。

でも、これはこれでFクラスにとっては効果絶大だ。

「やったるでえーっ！」

「姫路さん、日之影さんサイコーッ！」

信者急増中。

「姫路さん、とりあえず下がって。」

「あ、はい。」

敵を撃破したので、姫路さんには一旦下がってもらった。

特殊能力は威力の分だけ消耗も激しいという話だったから。

別に姫路さん抜きでも美琴さんだけで相手の中堅部隊の相手は充分事足りる。

「よし、点数のある者はそのまま前進！ 消耗した者は回復試験へ

「!!」

Fクラスの皆に指示を出す。

予想以上に作戦が上手く行っている。

前線部隊を壊滅させるまでは行かないだろうというのが雄二の予想だった。

でも、今は前線部隊を壊滅させて前進している。

これはかなりのアドバンテージになる。

相手の士気を挫き、かつ自分達の部隊の士気を高揚させ敵本陣へ前進できる。

こんなに上手く行っているのは姫路さんに美琴さんのお陰だ。

感謝感謝。

「優希、ワシらは教室に戻るぞ。」

「ん？　なんで？」

戦況を眺めていた私のところに秀吉がやってきた。

戻る？　本陣で何かあったのかな？

「Bクラスの代表じゃが……。」

「うん。」

「あの根本らしい。」

「根本って、あの根本恭二？」

「うむ。」

根本恭二という男からはあんまり良い噂を聞かない。

とにかく評判が悪く、噂ではカンニングの常連だとか。

目的の為には手段を選ばないらしく、曰く『球技大会で相手チームに一服盛った。』とか『喧嘩に刃物は当然装備<sup>デフォルト</sup>』とか。

流石にそこまで卑怯だとは思わないけど、用心に越した事はない。

「なるほど。戻っておいた方が良さそうだね。」

「雄二に何かあるとは思えんが、念のための。」

姫路さんと美琴さんに一言報告して、私と秀吉は何人かを連れて教室へと引き返した。

「……うわ、こりゃ酷い。」

「まさかこつくるとはのう。」

「卑怯、だね。」

教室に引き返した私達を迎えたのは、穴だらけになった卓袱台へと折られたシャープや消しゴムだった。

「酷いね。これじゃ補給がまま成らない。」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな。」

それにしても、なんか、根本君って器小さいなあ……。

「あまり気にするな。修復に時間は掛かるが、作戦に大きな支障はない。」

「雄二……。」

いつの間にいたのかそこには我等が総大将<sup>雄二</sup>がいた。

＼Y u k i   s i d e   o u t＼

「雄二……。」

優希がこちらに気付いたのか振り向きながら雄二に声を掛ける。

雄二や黒刀の背中が目の前にあって教室がどうなっているのかは分からないけど十中八九根元君の嫌がらせがあったんだと思う。

「それはそうと、どうして雄二は教室がこんなになっているのに気付かなかったの？」

優希がそう問いかけてくる。

そう、私達雄二の護衛はある申し込みがあったためこの場を空にした。

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた。」

「協定、じゃと？」

「ああ。4時までには決意がつかなかったから戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな。」

「それ、承諾したの？」

「そうだ。」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

「姫路や楓以外は、な。」

姫路さんや楓はお世辞にも運動が出来るとは言い難い。

女の子なら仕方の無い事だけど、男と比べるとどうしても体力面で問題が出てくる。

普段から身体を動かしている私や優希、美琴は大丈夫なだけで前者2名はあまり身体を動かした事はない。

楓は強いてあげるなら秀吉と同じ演劇であるがそれはあくまで演技

での範囲内、本格的な運動は体育ぐらいのものだ。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日という事になる。」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせるかどうかは怪しいからね。」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路や楓、姐さん達の個人戦闘能力の方が重要になってくる。」

局所的な戦闘になるってことだろうか。

それとも、Dクラス戦みたいに姫路さんがトドメを刺すとか。

「だから受けたの？　姫路さん達が万全の態勢で勝負できるように。」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い。」

そっか、でも気になることも1つだけあった。

「だが雄二、何か変じゃないか？」

「変って……何がだ？」

「幾らなんでもソレぐらいの事くらい根本なら気付くだろう？。」

「……どういうことだ？」

「そのままの意味だ。態々Bクラスにとって不利な条件で協定を結ぶなんて代表がするわけがない。何か裏があると見て良いだろう。」

そう、さっきから私も黒刀もそれを危惧していた。

切欠は黒刀が根本君や近衛兵を観察して違和感を感じたらしい。

他のBクラス生徒が抗議すら上げずにその協定を承諾していた事。

更に、中には薄笑いをしながらその協定を眺めている者もいた。

「……なるほどな。分かった、注意しておこう。」

「それよりさ、教室ってどうなったの？ さっきから雄二達が邪魔で見えないんだけど……？」

そう、さっきから本当に2人が目の前から動かないから教室の様子が全く分からないのだ。

私だって被害がどれくらいなのか把握したいのに……。

「ああ、すまなかったな。」

そういつて2人とも道を開けてくれる。

でも、今思えばそれは止めた方が良かった。

「——あ。」

私の目に飛び込んできたのは、へし折られたシャープや粉々になっ

ている卓袱台だった。

その光景は……少し昔に見たモノと似ていた。

少しだけ教室が夕日の赤みを帯びていて、まるであの日に見た光景と似ていた。

ノイズが奔っていて所々ぼかしてあるけど、それは私がずっと心の奥底に押し込めていた負の感情と記憶に他ならない。

その光景は嫌というほど鮮明に覚えている。

紅い血溜まり、トビチツタ血痕、傷ツイタ友達、何も出来なかつた無力ナ、ソシテ愚カナ自分自身……

あの日の光景が私の脳内でフラッシュバックした……。

＼Y u k i   s i d e ｝

アキ姉の様子がおかしいことには直ぐに気が付いた。

そして、自分の失敗に気が付いた。

これは、昔アキ姉が見たという光景に似ていたから……。

「（ッ！！ アキ姉……！！）」

急いでアキ姉の元に駆け寄ってアキ姉の視界を覆い隠すように身体を抱きしめる。

事態が急変したことにみんなも気付いたのか此方に駆け寄ってきた。

『秋!!』

「アキ!？」

「アキ姉さん!？」

「おい! 秋のヤツはどうしたんだ!？」

「――。――」

今はそれに応えるよりアキ姉を落ち着かせる事の方が重要且つ重大だ。

幸いにも見た時間が少なかったのが良かったのか比較的直ぐに落ち着きを取り戻しつつあった。

「――悪いけど、雄二の疑問には答えられない。これは……お姉ちゃんの――吉井秋個人の問題だから。アキ姉自身がケリを着けるまでは答えられない。」

「――ああ。分かった。なら、それ以上は聞かねえさ。」

雄二はそれきり言うとその以上の追求をしてこなかった。

――ありがとう、雄二

＼Yuki side out＼

優希のお陰で直ぐに落ち着きを取り戻した私はとりあえず教室に残ることになった。

教室は既に片付けられており再び私が取り乱す事はなかった。

あれから少し経って、あの場にいた楓と黒刀以外の皆はムツツリー  
二の報告に基づいてCクラスへ同盟を結びに行っている。

所謂不可侵条約だ。

流石にBクラス戦の後、連戦でCクラスを相手取るのは厳しい。

その為の不可侵条約。

でも、何か忘れていているような気がした。

そう、重要な何か……………。

「あ、あのアキ姉さん。さっきは大丈夫でしたか？」

「ん、もう大丈夫だよ。」

楓が不安げな表情で私に尋ねてきていた。

よっぽど酷く取り乱したから仕方ない、か。

「にしても良かったぜ。あんまり戦争が長引かなくてよ。Bクラス  
との条約があつてよかったところか。」

「うん、確か午後4時以降は……っ！！」

黒刀に言われて気が付いた。

そう、Bクラスとの条約の中にこういう一文があった。

―午後4時以降の試召戦争に関する一切の行為を禁止する―

「不味い、嵌められた!!」

「え？」

突然の事で楓も黒刀もキョトンとしている。

「Bクラスとの条約では午後4時以降は試召戦争に関する一切の行為禁止されているの。つまり……。」

「で、でも。私達がやっているのは“Bクラスとの試召戦争”じゃなくて……!」

「そういうことか。条約の一文には試召戦争って大まかなモノしか載ってない。幾らへ理屈を並べたところで奴等はそれで押し切るつもりだ。」

「じゃあ……。」

「まだCクラスには着いてないと思うけど……楓は此処で待ってて。私と黒刀が走れば多分間に合う!!」

「あ、ちょ、ちょっとアキ姉さん!? 日之影君!？」

楓の制止を無視して私達は教室を後にしたのだった。

＼Yuki side＼

現在、時計は4時12分を廻ったところを指していた。

今私達はCクラスへ不可侵条約を結びに行っている。

「よし、Cクラスに着いたぞ。」

「ねえ、雄二。」

「何だ？」

「気になってたんだけど、どうやってCクラスと条約を結ぶ気なの？」

「それなら簡単だ。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、とか言っ  
て脅してやれば俺たちに攻め込む気も無くなるだろ。」

「そうだね。」

「よし、行くぞ。」

Cクラスへと入室してその場に居る誰にでも聞こえるように雄二が  
声を張り上げた。

「Fクラス代表としてCクラスと話し合いをしに来た。時間はある  
か？」

「此処に居るわ。」

そう言つて姿を現したのは此処Cクラスの代表小山友香。

「それで、貴方達Fクラスが私達に何を交渉しに来たの？」

どうやら小山さんは話を聞いてくれるみたいだった。

でも、何だろ……なんだか激しく嫌な予感がするんだけど……。

「俺達Fクラスは……『P r i r i i ……おい姐さん、携帯くらい切つといてくれないか？』」

「ハハハ、悪い悪い。つと何だ秋からか……」

どうやら連絡相手はアキ姉みたいだ。

「さて、話しが少し逸れたが俺達Fクラスは……「ちょっと待った。……今度は何だ姐さん？」」

二度も台詞を遮られて流石にイラついたのか少しだけ青筋が見え隠れしている。

ま、分からないでもないけどね……。

「雄二、悪いけど“話し合い”は中止だ。」

「は？ 一体何を言つて……。」

「そこに居るんだろ？ ねえ、Bクラス代表根本恭二。」

「なっ!？」

「あれは根本!？」

「見るのじゃ、あんな所に数学の長谷川先生がおる!！」

秀吉が指差した方を見るとそこには戦場集結まで戦場にいたはずの長谷川先生の姿が隠されていた。

「あそこにはBクラスの連中がいるわ。」

島田さんの指した先には近衛兵と思われる生徒が数人隠れていた。

「何故此处に居るのが分かった。」

「今、私達のお姫様から連絡があつてね。」

「吉井秋か!！」

何か思い当たる節があるのか何故かBクラスの生徒が「しまったっ!」と口々に言っている。

アキ姉の事を何か知っているのかな？

それに、どうしてみんな顔を青くして震えているの？

「そういうことだ。どうせ私達が此处へ条約を結びに来たところを条約違反だとか言って襲撃するつもりだったんだろ？」

「グッ……。」

「それに、私達はCクラスと話し合いに来たって言ったんだ。なのはどうして……私達が“交渉”に来た、なんて分かったんだ？」

「ッ……しまった。」

美琴さんの言う通りだった。

確かに雄二は此処へ来たときに『Fクラス代表としてCクラスと話し合いをしに来た。時間はあるか？』と言った。

でも、交渉なんて一言も言っていない。

なのに小山さんははっきりと交渉に来たのかと聞いてきた。

「じゃあ、初めからBとCは……。」

「繋がっていた、ということじゃろっな。」

「そんな!!！」

姫路さんの悲鳴に似た声が教室に響き渡る。

「チッ、そこまで知ってるってんなら、容赦しない。行けっ!!！」

「長谷川先生！ Bクラス芳野が召喚を——。」

此処から逃げるためなのかBクラスの生徒の1人が此方へ攻撃を仕掛けてきた。

しかし――。

「承認できません。」

「え？」

長谷川先生から聞こえてきたのは不承認の声だった。

「どうやら先にBとF間との協定を破ったのはBのようですし。今日一日は既に試召戦争は停戦にあります。故に此処での戦闘は両クラスとも承認することは出来ません。」

「クソッ、おい逃げるぞ！！」

旗色が悪いと見るやすぐさまCクラスの教室を後にした。

「は、長谷川先生。ありがとうございました。」

「いえいえ、悪いのはBクラスなのです。そもそも私が先に協定の事に気付いていたのならこのようなことは起こらなかったのですから貴方方が気にする必要はありません。」

そういうと長谷川先生は職員室へ戻っていつてしまった。

それと入れ替わるようにアキ姉と黒刀が教室へと入ってきた。

黒刀はともかく、アキ姉は相当急いで走ったのか衣服が所々乱れてかなり色っぽい。

そんな色っぽいアキ姉の姿を見た私は無論、我慢なんて出来るわけもなく……。

「アキ姉え!!!」

思わず飛びついていた。

＼Yuki side out＼

私と黒刀は今Cクラスへと続く廊下を疾走していた。

でも、時間的に間に合うのはかなり厳しい。

そこで私は徐に携帯を取り出し美琴に事の事態を伝える為のメールを打って送信した。

「よし、これで美琴に連絡が行ったはず。」

「だが、姉さんが携帯を見る保障なんて何処にも……。」

黒刀が尤もなことを言ってるけど、それは美琴には残念ながら当てはまらないんだよね……。

「美琴はね、いつでもどこでも携帯のマナーモードは入れない主義なんだよ。」

「……姉さん。」

黒刀が非常に悲しそうな顔をしている。

「だから西村先生によく携帯を没収されていたねえ。」

あれは今でもいい思い出だ。

きつと1・Dにとってはいい語り草になるに違いない。

いや、本当に……。

「よし、もうすぐCクラスに着くぞ！」

私達がCクラスの前に着くと同時に数学教師の長谷川先生が教室の扉を開けて出て行った。

それと入れ替わるように教室へ入ると、私の視界に広がったのは目が明らかにイってしまっている我が妹だった。

「アキ姉え!!!」

優希の盛大なボディータックルに反応することが出来ずそのまま押し倒される。

「ちょ、ちよつと優希!？」

「アキ姉えー!。」

グリグリと私の胸に顔を押し付けている優希。

一体私が何をしたと？

「エロい、エロいよアキ姉え。」

——つまり、何か？

優希は私の運動した後の姿に欲情したと？  
変態

「い・い・か・げ・ん・に……。」

「へ？」

素早く優希の背後へ移動し、そのまま優希の腰に手を回してそのまま彼女を宙高く持ち上げたまま跳躍する。

勿論、落下の際優希の頭は地面の方へ向けるのは忘れない。

「しなさい！！！」

「んゴペツ！！！」

そのまま地へとスーパーバックドロップを決められて優希は暫く痙攣が止まらなかった。

（Ｃクラスを含む）みんなは恐怖のあまり悲鳴すら上げずにその光景を眺めていた。

「どうかしたの？」

「いや、何でも……。」

「あ、ああ。別に何でもないぞ。なあ雄二？」

「そつだ、別に何でもない。」

「そつじゃ、お主は気にせんでもよい。」

「は、はい。何でもないんです。ね、美波ちゃん。」

「う、うん。」

「……何でもない。」

みんな、口々にそんな事を言ってる。

でも、皆顔色が悪い。

大丈夫かな？

「（今後……。）」

「（秋を怒らせるのは……。）」

『絶対に避けよう……！』

後から優希に（無理矢理）聞いたんだけどその場に居た全員はそう心に誓ったとか誓わなかったとか……。

因みにこれは余談だけど、優希の暴挙を優子に報告すると優希は口メロスペシャルを掛けられた上、。。。し固。を決められたらしい。

勿論、メイド服を着せられてビデオと写真まで撮られて……。

まあ、自業自得なんだけどね」

t o b e c o n t i n u e d . . . .

第10問 くあの日と謀略とBクラス戦く（後書き）

ということで10話目でした。

皆さんに楽しんでもいただければ幸いです。

ではではっ！

## 第11問 く対策と自爆とピンチとく（前書き）

すいません、更新が遅れました。

理由としては今年受験生であるのが大きく影響しているんですが、他にも色々と行事があったのでそれで遅れました。

はい、というわけで第11問、始まります。

## 第11問 く対策と自爆とピンチと

問題 以下の問いに答えなさい

『 “エンゲル係数” とは何か答えなさい 』

姫路瑞希の答え

『 家計の消費支出に占める飲食費のパーセントのこと 』

教師のコメント

正解です。1857年にドイツの社会統計学者エルンスト・エンゲルが論文で発表しました。

吉井秋の答え

『 誰かさんが人並の生活を今後送れるかどうかの係数。 』

教師のコメント

それは係数とは言わないのでは？

その誰かさんはまさか自分の妹ではありませんよね？

吉井優希の答え

『 数学で用いられる係数 』

教師のコメント

数学でも化学でも物理でも用いません。

「昨日言っていた作戦を実行する。」

翌朝、登校した私達に雄二は開口一番そう告げた。

「作戦？ でも、開戦時刻はまだだよ？」

優希の言う通り今の時間は午前8時半。

開戦予定時刻は9時。

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ。」

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

「秀吉にこれを着てもらう。」

そう言っただけで雄二が鞆から取り出したのはウチの学校の女子制服。

でも雄二、どうやってそれを手に入れたのさ？

「なに、学校指定の服屋へ行ってお袋に買わせたただけだ。」

それはそれでイケナイことじゃないかな？

因みにうちの学校の女子制服は赤と黒を基調としたブレザータイプで、他校にもオトナのオトモダチにもかなり人気がある垂涎の逸品だ。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

男としては大いに構った方が良さそうな気がしないでもないけど、秀吉だしねえ。

それにしても、そんな物着て後で泣きついて来ても知らないからね？

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらう。」

やっぱり、それが狙いか。

秀吉も楓も優子も3人とも一卵性ではないかと思うほどよく似ている。

違う箇所なんてテストの点数と話し方とスタイル以外に思いつかない。

彼女に化けてAクラスとして圧力をかけるという作戦みたいだ。

「でも、それだと楓の方が良くないかな？ 女の子だし……。」

優希の意見も尤もだ。

態々秀吉を女装させなくても楓がいる以上彼女が行くのが適任だとは思う。

でもね……

「私は……その、気乗りしません。姉さんに化けてCクラスに圧力を掛けるにしても姉さんに良い印象を持たせるどころか下げかねませんから。」

というように大抵この手の頼みはいつも断っているため秀吉が適任なのだ。

……後で関節技の餌食になるのは目に見えてるけど。

というわけで秀吉には着替えをしてもらうことになった。

そこまでは良いんだけどいきなり教室で服を脱ぎ始める秀吉。

——不味い

「秀吉、ストップ。」

「何じゃどうしたのじゃ秋？」

とりあえず女子制服と秀吉の首根っこを引っ掴んで教室を脱兎の如く飛び出した。

「アンタはね、ちょっとは周りを考えなさい。そんなだからみんなに男として見てもらえないんだよ？」

「うつ……そうかもしれないの。今度は気をつけることにしよう。」

納得してくれているみたいで安心した。

安全な場所まで引っ張って着替えさせてから再び教室へ戻ると凄く非難を浴びた。

主に1人の生徒から。

「……（此処で）着替えないんなら先に言ってほしかったっ！……！」

「ムツツリーニ、本音が隠せてないよ。」

「ああ。開き直ったか？」

ツッコむべきところは残念ながらそこじゃないと思うよ？

「それはともかく、早速Ｃクラスへ行くぞ。」

雄二の言葉に私・美琴・雄二・優希・黒刀は教室を後にしてＣクラスへ向かった。

Ｃクラスへ着くと秀吉が一步前に出て教室の扉の前に立った。

「あまり気は進まんが仕方ないのう。」

「それじゃよろしく頼む。」

ガラガラガラ、と秀吉がＣクラスの扉を開ける音が聞こえてくる。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

――。

「ねえ、アキ姉。何やってるの？」

優希は私がしていることが気になったのか小声で尋ねてくる。

「優希……。」

ニツコリと笑顔を浮かべる。

優希の顔色が見る見るうちに青くなっていく。

「な、何？」

「まだ……………生きていたい？」

「——うん。」

それっきり私の行為に優希は何も追求してこなくなった。

「おい、話が進んだみたいだぞ。」

雄二の声に私達は再び聞き耳を立てることにした。

『な、何よアンタ！』

この高い声は昨日会ったばかりのＣクラス代表の小山さん。

怒っているのが目に見えて分かる。

『話しかけないで！ 豚臭いわ！』

自分から来たのに豚臭いって。

もうツッコミどころが多すぎるよ。

その後も秀吉の挑発はエスカレートし、遂には『私はね、こんな臭

くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』とか『手が穢れてしまっから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。』とか物凄い挑発を連発していた。

さっき、気乗りしないと言ってたくせにノリノリだね秀吉……。

言いたい事を存分に言ってきた秀吉はCクラスから出てくると何処かスツキリした顔だった。

「これでよかったかのう？」

「ああ。素晴らしい仕事だった。」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

雄二の満足そうな声の後、雄二の作戦が上手くいったことを物語った事を確認した。

……優子には悪いことしたかな。

「作戦も上手くいったんだ。俺達もBクラス戦の準備を始めろぞ。」

「あ、うん。」

黒刀の言葉に私は再び気持ちを試召戦争へと切り替える。

今は目の前の事に集中しよう。

私達はそのまま足早にFクラスへと戻った。

\*\*\*

＼Yuki side＼

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！ 戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が廊下を飛んでいく。

その後、午前9時よりBクラス戦が開始され、私達は昨日中断されたBクラス前という位置から進軍を開始した。

雄二曰く、『敵を教室内に閉じ込める。』とのこと。

そんなわけで指示を遂行しようと戦争をしている。

戦局は此方に傾きつつあるものの流石はBクラスというところか、中々思うとおりに閉じ込める事ができないでいた。

「木下副隊長！！ Bクラスに包囲網が突破されそうです！！」

「なんじゃと!？」

やっぱり此処で地の差が出てきた。

此方が多勢に無勢でも向こうは一騎当千。

いつまでもBクラスを留めておく事は難しい。

でも、雄二の作戦では根本のところには到達できないでも相手を教室内に閉じ込め続けることは簡単のはず。

それが上手くないのは姫路さんの様子がおかしいということが起因している。

本来、姫路さんはこの部隊の総司令官。

でも、今回の彼女は指示を出すどころか縮こまってしまってるで役に立ってない。

何かあつたのかな？

「クッ。優希、此処を任されてくれんか？」

「秀吉が行くの!？」

「それしかあるまい。此処に居る人員を割くにもこれ以上は右側の出入り口も押し切られてしまう。ワシが行けばまだ後方は十分に持つはずじゃ。既に坂本には増援の要請も出しておいた。優希が此処を任されてくれればワシも安心して戦場へ行ける。……頼めんかの？」

秀吉の目は信頼のソレ。

いつもは女の子みたいな顔や性格をしているのに、時々見せる男の姿に私は一瞬だけ見惚れてしまう。

……  
ってしつかりしなきゃ私！！

「う、うん！ 此処は私が持たせるから秀吉は行ってきて。」

「うむ、では行ってくるのじゃ。」

そう言つて秀吉は前方の包囲網へと突っ込んでいった。

——サモン試獣召喚！

戦場から秀吉の戦いの合図が聞こえてきた。

——さあ、私も自分の仕事をしなくちゃね。

「前方は秀吉達が持たせてくれてる！ 私達は右出入口口の包囲網を突破されないように死守するよ！！」

「任せてください！！」

「例え死<sup>戦死しても</sup>んでも包囲網は死守します！！」

「さあ、行くぞ！ 勝利の女神は我等に微笑んでいる！！」

『応っ！！』

Fクラスの男子は先程よりもいい動き見せてBクラスの男子や女子を翻弄していたりした。

これなら行ける。

そう思つていても中々事は思つようには進まない。

「吉井代理大変です。既に左出入り口部隊は壊滅状態に陥ってしまっているようです!!」

その言葉を聞いた時、私は一瞬だけ頭が真っ白になった。

「ッ!……須川君!!」

「何だ吉井!!」

「悪いけど、此処頼んだよ!!」

「な、何言って……。」

「私が左出入り口に加勢してくる。その間だけでいいから此処を持たせて!」

一瞬だけ姫路さんを見る。

まだ彼女はもうしたら良いか分からないみたいでその場から動こうとしない。

「——頼んだよ。」

「——分かった。」

須川君は私の真剣なのを感じ取ったのか神妙な顔で納得してくれた。

無事でいて、秀吉!!

左出入り口まで疾走するとそこには死屍累々とした光景があった。

仲間と敵の骸がそこかしこにあり本当の戦場のような状態になっていた。

「秀吉は……まだ生きてるの!？」

「よ、吉井さん……。」

「藤村君!！」

「木下副隊長は……アソコでまだ……。」

藤村君の指差した先にはまだ生き残って戦っていた秀吉の姿があった。

「まだ間に合う!！」

藤村君には悪いけど私はまだ戦っている秀吉の下へ疾駆する。

戦場に近づくと全体の残り点数が表示されていた。

Fクラス 木下秀吉 古典 19点

V・S

Bクラス 畑中 二宮 火野 菊池 古典 112点&107点&  
87点&93点

かなりの劣勢、よくこの点数差で此処まで持ったと褒められるべきは秀吉だろう。

でも、もう大丈夫だよ。

私も加勢するから!!

「吉井優希、此処に居るBクラス生徒に古典勝負を挑みます!!」

「優希!？」

「増援か!？」

——試<sup>サモン</sup>獣召喚

私の召喚獣は女子なのに改造学ランに日本刀という装備をした召喚獣だった。

最初聞いた時は学園長の頭を疑ったくらいだ。

だから初見の人が驚くのも無理もなくその場に居た全員啞然としていた。

そういえば秀吉も私の召喚獣は見た事なかったような……。

Fクラス 吉井優希 古典 57点

「なんだ雑魚か。」

「ヤツには構わなくても良い。先ずは木下から潰すぞ。」

むう、私が幾らバカでもこの状況は流石に不愉快に感じるよ。

「さあ、覚悟はいいな？」

「これまでか……！」

気が付けば、いよいよ秀吉の召喚獣がトドメを刺されそうになっていた。

「トドメだ……！」

「させない！！」

相手が振り下ろさんとする剣を日本刀の峰で鍰を狙い相手の剣を打ち上げてガードを開ける。

「其処だあ！！」

そして其処から思いつきり拳を相手に打ち下ろし敵を吹き飛ばした。

「なっ！？」

Bクラス 二宮 古典 99点

相手はまさか私のような格下に此処までされるとは思っ てなかったのか驚愕の表情をしていた。

それでもダメージは少なく相手はまだまだピンピンしている。

「やっぱりダメージは少ないよね……。」

私の点数が低いから悪いんだからこれは自業自得でしかない。

でも、ダメージは少なくともダメージはダメージ。

「秀吉、大丈夫だった？」

「何とかのう……しかし、まさか優希が来るとは思わなかったのう。」

「フフツ。さ、此处からが正念場だよ。手伝ってくれる？」

「……勿論なのじゃ!!」

私と秀吉の召喚獣は再び相手へと疾走していく。

「フン、雑魚が。さっさとくたばっておけよ!!」

相手の召喚獣が此方へと接近してくる。

でも、相手の攻撃が私に――

「喰らえ!!」

当たる事は――

「何っ!？」

ない――

「ほらほら、後ろがから空きだよ。」

ズバツと相手を背後から切り裂き、そこから雨霞と連撃を浴びせか

けて相手を下した。

「お、おい。二宮の方が点数が上なのに何で倒すどころかダメージも与えられてないんだよ!？」

「し、知らねえよ!！」

相手が目の前の事実には動揺している。

今のうちなら……。

「隙あり!！」

『しまった!！」』

やっぱり動揺しているのも相まってか咄嗟の行動が出来ずに一体を倒した。

「ちっ!！」

でも、私の召喚獣じゃ一度に二体を撃破することは先ず不可能。

一体逃してしまった。

「おい、こうなりや合わせて行くぞ!！」

「ああ、もうプライドがどうとか言っただけだねえ!！」

優勢だった状況が一転、劣勢に追い込まれて流石のBクラスの生徒も焦ったのか2人合わせて攻撃してきた。

幾ら私でも2体の召喚獣の攻撃を日本刀一本で捌くには自信ない。

「優希!!」

秀吉から呼ばれてそちらへ視線だけ向けると秀吉の召喚獣が投擲の体勢に入っていた。

「受け取るのじゃ!!」

ヒュッと自分の得物である薙刀を私の召喚獣に向かって投擲する。

「ありがとう!」

それを零す事無く受け取ると日本刀を左手に薙刀を右手に持ち相手の迎撃体勢を取った。

『喰らえ!!』

相手の同時攻撃を薙刀で受け止め払い飛ばす。

「空中なら……。」

「——しまっ!?!」

「よけられないよね!!」

薙刀を相手召喚獣の急所、心臓目掛けて放つ。

「グッ、だがまだ武器で捌けば……!!」

「お、おいバカ！」

相方には気付かれたみたいだけどそんなことに構ってはいられない。  
そのまま特攻していく。

敵の召喚獣は薙刀を捌いた瞬間、影のようにくっ付いた私の召喚獣の日本刀に貫かれた。

「なっ！？」

「まだ終わらないよ！！！」

空中を舞っている薙刀を飛び上がって掴み取るとそのまま相方の召喚獣を両断した。

「そんな……………」

「…………嘘だろ。」

茫然としている彼らに構う事無く召喚獣を畑中君の方へ向かわせる。

「くそっ！」

畑中君の召喚獣は抵抗することなく消滅した。

ふう…………疲れたあ。

「戦死者は補習——！！！！」

『た、助けてくれえ!!』

戦死した畑中君達は鉄人によって補習室へ連行された。

秀吉の召喚獣は既に満身創痍、このまま最前線に置いておくのはあまり好ましくないかな。

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。何とかの。」

「秀吉は回復試験を受けてくるといいよ。今の点数じゃ厳しいと思う。」

「そうじゃの……すまぬがこの場は任せた。」

「うん。」

秀吉は直ぐに回復試験会場へと走り去って行った。

さて、私も前線に戻らないと……須川君1人に重荷を背負わせるわけにはいかないしね。

私は再び前線へ戻る為に来た道を引き返したのだった。

t o b e c o n t i n u d . . . .

**第11問 く対策と自爆とピンチと（後書き）**

自分で書いていてちょっと、短かった感が否めないのですが、今回はこの辺で終わらせてください。

次回の更新がいつになるかは分かりませんがその時はよろしく願います！

ではではっ！

第12問 く優希と想いとBクラス戦終結く（前書き）

鳴神 ソラさん、仮面ライダー さん。

感想ありがとうございます！

投稿が遅くなつてすいません。

それでは第12話どうぞ！

## 第12問 く優希と想いとBクラス戦終結く

問題 以下の問いに答えなさい。

『女性は何（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。』

姫路瑞希の答え

『初潮。』

教師のコメント

正解です。

日之影美琴

『■■■■。』

教師のコメント

あまりにも答えがアレなので表示は控えさせて頂きました。

吉井優希の答え

『明日。』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて始めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するころに初潮を見るものが多い為、

その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される。』

教師のコメント

詳し過ぎです。

バカとお姉と召喚獣

第12問 〽優希と想いとBクラス戦終結〽

〽Yuki side〽

私が前線と引き返すと既に前線は崩壊寸前だった。

須川君もよく頑張ったと思うけど一番の要因はやはり姫路さんにあった。

須川君に事情を聞くと、どうにも姫路さんの様子がおかしいらしい。

それどころか何にも参加しないようにしているようにも見える。

「全軍に伝えて。勝負は極力単数教科で挑んで。補給も念入りに行つて。」

「分かった。」

須川君から指揮権を引き継ぐと同時に今出来る指示を送る。

須川君は漸く肩の荷が降りたらしく先程より表情が和らいでいる。

しかし、状況はたったそれだけの指示で一変するわけではない。

早く左側出口を如何にかしなればあつという間に包囲網が崩れてしまう。

「姫路さん、左側に援護を！」

雄二の作戦では午後に姫路さんが担う重要な役割があるらしいので、そうそう姫路さんに頼るわけにはいかないんだけど、こうなってしまつてはそうも言っていられない。

「あ、そ、そのっ……！」

その肝心な姫路さんが、戦線に加わらず泣きそうな顔をしてオロオロしている。

不味い、突破されちゃう！

「ええいつ！」

掛け声と共に人ごみを掻き分け、左側出口にダッシュする。

そして立会い人をやっている竹中先生の耳元で囁く。

「……ッラ、ズレてますよ。」

「っ!!」

頭を押さえて周囲を見回す竹中先生。

いざと言う時の為の脅迫ネタ　〈古典教師篇〉　をこんなところで使う羽目になるなんて。

これは計算外だ。

「少々席を外します!」

狙い通り少しの間が出来る。

「古典の点数が残ってる人は左側の出入口へ!　消耗した人は補給に回って!」

応急処置だけど、これで少しは持ち直すはずだ。

さて、この間に。

「姫路さん、どうかしたの?」

姫路さんに声をかける。

何だか分からないけど様子がおかしい。

この原因をはっきりさせないことには動きが取れない。

「そ、その、なんでもないですっ。」

ブルブルと大きく首を振る姫路さん。

長い髪がその動きに合わせて左右に広がる。

あまりに大きな動きで、本当は何かあるのが見え見えだ。

「そうは見えないよ。何かあったなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし。」

「ほ、本当に何でもないんです！」

そうは言うけど、泣きそうな顔は相変わらずだ。

絶対におかしい。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうしたの！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

右側までもBクラスの得意とする文系科目に切り替えられるなんて。

結構ピンチだ！

「私が行きますっ！」

そう言って姫路さんが戦線に加わろうと駆け出した。

でも……

「あ……。」

急にその動きを止めて俯いてしまった。

何だろう。

何かを見て動けなくなっただけだ。――。

姫路さんが見ていた方を目で追ってみる。

その先には窓際で腕を組んで此方を見下ろす卑怯者根本君の姿が在った。

根本君がどうかしたのだろうか？

ここからは見えにくいけど、目を凝らして観察する。

特に何も無いようだけど――

「っ……！」

そこで私は見た。

彼が手にしている物を。

何の変哲もない、手に入れようと思えば普通に手に入る様な物だけど、逆に幾らお金を払っても買えないモノでもある。

彼が手にしていた物。

——それは3日前に偶々見てしまった姫路さんが赤い顔をしながら必死に考えて書いていた姫路さんにとって大事な文が綴ってある文章の入った封筒だった。

「——そっか、なるほどね。そういうことか。」

自分でも驚くほど冷え冷えとした声が出てくる。

腸が煮えるような想いとはこういうことを言うのかもしれない。

大体、昨日協定の話聞いた時からおかしいとは思っていたんだ。

あの根本君が、そんな対等な提案をしてくるなんて。

結局あの時点で既に姫路さんを無力化する算段が立っていたってわけね。

それならあの協定だって頷ける。

姫路さんが参加できないのなら、こちらにとって大きな痛手となる。

だから、あの協定はBクラスが圧倒的に有利な条件なのだから。

上手い方法だ。

合理的で失うものもリスクもない。

「姫路さん——。」

「は、はい……?」

「具合が悪そうだからあまり戦線に加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから体調管理には気を付けてもらわないと。」

「……はい。」

「じゃ、私は用が在るから行くね。」

「あ……!」

姫路さんが何か言いたげだったけど、気にせず背を向けて駆け出す。

大事な用が出来たから。

「フツ、面白い事してるじゃない、根本君」

思わずそんな台詞が口から零れる。

——あの野郎、ブチ殺す。

\*\*\*

「雄二っ!」

「うん？ どうした優希。脱走か？ チョキでシバくぞ。」

教室に飛び込むと、雄二はノートに何かを書き込んでいるところだった。

近づいてみるとそれが私達と敵の現在の戦力を記したものだと分かる。

「話があるんだ。」

「……とりあえず聞こうか。」

ちよつと今は雄二のジョークに構っている余裕はない。

雄二もそれを察したのか、真面目な顔で私の方を向いた。

だから私も真面目な顔で向き合う。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ。」

「……お前に何があっただんだ？」

「お姉ちゃん、妹の行く末が急に心配になってきたよ。」

し、しまった！

これだと私はただの変態だ！

っってお姉ちゃんまで……！？

「ああ、いや、その。えーっと……。」

本当は制服の中にしまつてある手紙が欲しいんだけど、そんな事情は話せないし……。

どうしよう。

このままだと、私はあんな屑野郎根本君が好きになつてしまつてその男が着ている制服を欲しがる変態だと思われてしまう。

きつと根掘り葉掘り事情聴取を受ける羽目に――。

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれくらい何とかしてやろう。」

受け入れられた!?

貴様、なんだそのリアクションは!

まるで『お前にそういう趣味があつたとしても不思議は無い。』とでも言わんばかりじゃないか!

お姉ちゃんまで『まあ、優希だしね。お姉ちゃんは何があろうと受け入れるよ。』なんて顔しないで!!

とは言え、詳しい話をするわけにもいかない。

くうう……。

かなり辛いけど、今はその誤解を甘んじて受けよう。

「で、それだけか？」

呆れたように私を見る雄二。

勿論それだけであるわけがない。

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい。」

「理由は？」

「理由は言えない。」

いずれは伝わる事かもしれないけど、私が今口にしていいようなモノでは決してない。

「どうしても外しないとダメなのか？」

「うん。どうしても。」

雄二が顎に手を当てて考え込む。

姫路さん抜きでBクラスを打倒する。

それには大きな作戦変更が伴ってしまう。

それを各部隊に伝え実行するなんて出来るかどうか分からない。

はつきり言って自殺行為だ。

それが原因で負ける可能性は十二分にある。

そして、それは雄二の責任として問われることになる。

「お願い、雄二！」

私は雄二に深く頭を下げた。

身勝手な話だと自分でも思う。

私の頼みで雄二が得る物は何も無く、リスクだけは満載だ。

正直私なら理由も話さないこんな頼みを受けたりはしない。

「……条件を付けてあげたら？」

「条件？」

そんな時にアキ姉に助け舟を出してもらった。

「用は姫路さんが抜けることによって変わる作戦変更における各部隊の混乱をどうにかしたいんでしょ？　だったら優希がやればいい。それなら人が変わっただけで大した作戦変更もない、若干混乱はあるかもしれないけど大幅な作戦変更による混乱よりかはずっとマシなはずよ。」

「……そうだな。そうしよう。優希、姫路がやる予定だった役割をお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させる。」

お姉ちゃんの助け舟もあって雄二は私の願いを承諾してくれた。

私とは器の大きさが違う。

「もちろんやってみせるよ！ 絶対に成功させる！！」

「良い返事だ。」

フツと口の端を上げる雄二。

「おい、黒刀。お前は今すぐ一個小隊を引き連れて前線に向かってくれ。姫路達のフォローを頼むぞ。」

「分かった。」

黒刀に指示を飛ばす雄二。

それに一切の文句も言わず黒刀は小隊を引き連れて教室を出て行った。

「それで、私は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目はなんでもいい。」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ。」

「……難しいことを言ってくれるね。」

これは厄介だ。

今の戦闘はBクラスの前後の扉の二ヶ所で行われており、場所の条件から常に一対一となっている。

これは少しでも時間を稼ぐ為と、雄二の作戦に必要な行動らしい。

そんな中で教室の奥を陣取っている根本君に近づくには圧倒的な火力が必要となる。

そう、例えば姫路さんのような。

私にはそんな火力がない。

「もし、失敗したら?」

「失敗するな。必ず成功させろ。」

いつになく強い口調。

どうやら失敗はそのまま敗北に繋がると見て間違いなさそうだ。

さて、どうする?

どうやって目的を達成する?

「それじゃ、上手くやれよ。」

考え込む私を置いて、雄二が教室を出ようと立ち上がる。

「え？ 何処に行くの？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな。」

Dクラス。

多分室外機の件だろう。

それよりどうしようか。

どうやって姫路さんの代わりを……。

「優希。」

雄二が教室を出て行った後、アキ姉が私に話しかけてくる。

「確かに優希はバカだから姫路さんたちのような火力はない。」

はつきり言っね。

「でもね、秀吉やムツリー二のように、貴女にも秀でてる部分がある。だから雄二<sup>私達</sup>は優希を信頼してる。」

「……アキ姉。」

「うまくやんなさい。それが雄二から絶対の信頼をもらった貴女が今出来る唯一のことだから。」

私の、秀でてる部分……。

狭い場所での戦闘になっている以上、細かい動作なんて役に立たないし。

「……あ。」

優れているってわけじゃないけど、他の人とは違う私だけの唯一がもう1つだけあった。

点数の低い私にできる、数少ない方法が。

後は腹を決めるだけ。

「……痛そうだよねえ。」

想像するだけで身体に痛みが走る。

「フツ、大丈夫よ。お姉ちゃんが付いてるから。安心しなさい。」

私の両方の頬に手を当てるお姉ちゃん。

先ほどまで走っていた痛みは消えて覚悟はすんなり決まった。

「——うん！ 根本君 あの外道に目に物見せてやる！」

拳と手のひらを叩き合わせて自らを鼓舞する。

方法がある。勝算もある。

根性さえあればやれるものとしたら、やらない理由は何処にもない。

後のことなんか知るもんか！！

「アキ姉……。」

「分かつてる。私もそのつもりだったから。武藤君と君島君も、協力して！！」

教室内で補給テストを受けていた2人に声を掛ける。

「何か用か？」

「補給テストがあるんだけど……。」

この2人は既に昨日の戦闘で点数をかなり消耗し、当面は補給テストを受けるのが任務となっている。

「補給テストは中断。その代わり、私とアキ姉に協力して欲しい。この戦争の鍵を握る大切な役割なんだ。」

「……随分とマジな話みたいだな。」

「うん。ここからは冗談抜き。」

「なにをすればいい？」

「うん。それはね——。」

\*\*\*

「2人とも、本当にやるんですか？」

Dクラスに召喚獣勝負の立会人として呼ばれた英語の遠藤先生が私達2人に念を押す。

「はい。勿論です。」

「このバカとは一度み<sup>妹</sup>つちりと話をしなくちゃいけないと常々思っていたので。」

向かい合うのは私とアキ姉。

「でも、それならDクラスでやらなくても良いんじゃないですか？」

先生の言う通り、場所はちょっとお邪魔しているDクラス。

でも、戦うのはFクラス同士。

周りにいるのも全員Fクラス生徒。

遠藤先生からしてみると状況がよく分からないだろう。

「仕方ないんです。このバカは《観察処分者》ですから。オンボロのFクラスで召喚したら、召喚獣の戦いの勢いで教室が崩れちゃうんで。」

「もう一度考え直しては。」

「いえ。やります。お姉ちゃんには日頃の礼をしないと気が済みません。」

再三に渡って考え直すよう説得してくる遠藤先生に、有無を言わせぬ口調で言い切る。

「へえ、言っじゃない。返り討ちにしてあげるから来なさい！」

「それはこっちの台詞だよ!!」

まさに一色触発。

「——分かりました。お互いを知る為に喧嘩をするというのも、教育としては重要かもしれませんね。」

大きく息を吐いてそう告げると、遠藤先生は私達から少しだけ距離を取った。

これで召喚が出来る。

大きく息を吸って、腹の其処から声を出した。

『サモン試獣召喚っ!!』

おなじみの私の召喚獣。

《観察処分者》として雑用をやっていた時はただ面倒なだけだったけど、今はその肩書きに感謝してもいい気がする。

「行けっ！」

応じるように現れたアキ姉の召喚獣目掛けて駆け出すもう1人の私。  
拳と一体となれと言わんばかりに日本刀を強く握りしめさせる。

——行っけええ！

壁を背にした相手に対し、駆ける勢いを乗せて大きく拳を振るった。

ドンッ！

「ぐ——うつ！」

モーションの大きなその動作は、相手にいとも容易くかわされてしまった。

そして、壁を殴りつけた召喚獣の拳の痛みが私にフィードバックする。

「——んのおっ！」

更に力を籠めた一撃を召喚獣が放つ。

横っ飛びにかわされ、こちらの拳はまたも壁を打つ羽目になった。

「つう……っ！」

再び痛みが拳に響く。

教室を揺るがすほどの力を籠めた一撃だ。

その反動も半端じゃない。

脳天から爪先にかけて走る激痛に吐き気がした。

「ほらほらっ！　がら空きだよ！！」

アキ姉の容赦のない銃弾が私に放たれる。

咄嗟に横っ飛びをして銃弾をかわす。

ダン！ダン！ダンッ！！

的を失った弾丸はそのまま壁へと着弾し壁に傷を付ける。

更にアキ姉は私に目掛けて弾丸を放ち続ける。

それは人一人が通れるような扉の形に添って打ち込まれていく。

「優希、そろそろ……。」

アキ姉が壁にかけてある時計を見上げて告げる。

現在時刻は午後2時57分。

作戦開始まであと3分。

『お前等いい加減諦めよるな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての。』

遠くからBクラス代表の根本君の声が聞こえてきた。

『どうした？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

対するは聞き慣れた雄二の声。

姫路さんが戦闘に参加できない分、雄二率いる本隊まで出勤せざるを得なくなったのだろう。

「らあっ！」

召喚獣を動かす。

大振りの攻撃は当たらない。

学習能力がないかのように壁に叩きつけられた拳。

先の痛みも抜けない内に新しい痛みが訪れる。

『はア？ ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな。』

『そうか？ 頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『……お前等相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ。』

『けっ！　口だけは達者だな。負け組代表さんよお。』

『負け組？　それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな。』

「はぁあっ！」

四度目の攻撃。

拳の先が温かい。

見てみると結構な量の出血があり、教室の床に血溜まりが出来ていた。

『……さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？』

『さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

『けっ。言ってるどうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

『……態勢を立て直す！　一旦下がるぞ！』

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

「優希、そろそろよ。」

「うん。分かってる。」

周りに集まっている皆にも目配せをする。

皆は黙って頷いてくれた。

「吉井さん達。2人とも何をしようとしているのですか？」

状況の分からない遠藤先生が私達を交互に見る。

私達の偽りの勝負を怪しんで召喚獣を戻される前に決着をつける必要がある。

「フウ——。」

精神を集中させ研ぎ澄ませる為に息をゆっくりと吐き出す。

この五度目で決める。

この先はない！

『だから雄二は優希を信頼してる。』  
私達

敵の本隊を引き付けた雄二が、壁の向こうからよく通る声でそう告げてきた。

午後三時ジャスト。

作戦開始だ。

「スウ——ハアア。」

再び目を閉じて集中させる。

大丈夫……ヤレる。

「破アアアアッ！！」

極限まで研ぎ澄ませた精神を召喚獣に伝える。

そうして目にも留まらぬ速さで日本刀に振り抜こうとする。

持てる全ての力を注ぎ込んで、壁を切り裂こうとする。

ハナから狙いはこのBクラスにつながる壁。

アキ姉との勝負は壁を破壊させる召喚獣を呼び出す為の方便に過ぎない。

「——ぐううっっ！」

全身、特に手に走る痛みに神経が軋む。

けど、こんな事ができるのは私しかできない。

痛みが返る代わりに、物理干渉能力を持つ私の召喚獣だけしか。

ズパアアアアッ！！！！

豪快な音を立て、Bクラスに繋がる道が生まれた。

「ンなっ！？」

崩れた壁の向こうにある、驚いて引き攣った根本君の顔。

向こうの戦力の殆どは雄二率いる本隊を追って教室から出ている。

またとない好機。

敵の主戦力は出払い、代表の根本君に勝負を挑むために駆け寄った。

「くたばれ、根本恭二いーっ！」

私達は呆気にとられている根本君に勝負を挑む為に駆け寄った。

「遠藤先生！ Fクラス武藤が——」

「Bクラス山本が受けます！ 試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

「くっ！ 近衛部隊！」

まだ教室に残っていた根本君の近衛部隊が行く手を塞ぐ。

私達と根本君との距離は20 m程度。

広い教室の所為で随分と距離がある。

「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな！ お前らの奇襲は失敗だ！」

取り繕うように私達を笑う根本恭二。

しかし――

「――Fクラス吉井がBクラス近衛部隊全員に挑みます。試獣召喚<sup>サモン</sup>」

私達にはまだ、無双の戦乙女<sup>ヴァルキュリア</sup>が付いていた。

「ハッ、たった一人で何が出来ると……。」

ダダダダダダンッ！！！！

息もつかせぬ集中砲火が浴びせかけられる。

銃弾に当たれば当たるほど敵の点数<sup>体力</sup>が減っていく。

「そこッ！！」

銃形態を両刃剣へと移行し、敵のど真ん中へ斬り込む。

その斬撃と剣圧で近衛部隊の大多数が吹き飛び、人の壁のど真ん中に道が出来る。

「優希っ！！」

「――行っけええっ！！」

全ての力を振り絞って召喚獣を特攻させる。

「Fクラス吉井がBクラス代表根本恭二に挑みます！！」

「ちいっ！<sup>サモン</sup> 試獣召喚！」

根本君の召喚獣が現れる。

でも、反応が少し遅い！！

出現箇所へ狙いを定め日本刀を投げつける。

出現したばかりの召喚獣にまともな反応などできるはずもなく日本刀は根本君の召喚獣に直撃する。

防御も出来ずともに受けた根本君の召喚獣の点数は激減する。

Fクラス 吉井優希 数学 52点

V・S

Bクラス 根本恭二 数学 120点

「フンッ、まだ点数差はあるんだよ！！」

根本君の召喚獣による攻撃が繰り出される。

でも、そんなノロマな攻撃当たらないっ！！

素早い動きで根本君の召喚獣に近づき刺さったままの日本刀を引っ掴むとそのまま勢いよく引き抜く。

流石に引き抜かれたのもダメージとなるらしく動きが一瞬でも止まる。

その一瞬でも在れば私には充分！



第12問 く優希と想いとBクラス戦終結く（後書き）

はいっ！

というわけで第12話でした。

今回は優希視点で物語りを進めていきましたがどうでしょうか？

え？ ムツツリー二の出演？

今回は優希に活躍させたかったので。

彼にはAクラスでの見せ場があるので……。

というわけで第12話でした！

大事なことなので2回言いましたよ？（笑）

ではではっ！！

第13問 く思惑と戦後対談と決戦へく（前書き）

感想を下さった方、ありがとうございます。

はい、というわけで第13問です。

今回はAクラス戦に入ります。

と言っても一戦だけです……。

それでは、どうぞ……！！

### 第13問 〈思惑と戦後対談と決戦へ〉

問題 以下の問いに答えなさい。

『1853年。黒船来航というアメリカ海軍所属の東インド艦隊艦船が日本に來航する事件がありました。この船の提督のフルネームを書きなさい。』

姫路瑞希の答え

『マシュー・カルブレイス・ペリー。』

教師のコメント

正解です。

姫路さんにとっては簡単でしたね。

土屋康太

『ましゅー・かるぶれいす・ペリー。』

坂本雄二

『ましゅー・かるぶれいす・ペリー。』

教師のコメント

平仮名で書くのは止めてください。  
次ぎやった場合は不正解にします。

日之影黒刀

『マッカーサー元帥。』

日之影美琴

『ダグラス・マッカーサー。』

教師のコメント

時代を考えて答えてください。

吉井優希の答え

『ユア・ペリー。』

教師のコメント

私ではありません。

バカとお姉と召喚獣

第13問 〽思惑と戦後対談と決戦へ〽

「優希、随分と思い切った行動に出たのう。」

終戦後、Bクラスにやってきた秀吉に、優希はまず最初にそんな事を言われていた。

「うう……。痛いよう、痛いよう……。」

とにかく今は手が痛いらしい。

まあ、100%全てが返るわけじゃないとは言え、鉄筋コンクリートの壁を切り裂いたんだから、手が裂けるような痛みは半端じゃないはず。

「なんとも……お主らしい作戦じゃったな。」

「で、でしょ？ もっと褒めてもいいと思うよ？」

「後の事を何も考えず、自分の立場を追い詰める、素晴らしい作戦じゃな。」

秀吉、絶対褒めてないよね？

「……遠まわしに馬鹿って言ってない？」

流石にそれは分かるんだね。

でも、秀吉の言う事も尤もだ。

学校の壁を破壊するなんて、どんな理由があろうとも問題にならないわけがない。

初犯でなければ留年、悪ければ退学処分を喰らっても文句は言えない。

「ま、それが優希の強みだからな。」

雄二がパンパンと優希の肩を叩いている。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……………」

床に座り込んでいる根本君。

さっきまでの強気が嘘のように大人しい。

「さて、本来なら「待つて。」……秋？」

悪いけど、此処から先は私に仕切らせてもらうよ雄二。

「根本君……まさかとは思うけど“あの時の約束”忘れたとは言わせないよ？」

「……………っ！」

あの時の約束をワザとらしく強調すると少しの反応を見せる。

「おい、“あの時の約束”って何を約束したんだ。」

雄二が訝しげな表情で私に問いかけてくる。

「あの時って言うのは私がこの戦争の使者を任されて宣戦布告に行った時だよ。その時、根本君とある約束をした。」

「約束？ 一体どんな…………？」

「もし“優希が根本君に一騎打ちで勝つ事ができたなら如何なる理由があるうともこちらの条件を1つ呑む且つ、この教室の設備をFクラスと入れ替える”そういう約束だよ。」

「じゃあ、もし私達が負けたらどうなっていたんですか？」

姫路さんが若干不安そうな表情をしている。

他の面々も少しだけ顔を顰めていた。

「もし私達が負けたのなら。パシリにでも奴隷にでもなってあげる。そう約束したの。」

「なっ、もし負けたら……！」

「秀吉、“もし”なんてないんだ。あるのは“事実”それだけ。」

それにね——と言葉を続ける。

「私は信じてたよ？ 私達 このクラスが負ける筈なんてないって。皆は負けるって思ってたの？」

そう問いかけると皆は首を横に振った。

誰一人としてBクラスに負ける気はない。

「だからどんな条件であろうとも諦めない心を持った奴が他者を見下し、人を奴隷のようにしか思えない屑なんかに負けるはずないんだ。断じてね。」

だからこそ、危険とも思えるリスクを犯してもこの約束を取り付けたのだ。

「さて、勿論答えはYes……そうよね根本君？」

「ああ……分かった。」

「じゃ、後は雄二。よろしく。」

「あ、ああ……分かった。根本、お前にはこれを着てAクラスに“試召戦争の準備が出来ている”と宣言して来い。」

「なっ！ 幾らなんでもそれはっ！！」

「ふうーん、約束……破っちゃうんだ？」

「グッ……分かった。言う事を聞こう。」

不承不承としながらも言う事を聞いてくれる根本君。

「なあ、秋。」

「何、黒刀？」

流石に素直すぎるほど従順な根本君に疑問を覚えたんだろう、黒刀が私に話しかけてきた。

「お前、アイツに何を言ったんだ？」

「約束を反故にした場合、彼の彼女さん……小山さんに浮気してる

ってバラす。そう言ったただだよ。」

勿論、証拠写真はムツツリ商会から手に入れたんだけどね。

ふと、視線を向けると優希が根本君の脱がされた制服から一通の封筒を取り出していた。

——なるほど、アレの為にあんな事言っただ。

そのまま優希は姫路さんの鞆に封筒をそつと戻していた。

「フフツ、やる時はやるんだね。あの娘も……。」

そろそろ私も…… “ケリ” つけなきゃね。

その後、根本君の女装を完成させたF・B両クラス生徒に見送られてAクラスへ根本君を送り出した後、Fクラスは帰宅を迎えることになった。

ただ——。

「さて、どうしてあんな約束したのかさっさと吐いてもらおうか？」

私は雄二に尋問される事になったんだけどね。

「正直に答えると今ここで設備の交換をしないと後々の事が厄介だからだよ。」

「後々の事？」

「そう、Fクラスの設備は最低だよ。あんな所、とても勉強の出来る環境じゃない。」

「……それで？」

「そんな所に優子達を送り込みたくないよ。私は……。」

「……………」

流石に雄二も押し黙る。

あんな劣悪な環境に幼馴染を送りたくないのは雄二も同じだったらしい。

「ここで設備を交換しておけば例えば私達が負けたとしても設備はCクラス並の設備になるから少なくともFクラスの設備に以下になるわけじゃない。それに勝ってもAクラスの面々は1つ設備を落とされるだけで済むから優子達もあんな所に送らなくても済む。」

ふう——と此処で一息おく。

何でも一変に話すものではない。

「それに、Aクラスに一騎打ちを挑むんならクラスのモチベーションは関係なくなるよ。」

「クラスのやつ等が戦争をやる事に反対してくるかもしれないぞ？」

「確かにそうかもしれない。でも、今の皆を見たらそうは思えないよ?。」

雄二は首を傾げる。

そっか、雄二は聞いてないんだ。

「皆、もしかしたらAクラスも倒せるかも。とか、このまま勝つて来たんだからAクラスにも勝っちまおうぜとか言う声が多く聞こえたんだよ。だからね、雄二の心配は大丈夫。」

「そうか——。」

雄二は何処か誇らしげな顔をしながら教室を後にすべく扉に手をかける。

「——良かった。」

そう呟いて雄二はFクラスを後にした。

その表情が嬉しそうに笑っていたのを私は見逃さなかった。

「——。」

私も……変わらなきゃね——。

\*\*\*

そして点数補給のテストを終えた二日後の朝。

いよいよAクラス戦を残すのみとなった私達は今朝設備交換の為に移動したBクラスの教室で最後の作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらず此処まで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している。」

壇上の雄二がいつも一緒に居る者たちでも覚えの無い程、素直に礼を言った。

「ゆ、雄二、どうしたの？ らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。」  
そんな事を言われると、何だか私まで胸が一杯になってくる。

良く此処まで来れたな、って。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

最後の勝負を前に、皆の気持ちが1つになっている。

そんな気がした。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと思っている。」

既に分かっていた事だったので私は驚かなかったけど、クラスの皆はかなり驚いたようで、教室中にざわめきが広がった。

『どういうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する。」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ。」

Aクラス代表の霧島翔子さんとFクラス代表の坂本雄二。

クラス間の戦争を代理で行うのだから、代表同士の一騎打ちは当然といえば当然だろう。

そこまでは知っている。

でも、雄二がどうやって勝とうとしているのかは分からない。

相手はあの霧島さんだ。

学年主席であり、Bクラスを圧倒した姫路さんでさえ、点数でかなりの差をつけられている。

こう言っちゃ悪いけど――

「バカの雄二が勝てるわけなあつ!？」

私より先に口に出ていた優希の頬をカッターが掠める。

危なかったあ……。

「次は耳だ。」

優希は本気で怯えた顔をしていた。

「まあ、優希の言う通り確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない。」

そこで認めるなら優希にカッターを投げつけなくても良かったと思うけど？

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった。」

けど、私達は今こうして勝ち進んできている。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスの設備を手に入れる。俺達の勝ち揺るがない。」

最初は勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いてきた雄二の言葉だ。

無理な話に思えても、否定する人間はもうこのクラスにはいない。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる。」

『おおーっ！！』

皆の意思を確認する必要は無さそうだ。

全員が雄二を信じている。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ。」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。」

日本史？

別に霧島さんが日本史を不得手としているとも、雄二が得意としているとも聞いた事がないけど、どうして日本史が？

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする。」

小学生程度のレベルで満点あり？

その条件だと、満点が前提となつて、ミスをした方が負けるといった注意力勝負になるだろう。

正面きつてやりあうよりは勝ち目があるかもしれない。

「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも引き上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに秋の言う通りじゃ。」

勝ち目が少しはあるかもしれないけど、それにしだって分の悪い賭けだ。

この程度の作戦が雄二の切り札なんだろうか？

「おいおい、あまり俺の舐めるなよ？ 幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか。」

「?? それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう。」

そりゃそうか。

先生の監視がある中での妨害程度で、あの霧島さんが揺るぐとは思えない。

けど、だとしたらどうやって勝つと言っただろうか？

「雄二。あまりもったいぶるな。そろそろタネを明かしても良いだろう?」

クラスの皆も黒刀の言葉に頷いていた。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった。」

かぶりを振って、雄二は改めて口を開いた。

「俺がこのやり方を採った理由は1つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違っていると知っているからだ。」

ある問題ねえ？

なんだろう。

「その問題は——『大化の改新』」

「大化の改新? 誰が何をしたのか説明しろ、とか? そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな?」

お受験校ならば出てくるかもしれないね。

そんな問題が用意されているとは思えないけど。

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ。」

「単純と言うと——何年に起きた、とかですか？」

「おつ。ビンゴだ楓。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ。」

大化の改新の年号だって？

そんな基礎的な問題を、あの霧島さんが本当に間違えるのかな？

恐らく、優希だって答えられるだろう。

「大化の改新が起きたのは645年。こんな簡単な問題は優希ですら間違えない。」

何でだろう……優希があからさまに目を逸らしてる。

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてAクラスの設備を手に入れるって寸法だ。」

それにしても、さつきから気になっていたけど——

「あの、坂本君。」

「ん？ 何だ姫路。」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

そう。

雄二は霧島さんを『アイツ』とか『翔子』とか呼んでいた。

顔見知りでなければそんな呼び方はしない。

「ああ。アイツは幼馴染だ。」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？ 何故優希の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、さっきのカッターの礼だよ！ Aクラスの前にキサマを殺す！」

まだ根に持ってたんだね、優希。

男子生徒の意見は聞かずとも分かる。

クラスの団結って素晴らしいね。

「遺言はそれだけ？ …… 待つて須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ。」

「了解です女神。」

何故かクラスの男子生徒を率いている優希に私は近づく。

「ねえ、優希。」

「ん？ なに、アキ姉。」

ポカンとしている優希の腕を掴む。

「ほいつ。」

「なしてえええええつ！？」

そのまま一本背負いで優希を教室の壁まで投げ飛ばす。

受身も取れずにしこたま背中を打ち付ける。

「全く、小さい事でそんなに根に持たないの。分かった？」

「ゲホッ、ゴホッ！ う、うん。分かった……。」

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ。」

未だ、男子生徒の大半は納得の言って無さそうな顔だが霧島さんには“あの”噂があるから皆不承不承と雄二にカッターを向けるのを諦めている。

「アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる。」

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は――  
――」

『システムデスクだ!』

\*\*\*

「一騎打ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む。」

恒例の宣戦布告。

今回は代表である雄二を筆頭に私、優希、姫路さん、秀吉にムツリーニとその他首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

……どうして毎回こうしないのだろうか?

少なくともそうしてくれたら優希はあんなにスタボロに成らずとも済んだような気がするんだけど。

「うーん、何が狙いなの?」

現在雄二と交渉のテーブルについているのは秀吉と楓の三つ子の姉で私の幼馴染である木下優子。

一卵性でないのにも関わらず秀吉達にそっくりだ。

いや、彼女に秀吉達がそっくりなのか。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ。」

優子が訝しむのも無理はない。

下位クラスに位置する私達<sup>Fクラス</sup>が、一騎打ちで学年トップの霧島さんに挑むこと自体が既に不自然なのだから。

当然何か裏があると考えるだろう。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな。」

「賢明だな。」

雄二にとっては予想通りの返事。

此処からが交渉の本番だ。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

雄二が腕を組み、顎に手を当てながら訊く。

「時間は取られたけど、それだけだったよ？ 何の問題もなし。」

秀吉の挑発に乗り、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。

その勝負はたったの半日で決着がつき、今CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けている。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来ていた“あの”……？」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていらないようだが、さてさて。どうなることやら。」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだね？」

試召戦争の決まりの1つ、準備期間。

戦争に敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことはできない。

これは負けたクラスがすぐさま再戦を申し込んで、試召戦争が泥沼化しない為の取り決めだ。

「知っているだろ？ 実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規約には何の問題もない。…… BクラスだけじゃなくてDクラスもな。」

本来ならば設備を入れ替えた時点でBクラスは優子の言う通り、宣戦布告は行えない。

しかし、それは私と彼がした約束…… 『如何なる状態であろうと設

備の交換を行う。』というのはあくまで和平交渉の1つなのだ。

それもこちらは相当の不利な条件、つまり觀察処分者がクラス代表を倒すという条件付なのだからこれぐらいの無理は通る。

「……それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ。」

何だかこれではこちらが悪役にしか見えない。

「うーん……わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ。」

「え？ 本当？」

意外とあっさりとした返事に驚き、会話にあまり参加のしなかった優希が声を上げてしまう。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……。」

ああ。

そう言えば根本君は女子の制服で話をしに来たんだっけ。

そのおかげで提案が通るなんて。

これは思わぬ収穫かもしれない。

「でも、こちらからも提案代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い7人ずつ選んで、一騎打ち7回で4回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ。」

「う……。」

無邪気に笑う優子。

恐らく、この展開を読んでいたのだろうその余裕に一切の崩れはない。

「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし。」

まるで姫路さんが軽んじられているような発言だけど、優子の発言は決定的外れではない。

それほど霧島学年主席さんは甘くはないのだ。

「安心してくれ。うちから俺が出る。」

雄二はそうは言うもののそれを鵜呑みにするほど、優子はバカではない。

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ。」

これは競争じゃなくて戦争だからね、と付け足す。

「そうか。それなら、その条件を吞んでも良い。」

と、雄二の耳を疑うような返事。

「ホント？ 嬉しいな。」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせてもらう。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ。」

ああ、そうやって交渉を進める気だったんだ。

でもね、それを鵜呑みにするのはちょっと難しいと思うよ？

「優子、じゃあ7回の内、4回此方に科目選択権を頂戴。後の3回はそっちの自由にしていいから。」

「うーん……まあそれならいいかな。」

「おい、秋……。」

「雄二、これ以上の要求は流石に通らないよ。コツチも随分無理を言ってるんだからこれぐらいは譲歩しないと……ね？ Aクラス代表霧島さん？」

私の視線の先にはいつから居たのか霧島さんがいた。

「だ、代表……。」

「……そっちの提案を受けても良い。」

静かな、でも凜とした声。

物静かな人だと優希から聞いていたけど、知覚に来るまで全く気配を感じなかった。

「いいの？」

「……良い。これ以上は平行線だと思うから。それと、私から1つだけ条件がある。」

「条件？」

「……うん。」

頷いて、霧島さんは雄二を見た後に姫路さん、美琴、楓を値踏みするかのようじつくりと観察した。

そして、顔を雄二に向けて言い放つ。

「……負けたほうはなんでも1つ言うことを聞く。」

霧島さんの思惑は分からないけど、とりあえず優希……顔を赤くさせるようなことではないのは確かだとは思っよ？

「分かった。交渉成立だな。」

「ちょ、雄二！ 何を勝手に！ まだ姫路さん達が了承してムゲツ！？」

「アンタは何を勘違いしてるのか知らないけど、そう言うのじゃない

いから。落ち着きなさい。」

優希の口元を抑えて黙らせると諦めたのか静かになった。

「そうだ優希。それに姫路たちに迷惑は絶対にかけない。」

自信満々の台詞。

そこまで勝利を確信しているってことなんだろう。

「……勝負はいつ？」

「そうだな。10時からでいいか？」

「……分かった。」

独特の雰囲気を持つてるよね霧島さんって。

話し方だけならムツツリー二に似ていなくもないし。

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ。」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね。」

交渉を終了し、Aクラスをあとにする。

私達の試召戦争の終結は、すぐそこまで迫っていた。

\*\*\*

「では、両名準備は良いですか？」

今日はここ数日の戦争で何度もお世話になっている、Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。

「ああ。」

「……問題ない。」

一騎打ちの会場はAクラス。

コッチの方が広いし、腐った畳のFクラスは締まらないしね。

「それでは1人目の方、どうぞ。」

「アタシから行くよつ。」

向こうは秀吉の姉、優子。

対する此方は――

「ワシがやるつ。」

その弟、秀吉だ。

「ところでさ、秀吉。」

「なんじゃ？ 姉上。」

「Ｃクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

ああ、マズイ……。

優子の表情は笑顔だ。

10人中、10人がきつと綺麗だとか答えるんだろう。

目が笑っていないけど……。

それどころか般若すら見える。

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

2人で廊下へ出て行ってしまった。

『姉上、勝負は——どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Ｃクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシがＣクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――  
――あ、姉上っ！　ちがつ……！　その関節はそっちには曲がら  
なっ……！』

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻ってくる。

「秀吉は急用が出来たから帰るってさっ。代わりの人を出してくれ  
る？」

にこやかに笑いかけながらハンカチで返り血を拭う優子。

あの美琴ですらひいている……。

「わ、私が行きます。」

手を挙げて進み出たのは優子・秀吉の妹楓。

「そうですか。それでは木下さん準備を。」

高橋先生がノートパソコンで操作すると壁一面のディスプレイに結  
果が表示された。

『Aクラス　木下優子　生命活動　WIN

V・S

Fクラス　木下秀吉　生命活動　DEAD』

『Aクラス　木下優子

V・S

Fクラス 木下 楓

まだ生きてます、とは突っ込めなかった。

「いいのね？ 楓。」

「うん。お姉ちゃん。」

「科目は楓が決めて良いよ。」

「じゃあ、現代文をお願いします。」

「承認します。」

『<sup>サモン</sup>試獣召喚っ！』

Aクラス 木下優子 現代文 374点

V・S

Fクラス 木下 楓 現代文 348点

「楓、凄い。」

『おい、マジかよ。なんであんな点数取れる奴がFクラスに居るんだよ。』

『ありえねえ、木下さんに迫っているだろ？』

楓は文系科目、こと現代文に関してはAクラス上位に匹敵する。

それを知っているからこそ優子の驚きも少ない。

「でも、正直ここまで迫られてるなんてね。調子が悪かったとは言え驚いたわ。」

「それはコッチの台詞だよ。私も調子が悪かったし。」

「みたいだね。」

あの点数で調子が悪いと言う2人に回りは啞然とする。

調子がよかつたらどれほどの点数が取れたのだろうか。

「じゃあ、行くよっ!」

「ええ!」

2人の召喚獣が駆け出す。

点数はほぼ互角、よってその速度・力、全てのポテンシャルに大した違いはない。

この勝負、操作技術が巧い方が勝つ。

「はあっ!」

大剣と青龍偃月刀がぶつかり合う。

両者鏖迫り合いとなり、互いに一步も退かない。

「……………」

「……………」

互いの力は拮抗しており、これでは勝負は見えない。

優子は自らの得物に力を入れて相手の得物に当て、相手がよろめく隙に距離を離す。

そこから一気に大剣を振りぬく為に剣を自らの身体に隠すように、刀身が地面と並行となるように構える。

「クッ……………」

先ほどの一撃がよほど重かったのか体勢が崩れている状態では満足な迎撃はできない。

優子の一撃を青龍偃月刀で辛うじて防御したが大剣の凄まじく重い一撃に耐えられるはずもなく召喚獣は得物ごと吹き飛ばされる。

何とか空中で体勢を入れ替えて着地する。

眼前に迫ろうとしている優子の召喚獣を今度は圧倒的リーチで楓は迎撃する。

青龍偃月刀の突きは優子の召喚獣の頬を掠めるが彼女の召喚獣は止まる事無く楓の召喚獣に接近し再び楓の召喚獣を薙ぎ払う。

優子の召喚獣は重い一撃で相手を圧殺するのに対し、楓は圧倒的リーチを以って敵の間合いに入らず圧倒する戦い方。

楓が勝つためには如何に優子の召喚獣を彼女の間合いに入らせず自分の間合いで戦えるかに左右される。

逆に優子が勝つためにはあらゆる策を以って自分の間合いに入り、楓に一撃必殺を決められるか。

互いに一進一退の攻防を繰り返すうちに勝負は大詰めに入った。

Aクラス 木下優子 現代文 21点

V・S

Fクラス 木下 楓 現代文 17点

「次の一撃で決まるな。」

「楓が速いか、優子の力が勝るか。」

手に汗握るとはまさにこのことなのだろう。

先ほどから私の手には汗が滲み出ているのだから。

『……………。』

緊迫した空気の中、楓と優子の召喚獣がにらみ合う。

相手の出方を伺っているのだろう。

そうして何秒かにらみ合うと互いが同時に駆け出した。

『ハアアアアッ!!!』

交錯――

「どっちが勝った？」

そんな誰が発したかも分からない言葉が教室に響く。

優子の召喚獣は大剣を上段から振りぬき、楓の青龍偃月刀は横薙ぎに振り抜かれているまま制止している。

そして、ディスプレイに結果が表示された。

Aクラス 木下優子 現代文 1点

V・S

Fクラス 木下 楓 現代文 0点

「勝者、Aクラス！」

高橋先生の言葉と共に青龍偃月刀が半ばから2つに折れて消えていく楓の召喚獣が見えた。

「ゴメンなさい。負けてしまいました。」

「いや、いい勝負だった。」

雄二の言葉通り、楓にはA・F両者から惜しみのない拍手が送られていた。

まだ、Aクラス戦は始まったばかり――

to be continued . . .

第13問 く思惑と戦後対談と決戦へく（後書き）

どうだったでしょうか？

戦闘シーン短いですね、はい。

すいませんホント。

こういったのあんまり得意じゃなくて……。

誤字脱字報告も受け付けておりますのでよろしくお願いします。

それでは次回、お会いしましょう。

ではではっ！

**第14問 く 試召戦争、決着く（前書き）**

今回は短いです。

感想をくださった方、ありがとうございます。

それでは、どうぞ！

## 第14問　く　試召戦争、決着く

バカとお姉と召喚獣

第14問く　試召戦争、決着く

「では、次の方どうぞ。」

「僕が出ます。」

木下姉妹の対決の後、Aクラスから出てきたのは久保利光。

学年次席の学力を誇る実質2年のNo.2。

「私が出ますっ!」

Fクラスからは姫路さんが出る。

今のFクラスにもAクラスとともに戦える人材はいるが一点突出した学力しか持っていない人が多い。

唯一、姫路さんがどの科目もこなせるオールラウンダーなのだ。

学年次席が出てきたという事は弱点がある場合、そこを突かれる可能性が高い。

故に、どこの科目も隙のない姫路さんは適任と言える。

「科目はどうしますか？」

高橋先生が2人に声をかける。

「総合科目でお願いします。」

「姫路さん。よろしいですか？」

「構いません。」

「それでは……。」

高橋先生が前と同じように操作を行う。

それぞれの召喚獣が呼び出されて——瞬で決着がついた。

Aクラス 久保利光 総合科目 3997点

V・S

Fクラス 姫路瑞希 総合科目 4409点

『マ、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ………！』

至る所から驚きの声上がる。

点数差400オーバー！。

この圧倒的なまでの差を埋めるのは正直久保君では厳しいと言わざるを得ない。

「ぐっ………！ 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ………」

久保君が悔しそうに姫路さんに尋ねる。

つい最近までは拮抗していた実力がいつの間にか此処まで離されたんだから、気になるのも当然と言える。

「……私、このクラスが好きなんです。人の為に一生懸命な皆の居る、Fクラスが。」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです。」

姫路さんの決意に満ちた言葉。

Fクラスが好き――

そう言われるととても温かい気持ちになってくる。

「これで、一対一です。」

今の対決でイーブン。

第三戦目でどちらに軍配が上がるのか。

「それでは次の方、準備をしてください。」

「じゃ、私が行くわ。」

Fクラスからは美琴が出る。

対してAクラスは……

「私が出ます。」

佐藤美穂さんが出る。

彼女もこのAクラス内で上位の成績を誇る。

N O・5くらいだろうか？

「科目は何しますか？」

「古典で。」

美琴がそう言うと再び高橋先生が操作を行う。

『サモン  
試獣召喚！！』

それぞれの召喚獣が現れディスプレイに再び視線が向けられる。

Aクラス 佐藤美穂 古典378点

V・S

Fクラス 日之影美琴 古典421点

「400点台……。」

「私、英語以外の文系全般は得意なんだよね。」

美琴の得意科目は楓とほぼ一緒。

英語だけが文系で唯一出来ないんだよね。

この勝負も姫路さんたちみたく一瞬ではなかったが美琴の快勝で終了した。

理由は単純、美琴の武器は銃。

対して佐藤さんは近接武器、大鎌。

佐藤さんは美琴の弾幕に晒され続け、間合いに入る事も出来ないまま勝負は終了した。

「二対一ですか……。」

此処で漸く高橋先生に変化が見られる。

思ったより押されているのだろう。

Fクラス相手に此処まで手こずるとは思っていなかったようだ。

「じゃ、次は俺かな。」

次は美琴の弟・黒刀。

黒刀もAクラス並の実力を誇るが姉と同じく英語と物理が苦手。

多分、向こうも科目選択権を活かしてくるはず。

「お前の相手は俺だ。」

相手は……………誰だっけ？

覚えてないや。

「俺は菅原賢治だ。よろしく頼む。」

——菅原君と言っらしい。

なんと言うか、体格の良い正に体育会系の身体をしている。

「科目はどうしますか？」

「勿論、英語で。」

「グッ……………」

やはり英語をついてきた。  
弱気

……体育会系の身体なのに英語できるんだ……。

『サモン  
試獣召喚！』

2人の召喚獣が姿を現す。

Aクラス 菅原賢治 英語 388点

V・S

Fクラス 日之影黒刀 英語 241点

241点でもFクラスにしては高い方だ。

でも、Aクラス視点から見るとこの点数は低すぎる。

「だがよ、そうそう簡単には負けられないんだよっ！」

召喚獣を機敏に動かし、敵の攻撃を避ける。

黒刀にとって救いだっただのは敵が遠距離攻撃者ではなかったことか。

黒刀の武装は腕輪を使う事で真価を発揮する。

腕輪使う事のできない今はかなりの戦力ダウン状態にある。

そんな中途半端な状態で遠距離から狙い打たれたらどうしようもない。

むしろ近接戦闘の方がありがたいのだ。

「ハアアッ！」

菅原君の召喚獣はボクシングの選手のような格好をしていた。

その両腕から放たれる高速のジャブは徐々に黒刀を追い詰めている。

結果、黒刀はじわりじわりと点数を削られて負けた。

よって結果は二対二。

再びイーブンになった。

次が正念場になる。

「ムツツリーニ。行けるか？」

「……任せろ。」

今まで座っていたムツツリーニがスックと立ち上がる。

科目選択権が此处で生きて来る。

なぜならムツツリーニは総合科目の点数の内、実に80%を保健体育で獲得する猛者。

その単発勝負なら霧島さんでさえも凌駕する。

「じゃ、ボクが行こうかな。」

工藤愛子。

彼女の事は私もあまり良くは知らない。

姫路さんの一件で知り合ったけど、彼女の情報はこれと言ってない。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね。」

なるほど、それなら納得だ。

「教科は何にしますか？」

高橋先生がムツツリー二に尋ねる。

「……………保健体育。」

ムツツリー二唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子がムツツリー二に話しかける。

何だろう、嫌な予感が…………。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ ……キミとは違って、実技で、ね。」

嫌な予感は見事に的中してムツツリー二は鼻血を噴出する。

「グッ…………舐めるな工藤愛子。」

とは言うものの、あまりに格好が付かなさ過ぎる。

「そろそろ召喚を開始して下さい。」

「はい。試獣<sup>サモン</sup>召喚っと。」

「……………試獣<sup>サモン</sup>召喚」

二人に似た召喚獣が、それぞれの得物を持って出現する。

ムツツリーニは小太刀の二刀流。

一方愛子は――

「なんだあの巨大な斧は！？」

見るからに破壊力抜群の巨大な斧。

オマケに例の腕輪までしている。

かなり強い……。

「実戦派と理論派、どっちが強いか見せて上げるよ。」

愛子が艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。

巨大な斧に雷光を纏わせ、ありえないスピードでムツツリーニの召喚獣に詰め寄る。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニ君。」

そして、豪腕で斧を振るう。

普通の召喚獣で避けられるような攻撃じゃない。

斧が召喚獣を両断する――

「……………加速。」

と誰もが思った直後、ムツツリーニの腕輪が輝き、彼の召喚獣の姿がブレた。

「……………え？」

相手の戸惑う顔。

いつの間にかムツツリーニの召喚獣は相手の射程外にいた。

「……………加速、終了。」

ボソリと、ムツツリーニが呟く。

一呼吸置いて、愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

Aクラス 工藤愛子 保健体育 446点

V・S

Fクラス 土屋康太 保健体育 572点

「……………私の総合科目並の点数。」

「こらそこ、幾らムツツリー二の点数が高いからって自分の点数の低さを露呈しない。」

「D・Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな。」

雄二が驚く優希を他所に説明をしてくれる。

本気を出せばこんなに凄かったのか。

「そ、そんな……この、ボクが……！」

愛子が床に膝を着く。

相当ショックだったんだね。

「これで三対二、Fクラスの手ですな。」

高橋先生の言葉にFクラスからは歓喜の声がAクラスは先ほど以上に顔を引き締めていた。

「……………」

このまま行けば確かに勝てるかもしれないがかし——。

「——。」

「雄二？」

「っ……………」

駒がないのだ。

Aクラスと渡り合えるだけの学力を持った者が既に尽きてしまっている。

王手を取ったものの実質三対三のイーブン。

「仕方ない……優希お前が「雄二。」……なんだ？」

雄二が優希に棒銀の役を任せようとしていたところに自分でも自然に口が出てしまった。

「——私が出る。」

「……………良いのか？」

「私も優希も大差ないよ。いいでしょ？」

「……………分かった。」

既にAクラスはFクラスからの代表を待っている。

私は一步、踏み出す前に私の愛すべき妹を見た。

吉井優希

——お願い、お姉ちゃんに一步踏み出す勇気を頂戴——。

ポカンと呆けたような顔をしている優希。

でも、それでいい。

お姉ちゃんにとってはその顔でさえも恐怖が勇氣に変わる。

「それでは、科目は何にしますか？」

科目選択権は向こうにある。

選択してきたのは数学。

「Fクラスの吉井さん、でしたか？ この勝負は貰いました。」

事実、Aクラスは先程よりも随分と落ち着きを取り戻していた。

ホツと胸を撫で下ろす者、次があると希望に満ちた目をしている者。

逆にFクラスはボルテージが下降気味にある。

次の代表で決める、適当に頑張ってくれればいい。

そんな気持ちが手に取るように分かった。

「試<sup>サモン</sup>獣召喚！！」

私の相手、神崎椎名さんが召喚獣を呼び出す。

Aクラス 神崎椎名 数学512点

「ご、五百点オーバー！？」

「さ、流石にこれは……。」

「操作技術で差を埋められるような点数じゃねえぞ……？」

今度はFクラスから驚きの声上がる。

無理だ、勝てない。

そんな雰囲気になっている。

Aクラスは勝利を確信していた。

代表に迫る点数なのだ、それも当然の事だろう。

霧島さんでさえも少し安堵したような表情をしていた。

ただ1人——木下優子を除いては……。

Side Yuko

状況は三対二。

向こうには多分、こちらに対抗するカードがないから棒銀の役が出てくるはず。

実質は三対三ね。

「仕方ない……優希お前が「雄二」……なんだ？」

そう思った矢先、Fクラスで異変が起きていたのに気付いた。

秋が……動いた。

「——私が出る。」

そういう秋の目には決意と恐怖の入り混じったような感情が渦巻いていたのに気付いた。

進み出てきた秋はスツと妹である優希の方へ視線を向ける。

数秒、視線を優希の方へ向けるところから再び向き直る。

その瞳には眼前までの恐怖が消えていたのに私は気付いた。

——ああ、負けちゃった。

その瞳を見た瞬間、私はそう思った。

秋の目は以前見たことがある。

本当に昔の頃……まだ秋が“神童”と呼ばれていた頃に。

「<sup>サモン</sup>試獣召喚!!」

神崎さんの召喚獣の点数がディスプレイに表示される。

512点、なるほど確かにそれは凄い点数なのだろう。

私でもかなり勉強しないと取れないような点数だ。

でも、それが何？

そんな点数、秋の前ではただのゴミに過ぎない。

彼女の才能は天才や神童なんて言葉が霞んで見えてしまう。

霧島さん  
代表でさえ子供のように思えてしまう。

天才  
私達とは次元が違う所にいる。

それが吉井秋なのだから――

Side Yuko out

「――試獣召喚サモン」

私も敵と戦う為に召喚獣を召喚する。

互いに対峙する私と神崎さんの召喚獣。

未だ、召喚の余韻のお陰でディスプレイに表示されている点数が見えない。

「点数なんて、確認する必要もないわ。早々に決着をつけてあげる  
! !」

神崎さんの召喚獣が突っ込んでくる。

400点以上もの差があると思っている神崎さんの召喚獣の動きは直線的。

まあ、400点以上の点数差があれば反応する事もできないだろうけど、それは何？

私に斬ってくれて頼んでいるの？

知らず、口元が吊上がるのを感じた。

——互いに交錯する。

そうしてディスプレイに点数が表示された瞬間、神崎さんの召喚獣は5寸刻みでバラバラに解体されていた。

Aクラス 神崎椎名 数学512点

V・S

Fクラス 吉井秋 数学1632点

静まり返る教室。

優子を除いて皆、何が起こったのか把握できていないらしく茫然としている。

「せ、1632点？ う、嘘でしょ？」

誰かがポツリとそう漏らした。

単一科目で1000点以上を叩き出した生徒なんて学園創設以来誰もいないだろう。

「御免ね、呆気なさ過ぎて。」

ただそれだけ言うと私はFクラスの陣営へと戻っていった。

「――勝者、Fクラス。」

その時、漸く脳内処理が追いついたのだろうFクラスは歓喜の聲に包まれる。

Aクラス戦は代表同士の対決の前に決着がついた。

それがこの戦争の結末。

第七戦は当然、行われる事なく終了し、こうしてFクラスがAクラスに勝つという快挙を成し遂げたのだった。

t o b e c o n t i n u e d . . . .

第14問 く試召戦争、決着く（後書き）

どうでしたでしょうか？

何だか自分的に呆気なさ過ぎた感が否めないのですが……。

秋の学力はチートです。

あの点数でまだ全力ではありません（笑）

やっちゃった ZE！

それでは、次回お会いしましょう。

ではではっ！

第15問 く私と優子と恋く（前書き）

題名から想像できる通りです。

はい、というわけで第17問です。

どうぞ！

## 第15問 く私と優子と恋く

### 問題

以下の問いに答えなさい。

『2人以上で協力して物事を行う時の、お互いの微妙な呼吸や調子  
を意味する諺を答えなさい。』

姫路瑞希の答え

『阿吽の呼吸。』

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

『蘇生作業。』

教師のコメント

諺ではありません。

坂本雄二・吉井優希の答え

『あ……！！』

『うん……！！』

教師のコメント

君達が仲が良い事は分かりました。

吉井秋の答え

『つつと言えばかあ。』

教師のコメント

正解です。

『つつと言えばかあ』の“つつ”と“かあ”の意味は諸説ありますが江戸時代に「      つうことだ。」に対して相方が「そつかあ。」と答えるだけで

互いに理解し合う様子を見た人々が「つつかあの仲。」と呼んだ事に由来すると言われています。

しかし、よく知っていましたね。

一般には阿吽の呼吸が知られていますが驚きです。

日之影黒刀の答え

『Ohと言えばNo。』

教師のコメント

『つつと言えばかあ』と書きたかったんですが不正解です。今は現代国語の時間です。

英語の時間ではありません。

バカとお姉と召喚獣

第15問    〈私と優子と恋〉

「四対二でFクラスの勝利です。」

Aクラス内にいた全ての生徒に対する高橋先生の締め台詞。

Aクラスの面々は悲痛に満ちた表情、そしてFクラスの面々は歓喜に満ちた表情と対照的な表情をしている。

「俺達の勝ちだな。」

「……うん。」

威風堂々と雄二が霧島さんに歩み寄る。

「……設備の交換は明日からでも良い？」

「ああ、構わないぜ。」

2人が着々と試召戦争の事後処理を行っていく。

でも、私はその後のことについては多くは知らない。

理由としてはその場からすぐに退出したのが主な原因。

だから、翌日から何故か雄二と霧島さんがいちゃいちゃ（雄二曰く付き纏われている）していることの理由や担任が福原先生から西村先生に変わっていることなど知る由もなかった。

＼Side K o k u t o ＼

Fクラスの皆が勝利の内に解散となった試召戦争。

だが、俺は何故か校庭へと呼び出され今こうしてその相手を待っている。

相手は誰かって……？

それは……ああ、来た来た。

「それで、俺に何か用か姫路？」

俺を呼び出したのは姫路。

試召戦争が終わった後、俺に近づいて来て「校庭で待っていてください……！」と顔を赤くしながら言われたのだ。

「あ、あの……日之影君。」

「何だ……？」

先程よりも頬を赤く染め上げる姫路。

「あの……その……。」

「??？」

もじもじとしながら中々言葉を口に出さない姫路。

一体どうしたんだろうか？

「わ、私と……。」

「……？」

漸く意を決したのか言葉を発する姫路。

頬は先程よりも赤い。

「私と………付き合ってくださいっ！っ！」

「………はあっ！？」

今何て言った？

付き合って欲しい？

「——買い物にか？」

「違います！ 恋人になってくださいって意味です！」

頬どころか耳まで赤く染めた姫路。

「——理由を聞いていいか？」

「……2年前、その……他校の生徒と喧嘩をしていましたよね？」

そう言えばそんな事もあったな。

「それも……他の女の子を庇って。」

「ああ……って見てたのか。」

「はい。」

あれは今から2年前の時。

偶々、とある路地裏を通りかかった時に不良生徒に絡まれている女子生徒がいたのを発見。

それだけだったのならば俺も何もせずに通り過ぎたのだからうそことかその不良生徒は女生徒の服を掴み脱がし始めたのだ。

女生徒は悲鳴を上げながら涙を流し男に懇願する。

俺はその不良生徒と女生徒を引き離し、半殺しにした。

その後、女生徒を家まで送り届けてその件は終わったんだが、まさか見られてるとはな……。

「その時の日之影君の姿……格好良かったです。お姫様を守る騎士みたいで……。」

「そうか……。」

「それに、日之影君は優しくて人を思いやる事が出来る人です。私は日之影君のそんなところが好きなんです。」

な、何か面と向かって言われると照れるな／／／

「……ホントはラブレターを渡してから告白するつもりだったんです。でも、面と向かって言った方がいいってある人から教えられて……。」

誰だ、そんなアドバイスをした奴は。

滅茶苦茶恥ずかしいじゃねえかつ！

姉貴か？

いや、優希の可能性もある。

「それで、あの……返事は？」

「——俺なんかで良いのか？ 俺は曰くつきの不良だぞ？」

「そんなの関係ありませんっ！ 日之影君が日之影君だから、私は——。」

「黒刀な。」

「え？」

姫路の台詞を遮る。

さつきから日之影君日之影君って他人行儀みたいじゃねえか。

「今度から黒刀って名前で呼べ。いいな？」

「じゃあ……！」

「ああ……こんな俺でよかったです。瑞希。」

そういうと姫路……いや瑞希の顔が明るくなり花のような笑顔を浮かべていた。

それに伴い、俺の顔も赤くなるのを感じた。

や、やっぱり恥ずかしいな。

「この後、暇か？」

「え、は、はい！」

「だったら、一緒に帰るぞ……。」

「はいっ！」

後日、この事が知られてFFF団に追われることになるんだがそれはそれとして今はこの時を楽しむか。

瑞希<sup>俺の女</sup>と一緒に。

Side Kokutout

まだ桜が花びらを散らし、校庭に降り積もる中、私は屋上に来ている。

正直、私は屋上が好きだ。

殆ど人が居なくて落ち着くし……。

「ふう……皆、驚いただろうな。」

単一教科での千点越え。

そんな生徒、学園の創設以来1人としていなかっただろう。

そう思うと――

「……嫌になる。」

自分で言うのもなんだけど、私は頭が良い。

それは周囲も知っていたし、自分もそう思っていた。

でも、それは小学校の時までだった。

それは“あの事件”の所為でもあったけれどそれ以上に……。

人としての範囲を超えていたのだ。

一度、気になって両親に内緒でこっそりIQテストをやってみた。

その結果は……測定不能。

普通、こういったテストを受ければ何かしらの結果が出るのが常だ。

でも、私の場合は測定不能。

結果が出なかった。

可笑しいと感じた私は姉さんに相談した。

何かの間違いだろうと言われたけど、私も最初はそう思っていた。

しかし、姉の解いていた中学の問題を数式を教えてもらってもいいのに簡単に解く事が出来たし、ネット上にある東京大学の入試問題なんて片手間で解く事ができた。

何にも知らなくても設問を見ればその答えと途中式が頭の中に浮かび上がり、それを自分が何の違和感もなく理解して使っている。

この事実には、私は恐ろしくなった。

それだけだったのならまだよかった。

偶々かもしれない、テレビで見たことがあったからなどと自分を誤魔化す事ができたのかもしれない。

でも、それはテストで出てくるような問題だけではなかった。

医療、工学、経済学などありとあらゆる方面に対してそれは起こっていた。

そうして決定的だったのはフェルマーの最終定理だった。

17世紀、ピエール・ド・フェルマーと呼ばれる数学者が遺した物で彼は「立方数を2つの立方数の和に分けることはできない。4乗

数を2つの4乗数の和に分けることはできない。一般に、冪が2より大きいとき、その冪乗数を2つの冪乗数の和に分けることはできない。この定理に関して、私は真に驚くべき証明を見つけたが、この余白はそれを書くには狭すぎる。」と述べ、その後の無数の数学者がそれに挑んだとされる大定理。

その定理自体はその定理が発表されてから360年後アンドリュー・ワイルズによって完全に証明されたとされている。

私は……アンドリューの発表した証明と全く違う新しい証明を導きだしてしまった。

たかだか10歳の子供がそんなことできるわけがない。

大の大人、それも数学のプロとも呼べる人達でも完全に証明するのに360年も掛かったその定理を僅か10年しか生きていない少女が導き出してしまった事実。

それに驚愕せずに一体何に驚愕すればいいと言うのか。

「……………っ。」

怖かった……ただ只管に。

頭が良いと言うのは良い事なのだろう。

現代でも頭がよければほぼ全ての人が順風満帆な生活を送れている。

でも、何事にも良すぎることはいけないのだ。

過ぎたるは及ばざるが如し、という風に頭が良すぎると言うことは決してその人にとって幸せに繋がるとは言えないから。

だから、だからこそ“あの事件”を起こしてしまったのだ。

もし、この事実にもっと早く気付いていれば“あの事件”を起こさずに済んだ。

大切な人を、傷つけずに済んだ。

「――。」

自らの力を過信して傲慢に満ちていた。

自分は他の人とは違う。

特別な存在なんだと思い込んでいた。

だから……だからっ！！

ガチャ――

不意に背後にある屋上の扉が開いた。

「――優子。」

そこにいたのは先ほど試召戦争で戦っていた幼馴染。

「どうしたの？ 急に輪から外れちゃってさ。」

輪から外れる……Fクラスの皆からって意味かな？

「ついてきたの？」

と、聞くと優子はただ黙って頷いた。

「どうして？」

「アンタが、秋が心配だったからよ。」

「私が……どうして？ 別に私は大丈夫だけど？」

今の私の内心に気付かれないように笑顔で優子に問いかける。

でも、優子の表情は変わらない。

寧ろ、先程よりも強張っているのが分かった。

「やっぱり、来て良かった。」

「え？」

優子の呆れながら言った言葉に私は思わず間の抜けた言葉を発していた。

「全然、大丈夫じゃないじゃない。」

優子の親指が私の頬を何かを拭くような仕草をして触った。

「そんな泣きながら笑って大丈夫とか言われても全然、そうは思え

ないじゃないの。」

泣きながら笑って……？

え……私、泣いてたの？

「その様子だと気付いてなかったみたいね。秋、さつきからずっと……泣いてたよ。」

「う、そ……。」

自分でも知らないうちに涙を流していたらしい。

「まだ……引き摺ってたの？」

「っ……！」

優子の言葉に体が強張る。

そうなのかもしれない。

ううん、きっとそう。

私はまだ“あの事”を引き摺ってる。

7年前のあの日の事を。

「私は……もう気にしてないよ？」

「……でも、あれは私の、罪だから……。」

ずっと気にしていた。

あの時のことを。

私が犯した過ちを……。

「皆、貴女の所為じゃない。10歳の子供に、秋が思ってるような責任を負わせるつもりは誰も無かったよ。」

「でも……っ！」

「でもも案山子もない！」

そこで初めて優子の言葉が荒くなる。

「あなたは悪くない。秋はよくやったわ。秋じゃなかったら……もつと酷いことになってた——！」

「っ——！」

「秋はいつもそうよ。背負う必要のないものまで不必要に背負って自分の所為だって思いこんでる！」

「そんなこと……。」

「じゃあどうして……どうして泣いてるの!？」  
なみだ

「そ、それは……。」

そう言われると返す言葉がない。

だって、優子の言う通りなんだから……。

「だから、秋は悪くない。例え世界中の人が秋を非難しようと私は秋が悪くないって信じてる！」

「……………！」

優子が私を強く抱きしめながら叫ぶように私の耳元で言った。

「——好きだよ。愛してる秋。」

「え？ 何を言って——。」

優子の告白に私は言葉を発しようとするも私の唇を何かが塞いだ。

それが、優子の唇だって気付いたのはそれから数秒経ってからだった。

静かに離れる優子の唇。

「秋が私をどう思っているかと私はずっと前から秋のことが好き。」

「優子……。」

今度は、私も自分が泣いている事に気付いた。

今度の涙はさつきと違う悲しい涙じゃない。

それは――喜びの涙だった。

「それに――。」

「??」

優子が言葉を一旦区切る。

「――それに秋の“力”頭の良さは皆を救う、優しい力だから。」

「っ!」

嬉しかった、そう言ってくれる人がいてくれたというのもそうだけ  
ど何より……

大好きな人  
優子にそう言われたのが何よりも嬉しかった。

だから………

「……う。」

「え?」

「ありがとう、優子。」

私の全ての思いを籠めて優子に感謝した。

その言葉にどれだけ、救われたことか。

おぞましいと思い疎み続けてきたこの力を優しい力だと言ってくれ

た。

それが何より救われた。

「——ねえ、優子。」

「なあに、秋？」

「私も、優子のこと——。」

万感の想いを籠めて優子に返事を告げると優子は花のような微笑みを浮かべていた。

そのことに、私もつい頬が緩むのを感じたのだった。

この後、家に帰ると頬を赤く染めた私に気付いた優希が何があったのかしつこく追求され恥ずかしさのあまりついコブラツイストと口メロスペシャルを決めたのは全くの余談である。

## Chapter 1 Fin

To the next stage . . .

## 第15問 く私と優子と恋く（後書き）

はい、というわけで17問でした。

秋たちでなく黒刀たちにも春がやって来ましたね。

でも、なんだが秋達の方はグダグダになってしまったような……。

第一章はこれで終了。

次回から第二章に移ります。

これからもどうか生暖かい目で見守ってください。

よろしくお願いします。

ではではっ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4399v/>

---

バカとお姉と召喚獣

2011年12月16日21時51分発行